債主ト其權ヲ同フスルニ至リタルノミナラズ、或ハ却テ其權力ノ强キモノアルニ至レリ。是レ埃及國ガ法權ヲ有セザルノ因テ起ル所ニシテ、則チ立會裁判所設立以前ニ在テハ、外國人ヨリ埃及政府ニ對スル訴訟ハ其條約面ニ於ケル埃及國ノ委員及ビ原告人所屬國ノ代理官相互ニ仲裁ス可キモノナリト雖モ、是所謂有名無實ノ條約ニシテ、此間固ヨリ適用スベキ法律ナクシテ、常ニ代理官ノ意見ニ從ヒ、以テ其訴訟ヲ終結シタリキ。而シテ代理官ノ意見タル或ハ偏頗ナル前例ヲ主張シ、又ハ新ニ不當ナル壓制ヲ行ヒ、只其國民ヲ偏愛シ、之ヲシテ內地住居ヲ容易ナラシムルノ目的ニ外ナラザリシ。

埃及國政府ハ進退殆ンド谷マリ、遂ニ名狀ス可ラザルノ手段ヲ行ヒ、僅ニ一事ヲ結了（債主ノ證書ヲ窃取セシメシコトアリト云フ）セシト雖モ、其他ノ事件ニ至テハ各國領事ノ嚴ニ攻擊スル所トナリ、却テ不正ナル申込若クハ過當ノ請求ヲ受クルニ至リ、則チ領事ノ權力遂ニ埃及國ノ財政上ニ及ビ、新ニ一法ヲ設クルニ非レバ又以テ奈何トモ爲シ難キ有樣ナリキ。

加之內外人民ノ訴訟ニ於テモ領事ノ裁判甚ダ公平ヲ失スルノミナラズ、或ル場合ニ於テハ一領事ニシテ一面ハ被告人トナリ、一面ハ裁判官トナリ、以テ其訴訟ヲ處理シ、甚シキニ至テハ其領事ノ如キ內國人ヨリ數年借受タル借家ニ對シ、當ニ其ノ家賃ヲ拂ハザルノミナラズ、其明ケ渡ヲ求ムルモ亦之ヲ承諾セザリキ（立會裁判所書記長伊國人ノ說ク所）ト云フ。果シテ此等ノ實例ナシトスルモ、理論上必ズ之ナキヲ保シ難キノミナラズ、譬バ刑事訴訟ノ如キ、領事ハ之ガ告訴者ニシテ又其豫審掛タリ、又其會議局員タリ、又其公判官タラザルヲ得ザル如キ領事裁判ノ不備ナル今更ニ之ヲ辯明スルヲ要セザルナリ。

又裁判ノ執行ヲ避クル爲メ、朝ニハ伊人トナリ、夕ニハ希臘人トナリ、千變萬化以テ債主ヲ損害スルコト少カラズ、在留外國人中最モ多數ナル希臘人ハ最モ能ク此技ニ長ゼリト云フ。

以上ハ立會裁判所ノ設立ヲ要スルノ原因ニシテ、其他詳細ノ始末ハ千八百六十七年八月某日ヲ以テ、內國議長（兼外務大臣司法大臣以下單ニ外務大臣ト云フ）スーバル、バシヤヨリ提出シタル報告書卽チ別冊第三號ニ於テ之ヲ明示ス。

第三章　立會裁判所創立手續

立會裁判所ハ埃及國外務大臣スーバル、バシヤ氏ガ同國政府ノ命ヲ受ケ周旋盡力シタルニ成ルモノニシテ、氏ハ全クヨルメニヤ人ニシテ、今猶蘇宗ヲ信奉スト雖モ、埃及國政府ノ重任ニ當リ、而シテ其國ヲ改革セシモノハ實ニ同氏ノ力ナリト謂ハザルヲ得ズ。論者或ハ之ヲ伊國宰相カブール氏ニ比スト雖モ其國ヲ思フヤ蓋或ハ之ニ近シ。然レドモ其ノ功績ニ至テハ殆ンド年ヲ同フシテ語ル可ラザルナリ。

立會裁判所ヲ設立セントスルヤ、最初之ヲ埃及國ニ關係ヲ有スル諸國ニ謀レリ。其言ニ曰ク、現行ノ慣例ニ從フトキハ外國人ト埃及人ノ訴訟ニ於テハ常ニ外國人ノ勝ヲ得ルコト、領事ノ裁判ハ大ニ埃及國ノ慣習ヲ破却スルコト、及ビ所屬ヲ異ニスル（十七ケ國）諸國民間ニ於ケル訴訟ハ之ヲ裁判スル裁判所ナキコト、是ヲ以テ立會裁判所ヲ設置スルハ彼我双方ノ利益ナル可シト。

スーバル、バシヤハ其使ヒシタル諸國ニ於テ頗ル鄭重ナル待遇ヲ受ケタリト雖モ、其ノ請求ノ點ニ至テハ蓋甚ダ冷遇セラレタリキ。

外國人民中埃及國ニ在住スル者ノ最モ多キハ希臘人ナルヲ以テ、希臘政府ハ埃及國ト關係ヲ有スルノ最モ大ナルモノナリ。然レドモ該政府ハ全ク此請求ヲ拒絶シ、而シテ佛國ニ於テハ該裁判所ノ設立ニ付特ニ取調委員ヲ設ケ、以テ其利害ヲ講究セシメタル處、該委員ハ千八百六十七年ヲ以テ領事裁判所ヲ廢スルヨリ生ズ可キ危害ヲ痛論セリ。而シテ諸外國亦此委員ノ報告書ヲ信任シ、現ニ米國領事ヨリ其本國政府ニ送リタル信書ニ依ルモ、立會裁判所ノ不可ナルヲ辯ゼリ。要スルニ當時各關係諸國ノ報告委員ハ全ク該裁判所ノ設立ヲ不可トスルニアリキ。

スーバル、バシヤハ各關係ヲ有スル諸國ニ於テ、未ダ滿足ナル返答ヲ與ヘザリシヨリ、更ニ關係ヲ有セザル諸國、之ヲ細言セバ關係ノ最モ僅少ナル諸國（獨魯ノ如キヲ云フ）ニ對シ更ニ同一ノ請求ヲ試ミタル處、殆ンド意外ナル好結果ヲ得タリ。何トナレバ是等ノ諸國ハ領事裁判所ノ廢スルモ敢テ危難ヲ受ク可キ恐ナキノミナラズ、爲メニ埃及國ノ甘心ヲ得テ將來同國ニ關係シ、且已ニ同國ニ對シ勢力ヲ有スル諸國ノ權勢ヲ削減センコトヲ欲シタルガ爲メナリ。

此承諾ヲ得ルニ付テハヌーバル、バシヤハ非常ノ苦心ヲ爲シ、且非常ノ賄賂ヲ行ヒタルノミナラズ、歐洲諸國ノ新聞紙ヲシテ特ニ此請求ヲ贊成セシムルコトヲ勉メタリ。（ペドン、ローレー氏曰ク某新聞ノ如キハ賄賂ノ爲メ枉テ之ヲ贊成セシハ現其社主ノ說示スル所ナリト）

以上ノ手續ニ依リ各國政府ハ其取調ノ名義ヲ以テ之ガ委員ヲ派出セシ處、其名義ハ忽チニ變化シ遂ニ立派ナル原案ヲ作爲スルニ至レリ。

抑モ佛國ニ於テハ領事裁判所ヲ廢スルヲ以テ大ナル不利益ナリトシ、飽ク迄原案ニ反對セシト雖モ、當時恰モ普佛戰爭ノ不幸（千八百六十九年）ニ際シ已ムヲ得ズ之ヲ承諾セザルヲ得ザルニ至リ、希臘ノ如キモ枉テ之ヲ承諾シタリキ。何トナレバ若シ强テ反對ヲ主張スルニ於テハ空シク孤立スルノ結果タラザルヲ得ザレバナリ。

此裁判所設立ニ付會議ヲ開キタルコト前後數回ニシテ、就中千八百六十九年十一月六日ニ於テ盡ク反對諸國ノ意見ヲ消殺シ遂ニ原案ヲ制定シタリキ。

此會議ハカイロ府ニ開キタルモノニシテ其委員ノ國名及ビ人員左ノ如シ。

澳	二
西	人
太	
利	
亞	

北獨逸	二人	
英吉利	二人	
伊太利	二人	
魯西亞	二人	
佛蘭西	二人	
米利堅	一人	
埃及	二人	

右ノ外書記トシテ代言人一人ヲ埃及政府ヨリ撰任セリ。

此會議ノ當時ニ在テ各國人民ノ埃及國ニ在留スル人員ハ左ノ如シ（ルーピエ氏ノ統計表）

希臘	二四、六〇〇
佛	一七、〇〇〇
伊	一三、九〇六
澳	六、三〇〇
英	六、〇〇〇
獨	一、一〇〇
波	五〇〇
西	七九〇

魯、和、白、瑞典、丁葡、米及ビ其他ノ人民

千八百七十九年ニ至リ其人員ヲ變更シ、卽チ伊太利ハ增テ一四、五二四トナリ、佛ハ減ジテ一四、三一〇トナリ、澳ハ二、四八〇、英ハ三、七九五、獨ハ八七九ノ如ク亦各其數ヲ減ジ、米ハ一三九、魯及ビ其他ノ人民ハ三五八トナリタリ。

右ノ外千八百七十年四月、千八百七十三年一月十一日及ビ同年二月十五日カイロ政府及土京「コンスタンチノプル」ニ於テ開キタル會議ハ其最モ重要ナルモノニシテ、終ニ埃及國立會裁判所ヲ設立スルノ決議ヲナシタリ。

ヌーバル、パシヤハ裁判所ノ設立ヲ希望スルヤ極メテ切ナリ。當時如何ナル報酬ヲ與フ可キヤト問ヘバ唯其望ム所ニ從フト云ヒ、如何ナル法律ヲ適用スベシヤト云ヘバ、先ヅ其裁判所ヲ設立スベシ、然ル後適用スベキ法律ヲ論ズベシト答ヘタリ。

然レドモ外國政府ニ於テハ適用スベキ法律ヲ豫定スルノ必要ナルヲ述ベ、其ノ請求嚴重ナリシヨリ爾來僅ニ數月ヲ出ズ埃及政府ハ遂ニ民法、民事訴訟法、商事訴訟法、海上商法、陸上商法竝ニ刑法、治罪法ノ原案ヲ制シ、之ヲ萬國會議ニ提出シ、以テ其認可スル所トナリ、千二百二年「シヤスレ」月第十六日ヲ以テ埃及國王ノ名義ヲ以テ之ヲ全國ニ布告シ、千八百七十二年十月十八日

ヨリ之ヲ施行スベキモノトセリ。此法律ハ別冊第四號ニシテ單ニ立會裁判所ニノミ施行スル所ノモノナリ。其内國裁判所ニ依ルモノハ別冊第五號ニ於テ之ヲ規定ス。

新法制定ノ時ニ當テ埃及政府ハ之ヲ佛國ノ某法家ニ依托セシト雖モ、土人ノ風習及ビ要用ナル規則ヲ破却スルコトナク、以テ歐米十七ケ國ノ人民ニ適合ス可キ法律ヲ制スルハ蓋爲シ難キノ業ナリトシ、遂ニ之ヲ謝絶シタリキ。抑々現行法律ハ恰モ佛國法典ノ寫眞ニシテ地中海岸ノ諸國ノ如キ已ニ久ク羅馬法ニ慣熟シタルモノニ於テハ二三ノ缺典アルヲ除クノ外以テ相當ナル法律ナリトスルモ、英國ノ如キハ大ニ之ヲ嫉視シ、常ニ其改正ヲ企圖スト云フ。若シ夫レ英法ノ主義ヲ採用セントセバ、從來ノ慣習ヲ破滅シ、地中海ノ商業ヲシテ爲メニ行フヲ得ザルニ至ラシムル亦知ル可カラズ。而シテ此改革タル未ダ必ズ之ナキヲ保シ難キノ勢ナリ。

右ノ外數多ノ困難ヲ經タル上、佛國代理官ハ千八百七十四年十一月十五日、獨國代理官ハ千八百七十五年五月五日、英國代理官ハ千八百七十五年七月三十一日、其他ノ諸國亦各其月日ヲ異ニシ埃及政府ノ全權委員ヌーバル、バシヤト共ニ立會裁判所設立ノ條約書ニ署名調印シタリキ。

此裁判所ハ五年間試ニ之ヲ設立スベキ條約ニシテ、各國全ク其主旨ヲ同フシ、則チ何レモ佛國ノ條約ニ比擬シタルモノナリト云フ。左ニ佛國ニ係ル條約ノ要旨ヲ記載シ、其詳細ハ別冊第六號卽チ各國條約書ニ之ヲ讓ル。

佛國總領事ト埃及國司法大臣トノ條約拔書

千八百七十五年十二月十七日佛國議院決定。同年十二月二十五日ヲ以テ大統領之ヲ批准ス

第一條　ハ詐僞ノ身代限ノ告訴ハ是迄ノ通犯罪者ノ裁判所ノ管轄タルベキコト。

第二條、三條　ハ佛人ノ裁判官及ビ檢事ヲ任命スルコトニ關ス。

第四條　ハ埃及ノ法律審査ニ關ス。

第五條　ハ新設裁判所ハ人事ニ關スル事件ノ判決ヲ爲スノ權ヲ有セズトノコト。

第六條　ハ新裁判所ノ諸局組立ニ關ス（佛國政府及澳西太利亞政府ハ外國人ニ關スル事件ノ裁判ヲ爲ス。裁判官内ノ一名ハ可成其事件ニ關スル訴訟人ノ同國人タラシメンコトヲ請求シタルニ、埃及政府ハ此點ニ付其事務ヲ規定スル任アル新ナル裁判所ノ注意ニ付セシムベシト約束セリ）

第七條　ハ外國領事ノ有シタル特權特許等茲ニ其領事附屬官吏ガ外交慣例ニ依リ竝ニ現行條約ニ依リ有スル所ノ特許特權等ハ從前ノ通之ヲ保存スルコトナリ。但佛國ノ保護ヲ受タルカトリキ宗ノ寺院ニ付テモ亦同樣ノ契約ヲ爲シタリ（各國公使ノ有スル治外法權ヲ云フ）

第八條　ハ新法及ビ新制度ハ既往ニ及ボスコトナカル可シトノコト。

第九條、十條　ハ已ニ埃及政府ニ對シ起リタル要求ニ付假ノ處分法ヲ揭ゲタリ。

第十一條　ハ同時ニ諸國ニ屬スル訴訟人ニ關シタル事件ノ已ニ受理シタルモノハ其諸國互相ノ總領事館ニ於テ約シタル方法ニ依テ裁判スベシトアリ。

第十二條　ハ右ノ事件ノ規則ヲ行フコトハ新裁判所ヲ設ルト同時ニ之ヲ始メ且之ヲ行フ間繼行スベキ旨ヲ定メリ。

千八百七十五年卽チ立會裁判所新設ノ際裁判官又ハ檢察官ノ派出セシ諸國左ノ如シ。

英吉利　澳西太利亞　北米　獨逸　伊太利　魯西亞　白耳義　和蘭陀　瑞典　希臘　佛蘭西

以上ノ官吏ハ裁判所構成法第五條ニ基キ各國政府ノ指名シタル所ニシテ、別冊第七號契約書ノ如ク各本人ト埃及政府トノ間ニ取結ビタル條約、及ビ別冊第九號ノ如ク埃及國王ノ布告ニ依リ初メテ希臘ニ任ゼラレタルモノナリ。

先是カイロ及アレキサンドリアニ商事立會裁判所アリ。外國人ト內國人間ノ商事ニ關スル訴訟ヲ管轄シ、其裁判長ハ內國判事ニシテ埃及國王之ヲ撰任シ、其陪席裁判官ハ內外國ノ商人中ヨリ各二名ヲ撰定シ、則チ五人ノ裁判官ニ依リ裁判スベキモノナリシ。然レドモ裁判長固ヨリ外國關係事件ヲ裁判スルノ能力ナク、陪席裁判官亦法律ヲ解セザルヲ以テ、通常外國ノ法律家ヲ以テ書記官トナシタルガ故ニ、實際ノ能力ハ該書記官ニ屬セシコト諸外國商事裁判所ニ於テ往々見ル所ノ如クナリシト云フ。

因ニ言ク、外國商人ハ領事ニ於テ之ヲ撰定シ、內國商人ハ埃及政府之ヲ撰任シ、則チ外國商人撰定ノ手續ハ左ノ如シ。

各國領事ハ其所屬商人ノ氏名錄ヲ作リ之ヲ領事長ニ差出シ、領事長ハ其會議ノ爲メ該氏名錄ニ登記セラレタル商人ヲ召集シ、十二人ノ本官十二人ノ豫備官ヲ選擇セシメ、各自二ケ月位出勤

ノ割合ヲ以テ其氏名錄ヲ作リ之ヲ裁判所ニ提出シタリキ。但該商人ハ名譽官ニシテ一切給料ヲ受クルコトナシ。

此裁判所ハ訴訟人双方協議ノ上出頭スルトキハ通常民事ト雖モ之ヲ裁判スルノ權ヲ有セリ。

又一方ノ裁判所ハ他ノ裁判所ノ裁判ニ對スル訴訟ヲ裁判シ、卽チカイロ政府ノ商事立會裁判所ハアレキサンドリア府商事裁判所ノ始審裁判ニ對スル控訴ヲ受理シ、各裁判所互ニ終審裁判ヲ行フベキ規則ナラン。

右ノ管轄權其他別冊立會裁判所構成法ニ記スル所ノ事件ハ盡ク之ヲ新設裁判所ニ移シ、千八百七十六年一月一日以來其事務ヲ執行セリ。

第四章　第一欵

立會裁判所實況及慣習

前章已ニ記述セシ如ク此裁判所ハ五年間ノ期限ヲ以テ試ニ之ヲ設立セシモノニシテ、千八百七十六年以來滿五ケ年ヲ經過シタル後、卽チ千八百八十年十二月六日ヲ以テ埃及政府ヨリ構成法修正案ヲ提出シ、千八百八十一年四月廿三日ヲ以テ委員會ニ於テ議決シ、引續キ萬國會議ヲ開カントスルニ當リ、恰モアラビー、パシヤノ內亂ニ遭際シ、遂ニ之ヲ行フコトヲ得ズ。爾來三歲前條約ニ準據シ、依然該裁判所ヲ存設シ、千八百八十三年ニ至リ更ニ新ナル條約ヲ結ビ、卽チ千八百八十四年ヨリ以後五年間之ヲ繼續スベキモノトナシタリ。而シテ不動產書入質其他二箇ノ修正案ハ千八百八十四年五月十七日ヲ以テ各國委員ノ署名スル所トナリタリ。然レドモ本國政府ノ批准ヲ得ザル爲メ、未ダ之ヲ執行スルニ至ラズト云フ。但其會議ノ顚末ハ別冊第十號ニ於テ之ヲ詳述ス。

構成法第一條ニ於テハ亞歷山得カイロ及ザガシツクノ三府ニ始審裁判所ヲ置クトアリ。然レドモザガシツクノ地タル故ラニ裁判所ヲ設置スルノ必要ナシトシ、之ヲイスマイリアニ移シ、其後更ニ之ヲ廢シ、現今ハアレキサンドリヤ、カイロノ二始審裁判所アルノミ。（別冊第十一號參照）

此時ニ當リ廢止シタル裁判所ノ官吏ハ盡ク之ヲ二ケノ裁判所ニ移シタルノミナラズ、事務ノ增加スルニ從ヒ、裁判官ノ需要ヲ生ジ、先ニ檢事ニ任ゼラレタル外國人ヲ以テ且之ヲ裁判官ニ轉任シ、而シテ其檢事ノ欠ハ內國人ヲ以テ之ニ補充シタリ。故ニ外國人ニシテ檢事ノ職ニ在ル者ハ現今控訴院中僅ニ一名アルノミ。（別冊第十二號參照）

事務ノ增加ハ啻ニ裁判官ノ增加ヲ要スルノミナラズ、裁判所ノ數亦之ヲ增加セザルヲ得ザルガ故ニ、立會裁判所ハ其應サニ必要ナルベキヲ察シ、別ニ始審裁判所ヲ增置スベキ旨ヲ述ベ、數日前之ヲ埃及政府ニ勸告シタリ。但其場所ハマレスロート云ヒ綿ノ產地ニシテ頗ル取引ノ繁多ナル

土地ナリト云フ。

各始審裁判所ニハ外國人四名內國人三名、卽チ七名ノ裁判官ヲ以テ組織スベキ法律ナリト雖モ、前ニ述ブル如キ次第ニ依リ各裁判所各裁判官ノ數ヲ增加シ、カイロ始審裁判所ノ如キハ外國裁判官ノミニテ已ニ八名ノ多キニ至レリ。

裁判ハ外國判事三名內國判事二名卽チ裁判官五名ヲ以テ之ヲ行フモノトス。

右ノ如ク法律上已ニ內國ニ不利ナルノミナラズ、其實況ニ至テハ誠ニ驚嘆スベキ有樣ニシテ其名則チ立會裁判所ナリト雖モ、其實殆ンド外國裁判所ニ異ルコトナキナリ。

埃及國ノ立會裁判所ヲ設立セシ目的ハ自己ノ國民ヲシテ法權ノ幾部ヲ掌握セシメンコトヲ欲スルヨリハ、寧ロ不正ナル裁判ヲ避ケンコトヲ求ムルニ在リキ。夫レ國民ヲシテ法權ヲ掌握セシムルコト美ハ則美ナリ、然レドモ埃及國ノ開化未ダ此ノ如ク洽カラザルガ故ニ、外國判事ト對立シテ其職ニ任ズル者蓋未ダ之ナカリキ。是ニ於テカ內國人ニシテ立會裁判所ノ判事ニ任ゼラル、者ハ唯僅ニ佛語ニ通ズルノミニシテ毫モ法律ヲ辯知セザル者ナリ。左ノ一語ヲ以テ內國判事ノ狀態如何ヲ察スルニ足ルベシ。

新任判事某所長ノ紹介ニ依リ各裁判官ニ面會シ一應ノ挨拶ヲ終ヘタル後、更ニ所長ニ請フ所アリ曰ク、小官未ダ法律ヲ知ラズ、故ニ數日ノ休暇ヲ得テ法律ヲ閱讀シ然ル後初メテ職ニ就カン

ト、一座大笑所長亦固ヨリ之ヲ諾セリト。

右ノ如ク內國判事ハ學識ノ以テ裁判官タルニ適セザルノミナラズ、其長所タル佛文ノ如キモ其力未ダ以テ裁判書ヲ草スルニ足ラザルガ故ニ、訴訟件數ハ通常之ヲ外國判事ニノミ分配シ、內國判事ハ唯其法廷ニ陪坐スルニ過ギズ。然レドモ數年陪坐ノ效亦以テ空カラズ、現今ニ至テハ闕席裁判其他已ニ判文ノ印刷シタル事件ニ付テハ直ニ內國判事ヲ以テ專任タラシムルヲ得ルニ至レリト云フ。世人或ハ謂ラク外國判事ト內國判事ノ間ニ於テ屢々意見ヲ異ニスルコトアリテ往々圓滑ナルヲ得ザルモノアラント。其レ然リ。然ルニ其實況ニ至テハ已ニ記載セシ所ノ如ク其權衡恰モ師弟ノ間柄ナルニ異ルコトナシ。

裁判所長ハ內國人ヲ以テ之ニ充テ、國王自ラ之ヲ撰任シ、而シテ外國判事中ノ一名ヲ撰任シ、副長ノ名義ヲ以テ事務ヲ總理セシム。但其副長ハ外國判事及內國判事ノ投票ニ依リ過半數ヲ以テ之ヲ撰定スベキモノトス。

右ノ法律ニ依リ撰任セラレタル副長ハ其任期一年ニシテ、實際所長ノ職ヲ執行シ、眞ノ所長ハ所謂有名無實ニシテ一年一回卽チ裁判所ノ總會ニ出席スルニ過ザギルナリ、（實ノ存スル所名之ニ從フ本文ノ如ク外國判事ハ法律上副長ナリト雖モ自己ノ名刺ニ於テ明カニ所長ト記載スルノミナラズ曾テ白耳義國商法萬國會議ニ出席シタルトキニ於テモ公然立會裁判所長ノ官名ヲ揭ゲリ）裁判所ノ總會トハ每年十月ノ後半ニ於テ開設スルモノニシテ、次回ノ行務年度（十一月一日ヨリ十月三十一日ニ至ル）ノ爲メ副長及其代理官ヲ撰

ビ、竝ニ各判事ノ席順ヲ定ムル等ノ事ニ從事ス。但其撰定ハ各裁判官ノ投票ニ依リ決ス。

因ニ曰ク改正法律草案ニ於テハ始審裁判所長ハ控訴院ニ於テ之ヲ擔任スルモノトナシ、已ニ其議決ヲ經タルヲ以テ次回ヨリシテ執行スベシト云フ。

此總會ニ於テハ各裁判官ノ分課及ビ暑中休暇ノ割合ヲモ定ムベキモノニシテ、副長ハ自ラ撰ム所ノ課長トナシ（通常民事課長トナル）副長ノ代理官ハ亦自ラ撰デ其他ノ課長トナリ（通常商事課長トナル）其次席判事ハ其他ノ課長卽チ通常第二民事課長トナルナリ。其他ノ裁判官ニ付テハ開會前曾テ各員ヨリ內聞シタル所ニ從ヒ副長自ラ原案ヲ製作シ、總會ノ意見ヲ聽キタル上之ヲ決ス。其暑中休暇ノ割合ニ付テモ亦同ジ（カイロ始審裁判所ノ規定ニ於テハ外國判事三人ハ暑中其地ヲ離ルヽコトヲ保サルモノトス）

開廷期日ハ亦總會ニ於テ之ヲ定ム。但其決定シタル期日ハ組合ノ承諾ニ依リ裁判長ニ於テ臨時之ヲ變更スルコトヲ得ルト雖モ、永久之ヲ變更シ又ハ全ク之ヲ廢止スルコトヲ得ザルモノトス。

右分課及ビ開廷期日ノ割合ハ別冊第十三號ニ於テ之ヲ表示ス。

商事ニ關スル事件ニ付テハ外國商人一名ヲ以テ參審官（アッセソル）トナシ、其裁判ニ參坐セシム。但其商人ハ撰擧法ニ依リ撰任セラルヽモノニシテ、其他ノ裁判官ト同一ノ權アルモノトス。商人判事撰擧ノ手續ハ本篇第三章ニ於テ登記セシ所ノ如ク、抑モ商人判事ノ必用ナルヤ否ハ一箇ノ問題ニシテ、第　篇商法裁判所實況慣習報告書ニ於テ已ニ之ヲ論ゼリ。立會裁判所ニ於テモ此論未ダ全ク一定セズト雖モ所謂商人判事ハ多ク鑑定人ノ智識アルガ故ニ、偶々事實ノ疑問ヲ質サントスルニ當リ、故ラニ之ヲ喚起スルノ勞ヲ省クベシトノ論ニ至テハ蓋シ之ヲ非難スルモノナキナリ。若シ夫レ之ヲ裁判官トシテ論ズルトキハ通常駁スベキ議論ノ外特ニ此裁判所ニ於テ不都合ナルモノアリ。何トナレバ內國商人判事ハ殆ンド全ク佛語ヲ解セズ、而シテ訴狀其他訟廷ノ辯論ハ常ニ佛語ヲ用フルガ故ニ、該判事ハ徹頭徹尾訴訟ノ何タルヲ辯ゼザルコトアルヲ以テナリ。加之始審ノ訴訟ヲ裁判スル爲メ五人ノ裁判官ヲ用フル猶且之ヲ多トス、況ヤ商人判事ヲ加フルガ爲メ七名ノ多キヲ要スルニ於テヲヤ。

立會裁判所設立ノ當時ニ在テハ商事ト民事ニ付無用ノ管轄爭ヲ爲シタル者又頗ル多カリシト雖モ、其後控訴院ノ判決例ニ依リ漸ク之ヲ決定シタルヲ以テ現今殆ンド其爭ヲ絕ツニ至レリト云フ。

因ニ曰ク、控訴院判決錄ハ開廳以來ノ判決ヲ編集セシモノニシテ其冊數券以テ參考ニ供スベキモノトシ、該院長ヨリ之ヲ寄贈セリ。別冊第十四號是ナリ。

控訴院ハアレキサンドリヤ府ニ之ヲ設ケ、內國人四名外國人七名ヲ以テ組織スベキモノトセリ。然レドモ其後更ニ員數ヲ增加セシコト前章已ニ述ブル所ノ如シ。

外國判事中ノ一名ヲ以テ副院長トナシ、全院ノ事務ヲ總理セシム。其撰任ノ方法ハ每年ノ總會ニ於テ投票ヲ用フル等始審裁判所副長撰任法ニ同ジ（現院長ハ伊國人ナリ）

控訴院ノ職務ハ恰モ我控訴院、大審院竝ニ司法省ノ職ヲ兼行スルモノヽ如ク、始審ノ裁判ニ對スル控訴ヲ審理シ、其裁判ハ直ニ終審ノ裁判ニシテ又更ニ上告スルノ道ナク、而シテ立會裁判所全般ノ庶務ハ盡ク控訴院ノ處分ニ屬シ、埃及政府ハ殆ンド全ク關係ヲ有スルコトナシ、則チ立會裁判所ノ費用ハ其入額ヲ以テ支辨スベキ方法ニシテ、若シ其入額其出費ヲ支辨スルニ足ラザル場合ニ限リ政府ヨリ之ヲ補充スルノ責アルニ過ギズ。

然レドモ設立後二三年間ヲ除クノ外入額常ニ其出費ノ高ヲ超ヘ、則チ開廳以來官吏ノ俸給ヲ初メ一切ノ諸入費ヲ除キ去リタル後政府ニ送致シタル金額已ニ八百萬法ニ至レリト云フ。

論者曰ク（始審裁判所書記長伊國人）控訴院ニシテ裁判權ト行政權ヲ兼行スルハ甚ダ不可ナリ。然レドモ立會裁判所設立ノ當時ニ在テハ埃及政府ノ智力未ダ以テ此行政事務ヲ掌理スルニ足ラザルガ故ニ、便宜之ヲ控訴院ニ委ネタルモノナリ。今ヤ政府ハ此權ヲ恢復スルヲ以テ理論實際兩方ナガラ其便益ナルヲ證セリ。然レドモ歐洲諸國蓋多クハ其權ヲ損スルヲ肯ゼザル可キナリ。

控訴院ハ二局ニ分チ外國判事五名內國判事三名ヲ以テ裁判ヲ行フ。但各局同一ノ事務ヲ負擔シ、民事商事ニ付之ガ區別ヲ設クルコトナシ。是控訴院ニ於テハ商人判事ヲ置カザルコト歐洲諸國ノ裁判所ニ於ケル商事ニ對スル控訴ノ處分ト同一ノ手續ナルヲ以テナリ。

行務年度ノ初メニ於テ各裁判官ノ分課ヲ定ムルコト始審裁判所ノ手續ニ同ジ。而シテ其事務ヲ各課ニ分配スルハ所長ノ任ニシテ、各裁判官ノ能力ニ從ヒ之ヲ斟酌セザルヲ得ザルコト亦以テ驚嘆スベキモノアリ。是全ク外國判事ノ能力ニ關スル問題ニ屬スルヲ以テ、後チ外國判事撰任手續ノ部ニ於テ之ヲ開述スベシ。

控訴院及始審裁判所裁判官ノ員數ハ其必要ナル場合ニ於テハ之ヲ增加スルコトヲ得、但內國人ノ間ニ定メタル割合（始審ハ內國人三名外國人四名內國人四名外國人七名ノ割合ヲ云フ　控訴ハ四名）ヲ變更スルコトヲ得ザルモノトス。

控訴院又ハ始審裁判所ニ於テ同時ニ數名ノ裁判官差支アリテ其裁判官外國判事ナルトキハ、控訴院長ハ他ノ始審裁判所又ハ控訴院ノ外國判事ヲ以テ代理セシムルコトヲ得。

控訴院裁判官ニシテ始審裁判官ノ代理ヲナストキハ常ニ其上席ヲ爲スベキモノトス。

判事ノ任命及撰擇ハ埃及政府ニ屬ス。然レドモ其撰任セラル可キ者ニシテ其任ニ適スベキ確認ヲ受ル爲メ埃及政府ヨリ私ニ外國ノ司法省ニ照會シ其撰擇ヲ囑託スベシ。但當人ノ承諾及外國政府ノ承諾ヲ得ルニ非レバ之ヲ任命スルコトヲ得ズ。

右ノ法文ハ構成法第五條ニ明記スル所ニシテ。埃及國政府ノ權限ニ關スルノ最モ大ナルモノナリ。而シテ此明文ニ從フトキハ埃及國政府ハ外國判事ノ任命ハ勿論其取捨一ニ自己ノ權內ニ屬スルハ毫モ疑フ可カラザルナリ。

金科玉條ノ美アリト雖モ之ヲ執行スルノ勢力ナキニ於テハ是レ徒法ノミ。憫ムベシ埃及國政府

ハ右ノ正條ヲ設ケタルニ拘ハラズ、判事ノ任命ニ外國政府ノ左右スル所ニ從ヒ、其自ラ欲セザル所ノ者猶且之ヲ採用セザルヲ得ズ。左ノ一話ハ埃及國ノ勢力如何ヲ察スルニ足ル。

瑞典政府ハ其國人某ヲ以テ埃及政府ニ推薦シ判事トナサンコトヲ請フ。控訴院評定官某埃及國外務大臣ニ面接シ該被撰者ノ病人ナルヲ以テ宜ク之ヲ拒絶スベキ旨ヲ告グ。而シテ外務大臣亦其實ヲ知リ瑞典政府ニ告テ曰ク、貴國ノ推薦ニ系ル某氏ハ其人物ニ付毫モ異議スベキ所ナシト雖モ、聞ク所ニ依レバ同氏ハ疾病ヲ有シ劇職ニ堪フルノ人ニ非ルガ如シ。故ニ願クハ他人ヲ以テ之ニ代ヘヨト。瑞典政府ハ之ニ答フルニ、當人ハ病者ニ非ルノ一言ヲ以テシ强テ之ヲ推薦シ、遂ニ埃及政府ノ採用セザルヲ得ザル所トナリ、現今猶其職ヲ全フスル能ハザルコト曾テ期セシ所ノ如クナリト云フ。

弱ノ肉ハ强ノ食、埃及國ハ歐洲人ノ療治湯ナリトハ立會裁判所及ビ外國官吏ノ雇使セラル、埃及國官署ニ於テ最モ多ク行ハル、所ノ事實ニシテ、外國政府ハ立會裁判所判事トシテ當ニ病人ヲ送ルノミナラズ、政府ヨリ恩給若クハ優待ヲ受クベキ者、又ハ政府ノ有力者ニ因故アル者ハ亦以テ此任ニ適スベキモノ、如ク、米國政府ハ陸軍將官（ゼネラール）ヲ以テ判事トナシ、其人タル曾テ法律ヲ學ビタルコトナキノミナラズ、就中裁判所ノ用語（阿語佛語及ビ伊語）ヲ解セザル者ナルガ故ニ、自ラ專任判事タルヲ得ザルノミナラズ、訟廷ニ在テモ唯其員ニ備ハルニ過ギズ。其他西班牙ノ如キハ詩人ヲ以テ判事トナス。要スルニ判事中其自國ニ在テ裁判官タル可キ資格アル者ハ伊佛獨及ビ一二ノ小國ヨリ派遣シタル者ニ止リ、英魯（魯人ハ三人中一人ハ法律ヲ解ス然レドモ懶怠ニシテ亦其職ニ適セズ）及ビ、澳人ノ如キハ亦以テ立派ナル裁判官ト稱スルヲ得ザルナリ（澳國政府ハ僅ニ一年間法律ヲ學ビタル者ヲ推薦セリ）

右ノ如キ有樣ナルガ故ニ、有力者ハ常ニ多忙ニシテ無能力者ハ殆ンド無事ニ、若シ其繁閑相異ルコト曾テ其例ヲ見ザル所ナリト云フ。

某判事言ヘルアリ、曰ク立會裁判所ノ法律ニシテ明カニ其裁判官ノ執行スル能ハザルモノアリ。夫レ訴訟法ニ從フトキハ裁判ハ辯論終結後直ニ之ヲ言渡シ、又ハ遲クモ一週間ヲ過ルコトヲ得ザルナリ。然ルニ其期限ノ經過スルコト當ニ一週間ノミナラズ、其長キハ往々月ヲ以テ數フルモノアリト、亦以テ判事ノ能力如何ヲ察ス可キナリ。

判事任命ノ手續不正ナルガ故ニ、其得タル所ノ結果上文記述スル所ノ如シ。是埃及國政府ノ大ニ苦慮スル所ニシテ、今回同國外務大臣ガ立會裁判所ノ不備ヲ論ズルニ當リ、此點ヲ以テ第一ノ要因トナシタリ。其細說ハ後章ニ於テ之ヲ記スベシ。

控訴院及ビ各始審裁判所ニハ書記一名書記補數名通辯官及使吏若干名ヲ置ク、但使吏ハ公廷ノ事務書類ノ送達及ビ裁判ノ執行ヲ爲スベキモノトス。

書記使吏及通辯官ハ第一次ハ埃及國政府ヨリ之ヲ任命シ、且其書記ハ第一次ハ外國人ヲシテ現ニ司法所屬官吏タルカ又ハ曾テ其職ヲ奉ジタル者又ハ外國ニ於テ同樣ノ職ヲ行フ可キ資格アル者ヲ以テ之ニ任ズ。

書記使吏及通辯官ハ其所屬裁判所ニ於テ免黜スルヲ得ベキモノトス。

書記補以下ノ官吏ト雖モ重要ノ職ニ當ル者ハ盡ク外國人ナリ。此種ノ小吏ハ舊法ニ於テハ書記長之ヲ推擧シ、而シテ所長之ヲ任命セリ。然レドモ新法ニ於テハ所長自ラ選任シ單ニ書記長ノ意見ヲ聽クノミ。故ニ是等小吏ノ缺員アルトキハ常ニ所長ノ同國人ヲ以テ之ニ充ルノ慣例ナリ。然レドモ大過失等アル場合ニ非レバ之ヲ免黜スルコトナキヲ以テ、所長ノ交代アリト雖モ小吏ニ於テ自ラ其ノ進退ヲ憂フルガ如キコトナク、現ニカイロ始審裁判所ノ如キハ開廳以來僅ニ二名ノ免黜セラレタル者アルノミ。書記ノ職之ヲ數種ニ分ツコト普通裁判所ノ例ニ異ルコトナク、就中不動產書入質及賣買ノ公證ニ關スル事務公證人ノ事務及會計ハ其區別ノ大ナルモノニシテ、盡ク書記長ノ主管ニ屬シ、且公證等ノ事務ハ判事ノ檢閱ヲ受クベキモノナリ。左ニ公證ニ關スル手續ノ一斑ヲ記スベシ。

公證ニ關スル事務ハ双方ノ契約ニ出ルモノアリ、裁判ノ執行ニ原因スルモノアリ。

公證ノ出願アリタルトキハ通辯官ニ於テ先ヅ之ヲ反譯シ、而ル後原文ト共ニ之ヲ掛書記ニ差出シ書記ハ之ヲ帳簿ニ登記ス。

事務ノ繁多ナルガ爲メABC順ヲ以テ數局ニ分テリ。帳簿ノ種類數種アリ。證書ノ謄本帳見出帳及ビ一件始末帳ノ如キ是ナリ。

一件始末帳ハ七欄ヲ設ケ、第一欄ハ番號、第二ハ日時抄第三ハ債主若クハ買主、第四ハ負債主若クハ賣主、第五ハ契約又ハ事柄ノ要領、第六ハ物件ノ性質、第七ハ備考ナリ。

右ノ帳簿ハ毎日午後五時頃書記ニ於テ之ヲ閉鎖シ、其旨ヲ記シタル上之ヲ掛判事ニ差出シ、判事ニ於テ之ニ署名スベキモノナリ。然レドモ實際ニ於テハ判事ハ一週一回若クハ二回裁判所ニ出席シタル時併セテ之ニ署名スルヲ常トス。

此帳簿ノ番號ハ千八百八十七年卽チ本年一月中已ニ一萬二千餘號ノ多キアルニ至レリ。埃及人ノ財產ヲ失フヤ以テ推知スベキナリ。

會計ノ事之ヲ略記スル亦蓋必用ノ業ナルベシ。則チ立會裁判所內會計局ヲ置キ諸稅及ビ豫納金ヲ徵收シ、及ビ入用金ノ支拂ヲ爲スニ供シ而シテ各部ニ帳簿ヲ備フル等通常會計事務ニ異ルコトナシ。

抑モ會計事務ハ書記長ノ主管（小吏ヲ扶助スル爲メ俸給ノ幾部ヲ前貸スル如キハ書記長ノ權內ニ在リト云フ）ナルヲ以テ、毎月ノ勘定表及ビ三ケ月毎ニ作ル勘定表及ビ其年表ノ如キ盡ク書記長ノ署名ヲ要シ、而シテ始審裁判所副長ヲ經テ差出シ同院ノ支配ヲ受クルモノナリ。其製表ノ如キ亦通常手續ニ同ジ。

毎月或ハ毎三ケ月又ハ臨時ニ控訴院ヨリ檢查官ノ出張アリテ諸帳簿及ビ諸勘定ヲ檢查シ、書記長ト共ニ其調書ヲ作リ之ニ連署スルモノトス。

現金及ビ印紙ヲ保存スル金匣アリ。卽チ印紙ハ此局ヨリ賣渡スガ爲メナリ。此局其他局中重立タル官吏ハ皆歐洲人ニシテ、一々反譯ヲ要スルカ又ハ直ニ外國文ヲ用フルノ不便ナルニ拘ラズ、故ラニ之ヲ使用セザル可ラザル所以ノモノ、一ハ以テ其國ノ勢力ナキト一ハ以テ文化ノ進マザリシニ因ルモノナリト云フ。

立會裁判所ノ入額其費用高ヲ超過スルコトハ先ニ述ル所ノ如ク、昨年度ニ於テモ既ニ數多ノ金額ヲ餘セリト云フ（書記其他附屬吏員ニ關スル規則及ビ會計法ハ別册第十五號第十六號參照）

立會裁判所ニ於テハ內國人ト外國人トノ間又ハ外國人ニシテ相互ニ其國ヲ異ニスル者ノ間ニ起ル民事竝ニ商事ノ訴訟ヲ裁判ス。但人事ハ此限ニ非ズ。（構成法第九條）

舊商事立會裁判所ニ於テハ所屬ヲ異ニスル外國人間ノ訴訟ハ之ヲ管轄スルコトヲ得ザリシト雖モ、此法律ニ依リ少ク其權ヲ擴張シ、則チ領事裁判所ハ其同國人間ノ訴訟ヲノミ管轄スベキモノトナリタリ。

加之假令同國人間ノ訴訟ト雖モ、不動產ニ關スル訴訟ハ亦立會裁判所ノ管轄ナリトス。

埃及國政府又ハ其諸官署又ハ其王族ト外國人間ノ訴訟ハ亦立會裁判所ノ管轄ニ屬ス。（構成法第十條）

右ノ法律ハ埃及國ガ立會裁判所ヲ設置スルノ一大眼目ニシテ則チ不正ナル裁判ヲ避クルノ要具ナリトセリ。近時カイロ裁判所ノ訟廷ニ於テモ埃及國政府ニ關スル訴訟頗ル多ク、人ヲシテ該裁判所ハ單ニ政府ニ關スル訴訟ヲノミ裁判スルカノ疑ヲ生ゼシムル程ナリキ。聞ク所ニ依レバ該裁判所設立以來數年ニ在テハ政府ニ關スル訴訟實ニ夥多ナリシト雖モ、現今ハ殆ンド其跡ヲ絕チタルノ勢ナリト云フ。埃及國政府ノ困難又以テ察スベキナリ。

立會裁判所ハ公用土地買上ニ付テノ裁判ヲ爲スコトヲ得ズ。又行政處分ノ執行ニ付解釋ヲ爲シ、又ハ其執行ヲ停止スルコトヲ得ズ。但民法ニ定メタル場合ニ於テ官廳ノ處分ニ依リ外國人ノ已得權ヲ妨害スル時ハ此限リニ非ズ。（構成法第十一條）

立會裁判所ハ外國人ヨリ宗旨ニ關スル事物（寺院、學校ノ類ヲ云フ）ニ對シ其占有スル不動產ノ取戻ヲ訴フル場合ニ於テハ亦之ヲ裁判スルコトヲ得ズ。但原告被告ノ如何ヲ問ハズ法律上ノ占有事件ニ系ル訴訟ノ判決ヲ爲スニ付テハ此限リニ非ズ。（構成法第十二條）

外國人ハ不動產ノ占有者タルト所有者タルトヲ問ハズ、其不動產ニ付書入質ノ登記ヲ爲シタル上ハ其書入質ノ效力ニ付判決ヲ爲シ、且書入質ヨリ生ズル事項ニ付テハ立會裁判所ノ管轄スベキモノトス。不動產强賣及其代價ノ分配ニ付テモ亦同ジ。（構成法第十三條）

始審裁判所ハ其判事中ノ一名ヲ以テ治安裁判官ノ名義ヲ用ヒ、訴訟法ニ定メタル事件ヲ裁判シ且勸解ヲ行フベキ者ヲ命ズ。（構成法第十四條）

立會裁判所中別ニ治安裁判所ヲ設置セズ、前文ノ法律ニ從ヒ始審裁判所內ニ一局ヲ設ケ、其判

事ハ一ケ年ノ期限ヲ以テ行務年度ノ初メニ於テ之ヲ定メ外國判事ヲ以テ之ニ充ツベキモノナリ。

治安裁判官ノ職權卽チ其裁判スルヲ得ベキ金額ヲ增加スベシトハ多ク聞ク所ノ論ナリシ。何トナレバ該治安裁判所ノ管轄ニ歸スベキ金額ハ諸外國治安裁判所ト同一ニスルヲ得ザルノ理由アルヲ以テナリ。抑モ諸外國始審裁判所ハ通常三人ヲ以テ組織スト雖モ、立會裁判所ニ於テハ通常五人ノミナラズ。商事ニ付テハ七人ノ多キヲ要シ、從テ其手續鄭重ナラザルヲ得ザルガ故ニ、微々タル訴訟ハ之ヲ始審裁判所ニ委ヌルヨリ寧ロ之ヲ治安裁判所ニ委ヌルノ便利ナルニ如カザルナリ。且此論ノ生ズルヤ之ヲ相當ノ能力アル一治安裁判官ニ委ネタルハ之ヲ多數ノ始審判事ニ委ヌルト大差ナキノ實況ナルニ原因スルモノアリキ。

訟廷ノ高座ニ併列スル者ハ裁判官檢察官及ビ書記ニシテ、裁判官ノ坐席ハ行務年度ノ初メニ於テ豫定シタル順序ニ從ヒ、且檢察官ハ民事ト雖モ訟廷ニ參坐シ、其席ハ裁判官ノ右方ニシテ書記ハ裁判官ノ左側ニ陪坐ス。

裁判官ノ席ヲ下ルコト一階則チ其席ノ前面ニ於テ使吏二名左右ニ併列シ、訴訟人呼上ゲ及ビ法廷取締ノ役ニ供セリ。（通辯官ヲ用ユルトキハ亦此間ニ列席スベキモノナリ）裁判官檢察官及書記ハ各服制アリ、則チ黑色（フロック）ノ上衣（コート）ニ赤帽ヲ冠シ、及ビ朱色ノ肩掛（サシ）ヲ帶ビ、且其肩掛ニハ阿羅比亞語ヲ以テ正理ハ王位ノ基ト刻シタル金章ヲ付セリ。但書記ノ肩掛ニハ朱色ノ外別ニ崩黃色ノ一條ヲ添ヘリ。

其他訟廷ノ位置ハ普通裁判所ニ異ルコトナシ。

裁判所ニ於テ辯論書類竝ニ裁判書ノ爲メ使用スベキ國語ハ阿羅比亞語、伊太利亞語及ビ佛蘭西語ナリキ（構成法第十六條）

然レドモ英國政府ノ申立ニ依リ、以後英語ヲモ裁判所ノ用語ト爲スベキコトナリ不日之ヲ實行スベキ筈ナリ。

右ノ如ク法理上英語ヲ以テ裁判ノ用語トナスト雖モ、裁判官及ビ代言人ニ於テ精ク英語ニ通ズル者極メテ少キガ故ニ、實際上行ハルルコトナカル可シトハ現ニ英國判事ノ自認スル所ナリ。然ルニ英國政府ノ此申出ヲ爲シタル所以ノモノハ、英國法律ノ精神ヲシテ漸次立會裁判所ニ侵入セシムルノ目的ニシテ亦是政略ノ一ナリト云フ。

國語卽チ阿羅比亞語ヲ以テ裁判所ノ用語トナスト雖モ、阿語ヲ解スル者ハ全ク少數ニシテ、無力ナル內國人ニ過ギザルヲ以テ訴訟人ニシテ阿語ヲ用ユルトキハ通辯官之ヲ佛語ニ通譯スルヲ以テ常トシ、其實裁判所ノ用語ハ佛語ヲ用フルト云フニ異ラザルナリ。

裁判ハ之ヲ公行ス。然レドモ社會ノ秩序及ビ治案ニ妨害アル場合ニ於テハ裁判所ノ判決ヲ以テ傍聽ヲ禁ズルコトヲ得。但訴訟人ニ於テ自己ノ辯護ヲ爲スコトハ固ヨリ自由ナリトス。（構成法第十五條）

立會裁判所ニ於テハ訴訟人ナル者代言人ヲ用フルノ義務ナシ。

控訴院ニ於テ原被ノ代理ヲ爲シ辯護ヲ爲スタメ認可セラルヽ者ハ代言人ノ免許ヲ受クルモノタルベシ。（構成法第十七條）

裁判官ノ辛苦勉强スルニ拘ラズ、猶且訴訟ノ遲滯ヲ生ズルハ代言人ノ不備ナルニ原スルコト蓋シ疑フ可ラザルノ事實ニシテ、立會裁判所ノ如キモ代言人其人ヲ得ザルガ爲メ、遲滯ヲ生ズルコト甚ダ多ク、則チ一二ノ代言人ヲ除クノ外ハ百餘ノ代言人殆ンド其職ニ適セズ、所謂埃及國ハ歐洲諸國ニ在テ衣食スルコト能ハザル者ノ流寓スル所ニシテ、代言人社會ニ於テモ亦未ダ此感ナキ能ハズト云フ。

立會裁判所ノ代言人タル可キ手續ハ概略左ニ記スル所ノ如シ。

志願人ハ自己ノ履歷書ヲ添ヘタル願書ヲ作リ、之ヲ代言人組合長又ハ控訴院ニ差出シ、代言人檢事及裁判官ヨリ成立タル委員ニ於テ試驗ヲ行ヒタル上之ヲ許否ス。試驗ニ及第シタル者ハ控訴院付代言人ノ名義ヲ得テ代言人人名表ニ登記シ、之ヲ裁判所內ニ揭示ス。

毎年代言人人名表ヲ作リ之ヲ裁判所ニ揭示ス。其表ノ第一欄ハ人名、第二欄ハ住所、第三欄ハ免許ヲ受タル年月日

控訴院及始審裁判所ノ裁判官ハ其條約期限間ハ免黜スルヲ得ザルモノトス。

始審裁判官ニシテ控訴院ノ裁判官トナリ、又ハ他裁判所ニ轉ズルコトハ當人ノ承諾ヲ受ケ且其所屬裁判所ノ意見ヲ聽キ控訴院ノ會議ヲ經タル上ニ非ザレバ之ヲ行フコトヲ得ズ。

裁判官書記書記補通辯官及使吏ノ職業ハ給料ヲ受クベキ他ノ職業ト兼務スルコトヲ得ズ。又同時ニ商業ヲ行フコトヲ得ザルモノトス。

裁判官ハ埃及國行政官署ヨリ名譽又ハ物件上ノ褒美ヲ受クルコトヲ得ズ。

裁判官ニシテ俸給ノ外增額又ハ金錢若クハ物件ノ贈達ヲ受クルトキハ之ヲ免黜シ、且其俸給及賞金ヲ訟求スルノ權ナキモノトス。

抑モ始審裁判所ノ裁判官ハ年俸千二百磅（一ケ月我金貨五百圓）控訴院裁判官檢事長ハ年俸千六百磅ニシテ、且條約滿期後卽チ五年目毎ニ各一ケ年ノ俸給ニ均シキ賞與金ヲ受クベキモノトス。前文ノ賞與金ヲ訟求スルトハ則此賞與金ヲ云フナリ「所長及ビ院長ノ俸給各同僚裁判官ト同一ナリ」而シテ內國裁判官ハ何レモ前項ニ定メタル俸給ノ半額ヲ受クベキモノトス。

裁判官及裁判所々屬官吏竝ニ代言人ノ懲罰ハ控訴院ノ權內ニ屬ス。

判事ノ品格ヲ害シ又ハ發議權ノ自由ヲ保ツ能ハザル事實ニ對シ、之ニ施ス懲罰ノ方法ハ單ニ免職ノ一方ニ止リ、且之ガ爲メ俸給及ビ賞金ヲ訟求スルノ權ナキモノトス。

代言人ノ品格ヲ害スルヨリ生ズル事實ニ對スル懲罰ハ之ヲ除名スルニ止マルモノトス。

懲罰判決ハ控訴院ノ總會ニ於テ出席シタル裁判官ノ四分ノ三ニ該當スル多數ニ依リ之ヲ行フ。

判事懲罰ノ爲メ各領事館ヨリ埃及政府ニ送致シタル申立書ハ之ヲ控訴院ニ移牒シ、控訴院ニ於テハ該事件ノ取調ヲ爲サヾルヲ得ザルモノトス。

檢事局ヲ置キ檢事長ヲ以テ其局長トナス。

埃及政府ト諸外國トノ條約ニ於テハ檢事長ハ外國ノ人ヲ以テ之ニ充ツベシトアリテ、最初ハ白耳義人ヲ以テ檢事長トナシタリ。然ルニ其退職以來別ニ檢事長ヲ置カズ、其次席タル檢事佛人（アボカゼネラル）某氏爲メニ檢事長ノ職ヲ代行シ、最初ハ檢事長代理ノ名刺ヲ用ヒタリト雖モ、現今ニ至テハ代理ノ字遂ニ消失シ暗ニ諸外國ノ物議スル所ナリト云フ。

控訴院及各始審裁判所ノ例ニ於テ訟廷立會及ビ司法警察ノ事務ヲ行フ可キ檢事補數名ヲ置キ檢事長ノ配下ニ從屬スベキモノトス。

第一期ニ在テ檢事長及檢事都合十二人ハ盡ク外國人ヲ以テ之ニ充テタリ。然ルニ第二期卽チ千八百八十四年ニ於テハ檢事長ノ職ヲ行フベキ者ノ外總テ內國人ヲ以テ之ニ代ヘリ。是第一期ニ於テハ內國人ニシテ其任ニ適スル者ナカリシト雖モ、其後佛國等ニ於テ習學シタル者漸次歸國シ、漸ク其人ヲ得タルニ因ルト云フ。然レドモ學力固ヨリ深カラズ加フルニ年少且經驗ニ乏シキガ故ニ亦以テ大ニ望ム可ラザルナリ。

檢事長ハ控訴院及始審裁判所ノ諸局竝重罪裁判所控訴院及始審裁判所ノ總會ニ立會フコトヲ得。

又構成法第廿九條ニ於テハ檢察官ハ何時ニテモ轉免スルヲ得ベキモノニシテ、埃及國王ヨリ之ヲ任命ストアレドモ、是亦埃及國ノ隨意決行スルヲ得ズシテ常ニ外國ノ關涉ヲ受クルコト裁判官撰擧ニ異ルコトナシ。然ルニ前ニ述ベシ如ク盡ク內國人ヲ以テ之ニ充ツルコトヲ得シ所以ノモノハ、外國檢事ヲ以テ盡ク裁判官トナシ以テ其品位ヲ高メタルニ因ルナリ。

訴訟人ハ裁判官及通辯官ノ忌避シ及ビ飜譯ニ付故障ヲ申立ルノ權アルモノトス。

立會裁判所ハ內外人ノ間ニ於ケル土地質入賣買等ノ事務及ビ公證人ノ事務ヲ執行スルコト我治安裁判所及ビ公證人ノ如ク、而シテ此事務ハ通常訴訟事務ニ比スレバ頗ル繁ニシテ裁判所ノ入額中最モ多キヲ占ムルモノナリ

右ノ事務執行ニ付テハ構成法第三十一條乃至第三十四條ニ於テ之ヲ定メタリ其要左ノ如シ。

始審裁判所各書記局ニ於テハ內國地所支配局「メーケメ」（宗旨ニ屬スル土地公證局ヲ云フ）ニ屬スル書記一名ヲ置キ土地賣買ノ公證ヲ補助シ且「メーケメ」ニ送致スベキ書類ヲ作ル可キモノトス。

各國ノ言語ヲ以テ製シタル證書ノ書式ハ新設裁判所開業前一ケ月內ニ政府ヨリ之ヲ發布シ、各縣各領事廳各裁判所及控訴院ニ備ヘ置クベシ。

又埃及政府ハ內國人ノ身分ニ關スル法律裁判入費規則又ハ水運土地鑿河竝ニ堤防ニ關スル法律ヲ制定スベキコトヲ約セリ。是等外國人ニ關スル法律ハ總テ外國政府ノ認諾ヲ得タル後始メテ之ヲ制定スルヲ得ベキモノニシテ、則チ右ノ手續ヲ經テ執行スルニ至リタル者、別冊第十七號十八號及第廿一號是ナリ。

構成法第三十七條ニ依レバ控訴院ニ於テハ訟廷取締裁判所內取締裁判所官吏及ビ代言人取締代(コンダ)人(ター)ノ職務、貧人保護忌避ノ權執行及ビ控訴院ニ於テ裁判官ノ意見平分シタル場合ニ於テ之ヲ決スベキ方法ニ關スル規則ヲ草スベシトアリ。該草案ハ之ヲ始審裁判所ニ送致シ其意見ヲ求メタル上更ニ控訴院ノ會議ニ代リ之ヲ決定シ、然ル後之ヲ司法省ニ送致シ同省ノ布告トシテ之ヲ發行スベキモノトス。(コンダテールトハ小事件ニ付裁判所ニ出ルヲ得ベキ代人ノ類ニシテ代言人タルノ能力ナキモノナリ)トアリ。

代人ノ弊害タル到ル處其趣ヲ一ニシ、則チ立會裁判所ニ一例アリ。曰ク某訴訟人代人ニ托シテ訴訟ヲ起サシメ爾後數月ヲ經ルニ及ブモ訴訟未ダ終結セザルノミナラズ、掛官ニ賄賂ヲ行フニ非ラザレバ勝味ナキ旨ヲ以テ屢々依賴人ヨリ金錢ヲ取立、此ノ如クスルコト已ニ三年ニ及ベリ。是ニ於テカ依賴人始メテ疑惑ヲ生ジ、之ヲ檢事局ニ訴ヘ同局ニ於テハ直ニ其取調ヲ爲シタル處、曾テ右等ノ訴訟ヲ起シタルノ形迹ダモ見ル能ハザリキト。是代人規則ノ必要ナル所以ナリ。

又控訴院ノ裁判官ハ偶數ヲ以テ裁決スベキモノナルガ故ニ、議論平分ノ場合ニ於テ之ヲ判決スベキ方法ナカル可ラズ。而シテ其要則タル常ニ外國判事ノ多キ派ヲ以テ可決スベキモノニシテ、譬バ一方ハ外國人三名內國人一名、他ノ一方ハ外國人二名內國人二名ナルトキハ、其數ニ於ケル彼此何レモ同數ナリト雖モ常ニ外國人三名ノ方ヲ以テ勝ヲ得セシム可キ類ノ如シ。

右規則其他前項ノ規則ハ別冊第十九號ニ於テ之ヲ詳示ス。

新法施行ニ付別ニ左ノ三則ヲ設ケタリ。

第一條　裁判所ハ民事及商事ニ付開廳後一ケ月間ハ立會事件ト雖モ其取扱ヲ初メザル可シ。

第二條　立會裁判所開廳ノ當時ニ於テ已ニ領事廳ニ受理シタル事件ハ從前ノ手續ニ從ヒ之ヲ判決スベシ。若シ訴訟人ニ於テ關係人ノ承諾ヲ得タル上立會裁判所ノ裁判ヲ受ケンコトヲ請求スルトキハ之ヲ許可スルコトヲ得。

第三條　新法及ビ新裁判所構成法ハ既往ニ及ボスコトヲ得ザルモノトス。

以上ハ立會裁判所全般ノ形狀ヲ寫載シタルモノナリト雖モ、民事及ビ商事ニ關スル構成上ノ形況ニ屬スルモノ極メテ多シ。依テ後款別ニ刑事ニ關スル法律ヲ揭ゲ彼此對照以テ此篇ノ目的ニ達センコトヲ庶幾ス。

第二款

埃及國政府ハ立會裁判所ヲシテ刑事ノ管轄權ヲ有セシメントスルヤ亦切ナリ。依テ屢々之ヲ諸大國ニ請求シ、刑法治罪法ノ如キ已ニ諸大國ノ議決ヲ經タルモノアリト雖モ、現ニ管轄スルヲ得ベキ者ハ違警罪及ビ一二ノ重輕罪ニ過ギズ。則チ重罪ノ如キハ開廳以來已ニ十有餘年其間僅ニ一件アリシノミ。而シテ豫審ノ如キハ裁判執行ヲ抗拒スル場合ニ於テ往々此入用アルヲ見ルノミ。此故ニ刑事ノ實況ニ付テハ別ニ登載スベキモノナク、單ニ法律ノ正條ヲ抄譯シ聊カ以テ參觀ニ供スト爾云フ。

刑事

第一條　外國人ノ被告タル違警罪事件ヲ處分スベキ違警罪判事ハ裁判所中外國判事ノ一名タルベシ。

第二條　重罪取調局ハ輕罪ト重罪トヲ問ハズ、何レモ土人一名外國人二名即チ判事三名ト外國人四名ノ候補（アツツセツル）ヲ以テ組立ツベシ。

第三條　輕罪裁判所モ亦同一ノ組織タル可シ。

第四條　重罪裁判所ハ判事三名即チ土人一名外國人二名ヲ以テ組織ス。陪審官十二名ハ外國人トス。

右諸般ノ場合ニ於テ若シ被告人ノ請求アルトキハ候補及ビ陪審ノ半數ハ被告人所屬ノ國人タルベシ。

第五條　被告人數名アル場合ニ於テハ各被告人ハ陪審及ビ參審（アツツセツル）ニ付同數ノ自國人ヲ請求スルノ權アリ。但其定數ヲ輸ユルコトヲ得ズ。（アツツセツルトハ獨逸國治罪法ノ所謂セツフエント其職ヲ同フシ則チ輕罪ノ公判ニ付裁判長トナルヲ得ザルノ外他ノ裁判官ト同一ノ職權ヲ有シ而シテ其成立ハ陪審ト異ルコトナシ但參審及ビ陪審撰擧ノ手續ハ本篇第六章ニ於テ之ヲ定ム）

第六條　違警罪及ビ左條ノ重罪及ビ輕罪ノ被告人及ビ其共犯者ニ對スル告訴ハ立會裁判所ノ管轄ニ屬ス。

第七條　裁判官檢察官陪審及ビ裁判所ノ官吏其職務ヲ行フ際其者ニ對シ行ヒタル重罪及ビ輕罪即チ（第十條參看）

一　暴行形容又ハ言語ヲ以テ凌辱シタル者。

二　誹毀讒謗但裁判官檢事官陪審及ビ裁判所付屬官吏ノ面前ニ於テスルカ又ハ裁判所ノ邸內ニ於テスルカ、又ハ筆記印刷彫刻若クハ判ジ物ニ依リ廣布シタル場合ニ限ルモノトス。

三　右等ノ者ニ對スル暴行但豫謀アリタルト否トヲ問ハズ、毆打傷害及ビ殺人ノ所爲ヲ含ムモ

ノトス。

四　不正又ハ不法ナル處分ヲ受ケンコトヲ求メ、又ハ正當ナル處分ヲ受クルコトヲ避ル爲メ右等ノ者ニ對スル暴行脅迫。

五　前同樣ノ目的ヲ以テ右等ノ者ニ對シ官吏ニ於テ爲シタル讒毀。

六　右等ノ者ニ對シ直接ニ賄賂ヲ行ヒタル未遂罪。

七　訴訟人ノ一方ノ利益ヲ受ル爲メ官吏ヨリ裁判官ニ對シ依賴ヲ爲シタル罪。

第八條　裁判執行又ハ呼出狀送達ノ際其者ニ對シ直接ニ行ヒタル重罪及ビ輕罪卽チ

一　裁判官ノ職ヲ行フ場合ニ於テ其者ニ對シ又ハ裁判執行若クハ呼出狀送達ノ爲メ正當ニ其處分ヲ爲ス場合、其者ニ對シ又ハ其執行ヲ補助スベキ管財人若クハ公力者ニ對シ暴行又ハ毆打シテ攻擊若クハ抵抗スル場合。

二　裁判執行ヲ妨ル爲メ管掌ノ官吏ニ於テ越權ノ處分ヲナシタル者。

三　前同樣ノ目的ヲ以テ裁判所ノ書類ヲ盜ム者。

四　裁判所ノ封印ヲ破毀シ又ハ裁判若クハ命令ニ依リ差押ヘタル物件ヲ盜ム者。

五　拘留狀若クハ裁判ニ依リ拘留セラレタル者ノ逃走及ビ其逃走ヲ爲サシメタル者。

六　前條ノ逃走者ヲ隱匿シタル者。

第九條　裁判官檢察官陪審ニ於テ其職ヲ行フニ當リ、又ハ其職ヲ汚シタルヨリ生ズル重罪及ビ輕罪卽チ前項ノ作業ニ付右等ノ者ニ歸スベキ普通ノ重罪及ビ輕罪ノ外別ニ左ノ件ヲ行フ。

一　偏愛若クハ怨恨ノ爲メ不正ニ爲シタル裁判。

二　收賄。

三　賄賂ヲ行ハントシタル場合ニ於テ其事情ヲ漏告セザル者。

四　裁判ヲ行フコトヲ拒ム者。

五　訴訟人ニ對シ暴行ヲ爲シタル者。

六　正當ノ式ヲ用フルコトナク家宅ニ侵入シタル者。

七　威迫。

八　官金ヲ盜ム者（官金取締ノ方法頗ル密ナルコト後段會計ノ部ニ於テ記スル所ノ如シ然ルニ往々此種ノ罪ヲ犯スモノアリ上文所謂立會裁判所開廳以來一件ノ重罪アリタリトハ卽チ此犯罪タリシノミナラズ今度アレキサンドリヤニ到着ノ前一日同所始審裁判所書記補ニシテ官金ヲ扱フ者二名亦此種ノ罪ヲ犯シ一ハ其旨ヲ詳記之ヲ所長ニ差出シ其書ノ未ダ所長ノ手ニ達セザル前自ラ裁判所ノ高窓ヨリ飛ビ落チテ卽死シ他ノ一名ハ捕縛ノ上現ニ糺問中ナリシ）

九　不當ノ拘引。

十　裁判書及官文ノ僞造。

第十條　前數條ニ記載シタル裁判所官吏トアルハ書記宣誓ヲ爲シタル書記補裁判所譯官及使吏本

官ヲ云フ。但臨時雇人ノ者ハ此限リニ非ズ。

裁判官中ニハ候補官（アツツセツル）ヲ含入ス。

第二卷　外國人ニ對スル違警罪輕罪及重罪ノ裁判ニ關スル治罪法

第一章

第十一條　若シ領事中ノ一員ヨリ裁判官又ハ裁判所官吏ニ對シ犯罪アルコトヲ告知シタルトキハ政府ニ於テハ其告知次第檢察官ヲシテ出席セシムベキ義務アルモノトス。

第十二條　重罪及輕罪ニ　十二字缺　ハ領事裁判所ニ移スベキ下調ノ目的タルベシ。

第十三條　被告人所屬ノ領事ハ立會裁判所ニ於テ其被告人ニ對シ重罪又ハ輕罪ニ付吟味ヲ始メタルトキハ直ニ報知ヲ受クベキモノトス。

第二章　豫審

第十四條　訊問及ビ辯論ハ被告人ノ知ル所ノ國語ヲ用フベシ。

第十五條　外國人ニ係ル豫審ヲ爲ス者及ビ裁判ニ付上席ヲ爲ス者ハ外國判事タルベシ。但違警罪輕罪及ビ重罪ニ付テモ總テ同一ナリトス。

第十六條　重罪及ビ輕罪ノ被告人ニシテ辯護人ヲ差出サヾルトキハ、其審問ノ節直ニ一名ノ辯護人ヲ撰任スベシ。否ラザレバ其審問ノ手續ハ無效ナリトス。

第十七條　埃及國ニ於テ充分ナル拘留場ヲ設置シタルコトヲ證明スル迄ハ、假ニ捕押ベタル被告人ハ一應審問ノ後且遲クモ二十四時間內ニ之ヲ領事ニ引渡スベシ。但領事ニ於テ埃及國ノ監倉ニ留置スルコトヲ承諾シタル時ハ此限リニ非ズ。

第十八條　豫審判事ニ對シ又ハ公判廷ニ於テ陳述ヲ肯ンゼザル證人ハ、輕罪ニ付テハ一週間以上一月以下、重罪ニ付テハ三月以內ノ禁錮ニ處シ、又ハ右兩樣ノ場合ニ於テ百ピアストル以上四百ピアストル以下ノ罰金ニ處セラルベシ。

前項ノ處分ハ本事件ヲ管轄スル始審裁判所又ハ控訴院ニ於テ之ヲ行フ。

第十九條　證人若シ被告人ノ父母子孫兄弟姉妹又ハ之ト同等ナル配遇者ノ親屬及ビ既ニ離婚シタリト雖モ其配遇者タルトキハ、其陳述ヲ忌避スルコトヲ得、但檢事民事原告人又ハ被告人ノ異議ナキ場合ニ於テ陳述スルハ無效ノ限ニ非ズ。

第二十條　被告人ノ家宅搜索ノ場合ニ於テハ之ヲ其所屬領事ニ報告スベシ。

其報告ヲ爲シタルトキハ其調書ヲ作ル可シ。調書ノ謄本ハ詰問（ランツルベレーション）ノ當時ニ於テ之ヲ領事館ニ留置クベシ。

第二十一條　輕罪ノ現行犯ニ於ケル場合又ハ家宅内ヨリ援助ヲ求メタル場合ニ非レバ、領事又ハ其代理者ノ立會ナク夜間家宅内ニ入ルコトヲ得ズ。

第三章　裁判管轄爭ニ關スル規則

第二十二條　會議局ヲ開ク三日以前領事又ハ其代理官ノ書記局ヘ取調書類ヲ送致スベシ。否ラザレバ審理ノ手續ヲ以テ無效トス。

第二十三條　若シ書類ノ送致ヲ爲シタルヨリ被告人所屬ノ領事ハ該件ハ自己ノ權内ニ屬スルヲ以テ其裁判所ニ交付セラル可キモノナリト云ヒ、立會裁判所ニ於テハ該件ヲ其裁判所ノ管轄ナリト云フ場合ニ於テハ、控訴院長ノ指名シタル評定官若クハ判事二名ト被告人所屬國ノ領事ノ撰任シタル二名ノ領事ヲ以テ維立タル會議局ノ仲裁ヲ受クベシ。

會議局ヲ開ク三日前審問書類ノ送達ヲ書記局及ビ領事又ハ其代理者ニ之ヲ爲スベシ。

第二十四條　若シ豫審判事及ビ領事ノ同時ニ同事件ノ取調ヲ爲ストキ、一方又ハ他ノ一方モ己レノ權外ナリト認メザルトキハ、權限爭論會議局ヲ設ケ則チ是等ノ者ノ内一方ノ需メニヨリ其爭ヲ定ム。

通常ノ輕罪若クハ重罪ニ付テハ豫審判事ト權限ノ爭ヲ生ズルコトナカル可シ。若シ夫レ豫審判事ニ於テ此法律ニ依リ立會裁判所ニ屬シタル重罪輕罪ナリトスルトキハ、其報告書ニ於テ其事實ヲ明示セザル可ラズ。訴訟人ヨリ害ヲ被リタル裁判官又ハ裁判所官吏ヨリ領事裁判所ニ告訴シタルトキハ裁判所ハ權限ノ如何ニ拘ハラズ自ラ該訴訟ヲ判決スベシ。

第二十五條　前條ノ手續ニ依リ受理シタル事件ハ其後ニ至リ管轄違ノ申立ヲ爲スト雖モ直ニ之ヲ判決スベシ。

第四章　重罪裁判所ニ於テノ辯論

第二十六條　重罪裁判所ニ於テ辯論終結シ問題準備シタルトキハ、裁判長ハ事件ノ顚末及ビ被告人ニ有益ナル又ハ不利ナル證據ノ要點ヲ說示スベシ。

第五章　刑ノ言渡ニ對スル控訴

第二十七條　控訴ハ違警罪裁判所ノ裁判ニ對シ違警罪ニ付其之ヲ爲スコトヲ許サヾル者ハ輕罪裁判所ニ出スベシ。

刑事ニ付刑ノ言渡ニ對シ上訴ヲ爲ストキハ、治罪法ニ許ス場合ナルトキハ民事ニ於ケルガ如ク組織シタル控訴院ニ差出スベシ。

重罪裁判所ノ裁判官ハ控訴院ノ判決ニ對スル上訴ニ關與スルコトヲ得ズ。

第二十八條　治罪法ニ依リ刑事ノ控訴ヲ許シタル場合ニ於テハ之ヲ控訴院ニ提出スルコトヲ得、但其控訴院ハ民事ニ對スル組織ニ同ジ。

重罪裁判所ニ立會ヒタル裁判官ハ其上訴ニ對スル控訴院ノ判決ニ關與スルコトヲ得ズ。

第六章　陪審及ビ候補ノ氏名錄調成ノ事

第二十九條　外國人タル陪審ノ名簿ハ毎年領事會議ニ於テ調成ス。

各國領事ハ該名簿調成ノ爲メ自國人民ニシテ陪審タル可キ資格アリトスル者ノ氏名錄ヲ作リ之ヲ領事長ニ差出スベシ。

陪審ハ三十歳以上ニシテ一ケ年以上埃及國內ニ住居シタル者タルベシ。

第三十條　領事會議ニ於テ各領事ヨリ送致シタル氏名錄ニ就キ、其人員二百五十名ニ滿ル迄之ヲ撰擇シ以テ確定ノ氏名錄ヲ作ルモノトス。

第三十一條　各國ハ十八名以上三十名以下ノ陪審ヲ出スベキ權アリ。

但其國民十八名ニ滿タザルトキハ此限ニ非ズ。

第三十二條　參審官ノ氏名錄ハ陪審氏名錄ニ就キ領事會議ニ於テ之ヲ作ル。

第三十三條　參審官ノ人員ハ各國六名以上十二名以下トス。

第三十四條　輕罪事件ヲ裁判スベキ場合ニ於テ參審官ノ人員其裁判所々在ノ地ニ於テ充分ナラザルトキハ、控訴院ニ於テ其近隣ノ裁判所ニ屬スル參審官ヲ以テ之ニ充ルコトヲ得。但其指名ヲ受ケタル者ハ必ズ出席スベキ義務アルモノトス。

第三十五條　陪審又ハ參審官ニシテ正當ノ理由ナク其職ニ從事セザル者ハ、該裁判所ニ於テ二百ピヤストル以上四千ピヤストル以下ノ罰金ヲ科スベシ。

第三十六條　埃及國ニ於テ充分ナル獄舍ヲ設ケタルコトヲ證明スル迄ハ、領事ノ請求ニヨリ刑ノ言渡ヲ受ケタル囚人ヲ領事所屬ノ監倉ニ監禁スベシ。

第三十七條　所屬人民ヲシテ埃及國ノ獄舍ニ監禁スルコトヲ承諾シタル領事ハ、其獄舍ヲ臨見シ及ビ之ヲ審査スルノ權アルモノトス。

第三十八條　死刑ノ（最重刑）言渡ニ對シテ各國代理官ハ其所屬人民ノ引渡ヲ請求スルノ權アリ。

前項ノ目的ヲ達スル爲メ刑ノ言渡アリタルヨリ其執行ニ至ル迄充分ノ猶豫ナカル可ラズ。

以上ハ刑事ニ關スル要則ニシテ此他別ニ左ノ二章ヲ設ケ以テ裁判所構成法ヲ完結セリ。

第三卷

第一章　特別ノ規則

第三十九條　現行犯及ビ家宅内ニ於テ危害ヲ保護スベキ公力ヲ有スル司法官ノ外裁判官及裁判所官吏ノ職務ヲ補助スベキ官吏數名ヲ置クベシ。

第二章　末則

第四十條　此法ニ定メタル期限内ニ於テハ如何ナル變更ト雖モ之ヲ行フコトヲ得ズ。其期限後ニ至リ經驗上改正ヲ要スル場合ニ於テハ或ハ舊制ニ復スルカ又ハ他ノ方法ヲ採用スベキ旨ヲ埃及政府ニ勸告スルカ、一ニ之ヲ外國政府ニ任ズルモノトス。

此篇ノ冒頭ニ於テ已ニ記載セシ如ク、現行立會裁判所前條ノ規則ニ從ヒ定期經過ノ後歐洲諸大國ト協議ノ上更ニ五年間ノ期限ヲ以テ之ヲ繼續シタルモノニシテ、凡目擊スル所ノ實況慣習上來記スル所ノ如シ。其利害得失及ビ將來ノ見込ニ至テハ後章之ヲ記述スル所アル可シ。

第五章　立會裁判ノ利害得失

佛國法律學士ベドン、ローレー氏曰ク、埃及國ノ立會裁判所ハ瑞西其他小國ノ爲メニハ利益ノ更ニ大ナルモノアリ。何トナレバ是等小國ノ領事ニシテ曾テ裁判權ヲ有セシ者多クハ純粹ナル商人ニシテ、大國ノ領事ニ比スレバ其能力相及バザル蓋疑フ可ラザルヲ以テナリ。加之一般ノ利益上ヨリ論ズルトキハ立會裁判所ノ設置ハ東洋諸國ノ人民ヲシテ文明諸國ニ施行スル法律ノ精神ヲ會得セシムルノ階梯トナリ、遂ニ治外法權ヲ撤去スルノ度ニ達スルコトヲ得ント。

ベドン、ローレー氏ノ論其前段ニ於テハ蓋異議ヲ唱フル者ナキモ、其後段東洋諸國ヲ野蠻視スルガ如キニ至テハ頗ル穩當ナラザルモノ、如シト雖モ、沈思默考過テ往事ヲ追想スルトキハ同氏ノ所見亦以テ眞ニ其當ヲ失セリトスルヲ得ザルナリ。

清國在留米國公使ハ曾テ埃及國在留同國總領事ニ對シ、立會裁判所ノ實況ニ付其利害ヲ問合セタル處、千八百七十七年五月二日ヲ以テ左ノ回答ヲ得タリ。曰ク、新設立會裁判所ノ好結果ヲ得ベキヤ固ヨリ疑ヲ容ルベキナク、且此裁判所ノ制タル之ヲ東洋ニ施用スルハ我其最モ適當ナルヲ知ル。先キニハ其國ノ不利トシ其宗旨ノ害アリトシタル者、今ハ全ク裁判ノ公平ヲ信認シ營ニ疑念ヲ絶チタルノミナラズ、内國人ニシテ立會裁判所ノ裁判ヲ受ル爲メ其債主權ヲ外國人ニ賣與ス

ル者アルニ至レリト。

夫レ內國人ニシテ其債主權ヲ外國人ニ賣與スルコト敢テ之ナキニ非ズ。而シテ此事ヲ行フヤ多クハ人民ヨリ政府ニ系ル場合ニ有之、抑モ內國裁判官ハ獨立ノ職權ナキヲ以テ政府ノ勢威自ラ之ヲ靡服セシムルコト未ダ必ズ之レナシトセズ。是或ハ立會裁判所ノ裁判ヲ撰擇スルノ原因ナルガ如シ。論者之ヲ駁シテ曰ク、內國裁判官ハ賄賂ノ弊アリ、故ニ人々之ヲ忌憚スルノミナラズ、近時裁判官ハ獨立タラザル可ラザルノ主義ヲ擴張シ、强抗不屈ヲ以テ自ラ其主義ニ達スルモノトシ、政府ニ系ル訴訟ハ其理非如何ヲ問ハズ盡ク之ヲ曲トシ、加之人民ハ巧ニ賄賂ヲ行フト雖モ政府固ヨリ此事ヲ行ハズ、而シテ政府ノ代理人多クハ無智ノ徒タルガ故ニ、特ニ敗訴ヲ招クモノアリト。說ノ眞僞未ダ之ヲ確定スベカラズト雖モ、內國裁判官收賄ノ弊アリトハ歐人ノ常ニ指稱スル所ニシテ、彼ヲシテ法權ヲ有セシムル能ハザル所以ノ者殆ンド全ク此點ニ在ルモノヽ如ク、而シテ我裁判所ノ果シテ此弊ナキヤ否ヲ訊問スル者實ニ幾人ナルヤヲ知ラザリシ。廉耻漸ク將ニ衰ヘ法律未ダ全ク備ハラザルノ今日ニ至リ蓋シ或ハ注意セザル可ラザルノ點ナリ。

立會裁判所ヲ以テ最モ不便ナリトスル者ハ英國人ナリ。何トナレバ其訴訟手續ヲ始メ商法民法ノ如キ盡ク佛法ノ寫眞ニシテ英國ノ法律ト大ニ異ルヲ以テナリ。然レドモ英國領事ノ言ニ依レバ、該政府ハ現今保有スル領事裁判權ヲモ擧テ之ヲ立會裁判所ニ委ス可キ意見ナリト云フ。蓋固ヨリ他ニ求ムル所アリテ然ルモノナリト雖モ、立會裁判所ノ成績ヲ認メテ不可ナリトセザルコト又以テ推知スベキナリ。

人或ハ曰ク、立會裁判所ノ成果其宜シキヲ得ザル者ハ一ニ裁判官其人ヲ得ザルニ由ルモノニシテ、道理上決テ然ルヲ得可ラザルモノナリ。則チ立會裁判所ノ困難ナルハ各裁判官ノ國語ヲ異ニスルコト「バビロン」ノ塔ニ於ケルガ如ク、而シテ訴訟手續又ハ適用スベキ法律ノ全ク自國ノ法律ニ異ルコト、就中公平ノ處置ヲ行フノ至難ナルコト是レナリ。夫レ一般ノ法律ニ於テハ訴訟人又ハ代書師若シ裁判官ト親族ナルトキハ之ヲ忌避スルコトヲ得、是私情ノ制シ難キモノアルヲ證スルニ足ルベシ。然ルニ立會裁判官ノ如キハ其職タル其自國ノ利益ヲ保護スルガ爲メニ成立シタルモノナリ。故ニ其國民ノ利害ヲ論辯スル場合ニ於テ、其感情豈其國民ノ利益ニ傾向セザランコトヲ欲スルモ得ンヤト。論者之ヲ辯ジテ曰ク一裁判所（組合ヲ云フ）中訴訟人一方ト鄕國ヲ同フスル者偶一人アルノミ。而シテ裁判所ハ五人ヲ以テ組織シ、多數ヲ以テ之ヲ決スルガ故ニ、實際上公平ヲ失スルノ恐アルコトナシト。此論未ダ當レリトセズ、何トナレバ何レノ國ニ於テモ始審裁判所ヲ除クノ外ハ多クハ三人以上ヲ以テ組織シ、卽チ多數ヲ以テ裁判スルト雖モ是等ノ裁判所ニ於テモ親族忌避ノ事亦固ヨリ重要ナル道理アルヲ以テナリ。

以上記述セシ所ノ外立會裁判所ヲ以テ不可ナリトスル者未ダ之アルヲ聞カズ。是所謂埃及國ニ

シテ或ハ當ニ可ナルベキナリ。何トナレバ埃及國ノ文化未ダ洽カラズ、內國裁判所ト雖モ故ラニ外國人ヲ雇入レ以テ裁判ヲ行ハシムルノ有樣ナルヲ以テナリ。（別冊第八號參考）

既ニ第三章ニ於テ詳述セシ如ク、埃及國內閣議長外務大臣兼司法大臣ヌーバルパシヤハ埃及政府ノ命ニ依リ自ラ立會裁判所ヲ設立シタルモノナリ。故ニ利害ノ感ズル所蓋之ヨリ明覆ナルハナシ。故ニ左ニ同氏ト問答ノ要領ヲ列記シ以テ此局ヲ結ブト云フ。亦

問　聞クガ如クバ立會裁判所ハ閣下ノ創設スル所ニ係ルト、其結果果シテ閣下ノ期スル所ニ違ハザルヤ否。

答　二箇ノ欠典ヲ除ク外ハ甚ダ佳ナリ。

問　其欠典トハ何ゾ。

答　貴下ノ請求ニ系ル書類完ク備ハルノ後之ヲ辯ゼン。則チ該書類ハ立會裁判所設立以前ノ困難ヲ示スモノナリ、然レドモ此書固ヨリ之ヲ悉サズ、故ニ數回之ヲ面陳スルヲ怠ラザルベシ。今ヲ距ル數年卽チ千八百七十一年、余ノコンスタチンノプルニ在リシトキ、貴國ノ大使某氏大使館ノ官吏二名ヲ派遣シ、立會裁判所ノ取調ヲ爲シ、其創設ニ關スル書類ヲ集取セシメタルニ依リ、當時余ハ應分ノ力ヲ盡シ以テ貴國ノ請求ニ充テタリ。加之千八百七十六年ニ於テ佛國貴國大使ニ面接シ、立會裁判所ノ利害ヲ說示シ且貴國ノ形狀ヲ聞知シタリキ。貴下若シ當時ノ大使ハ誰タリシヤ、派遣セラレタル官吏ノ誰タリシヤヲ取調ラルヽニ於テハ貴下ノ勞働ヲ減ズルヤ明ナリ。

問　我邦ノ形勢タル已ニ閣下ノ耳聞スル所ナリ。而シテ余ノ知ル所ニ依レバ我邦ノ素論タル、外國人ニシテ我法權ノ下ニ立ツコトヲ諾スルニ於テハ以テ全國ヲ聞クベシ。彼若シ之ヲ好マザルニ於テハ我亦彼ヲシテ內地ニ入ルコトヲ許サズト云フニ在リ。閣下若シ我邦ノ位置ニ立テ之ヲ考フルトキハ其論ノ利害果シテ如何トス。

答　其說因ヨリ美ナリ。然レドモ大艦巨砲特ニ蒸汽船ノ發明ナク、僅ニ和蘭陀トノミ通商スルノ昔時ニ在テハ之ヲ言フ可ク且以テ行フ可キノ論タルベシ。今ヤ然ラズ、貴國假令內地ノ雜居ヲ禁ズルモ歐洲五大國自ラ侵入スルアルヲ如何セン。然レドモ是一ニ國ノ强弱ニ關ス、貴國若シ五大國ニ抗スベキノ勢力アルニ於テハ蓋貴說ノ完美ナルニ如カザルナリ。

問　余輩日本人ハ立會裁判所ノ設置スベキモノト假定シ、其設置以前ニ於テ注意スベキ條件ハ如何ナルモノゾ。閣下若シ敎示セラルヽヲ得バ幸甚。

答　是所謂二箇ノ欠典アルノミ。若シ其二點ヲ補正スルニ於テハ別ニ憂慮スベキ所ナク、實ニ立會裁判所ノ便益ナルヲ知ルベシ。

（以上ハ第一回ノ問答ニシテ以下第二回ニ於テ前例ニ依リヌーバル、パシヤノ辯明シタル所ナリ、且加フルニ參照ニ供スベキ二三說ヲ以テス）

ヌーバル、バシヤ曰ク、今ヤ已ニ貴下ノ說明ヲ爲スノ時ニ達セリ。則チ此書ハ立會裁判所ヲ要スルノ大主意ニシテ、我政府ノ法權ヲ有セザルヨリ之ヲ生ズル所ノ弊害及ビ行政司法ノ分別ヲ要スル旨ヲ述べ、則チ領事裁判ノ弊害及其他ノ事ハ此書已ニ之ヲ盡セリ。而シテ余ガ忠告スベキ二條件トハ則チ左ノ二點ヲ云フナリ。

第一　判事撰擇ノ權ヲ埃及政府ニ歸スルコト。

第二　已定ノ法律ハ埃及政府ト立會裁判所ト協議ノ上之ヲ變更スルヲ得ベキコト。

第一ノ理由　我政府ニ於テ判事タル可キ資格ナキ外國人ヲ採用スルガ如キ最モ不都合ノ至リナリト雖モ、是其國ノ强弱ニ關スルモノナリ。若シ其レ判事ノ撰擇ヲ埃及政府ニ委ネ、且其條約ヲシテ其欲スル所ニ從ハシムルニ於テハ蓋滿足ナル結果ヲ得ベシ。譬ヘバ內國裁判所雇使スル判事卽チ小國ヨリ採用シタル判事ハ能ク政府ノ望ム所ニ適ヒ其條約ヤ三ケ年間ニ國語ヲ學バザル可ラザルコトヲ揭ゲシガ如シ（國語ノ試驗ヲ受ケ且及第シタル者ハ僅ニ一名アルノミ依テ政府ハ過分ノ賞金ヲ與ヘ以テ後者ヲ奬勵セリ）英國領事クツクソン氏曰ク、判事撰擧ノ權ヲ埃及政府ニ委ヌルト雖モ、該政府ハ其能否ヲ識別スルノ理ナキヲ以テ寧ロ之ヲ外國政府ニ委ヌルノ勝レルニ如カズト。此說固ヨリ理ナキニ非ズ、然レドモ實際ノ形況ニ於ケル今日ノ如クナルニ於テハ以テ外國政府ニ一任スルヲ得ザルヤ明カナリ。

第二ノ理由　法律ノ改正ハ時運ノ變遷文化ノ進步ニ從ヒ變更セザル可ラザルナリ。余ノ先ニ立會裁判所ヲ設置セントセシヤ、如何ナル法律ヲ適用セシムルヤトノ問題ニ接シ遂ニ現行ノ法律ヲ制セリト雖モ、前ニ云フ所ノ如キ改正ヲ要スルモノ比々生ズベキハ自然ノ勢ナルヲ以テ、余ノ欲スル所ハ其改正ヲ爲スベキ權利ニシテ埃及國政府及立會裁判所官吏ニ委ヌルニ至リ、然ルニ歐洲諸國ニテ認諾セザルガ故ニ現今ノ有樣ニテハ余ノ以テ滿足スル能ハザルモノアリ。然レドモ右二箇ノ欠典ハ數年ヲ出デズ必ズ改正スルヲ得ルニ至ル可キナリ。

貴國若シ立會裁判所ヲ設立スル如キアラバ右ノ二點ヲ注意スベシ。然ルトキハ立會裁判所ハ甚ダ愉快ナルモノナルベキナリ。何トナレバ文化ノ進步ニ從ヒ卽チ未見ノ事未見ノ物遽ニ內國ニ侵入スルニ當テハ、道德主義ニ根據シタル內國人ノミヲ以テ此新事件ヲ處理ス可ラザルガ故ニ、外國人ノ原素ヲ要スルハ蓋自然ノ勢ナリ。而シテ內國裁判所中外國人ヲ使用スル亦此理由アルニ因ルナリ。

英國總領事（代理官）フルエベリンベーリング氏曰ク、埃及政府ニ外國人ヲ要スルハ啻ニ立會裁判所ノミニ非ズ、百般ノ事盡ク外國人ヲ使用スルノ必要アリ。而シテ裁判所及ビ其ノ他ニ於テ之ヲ使用スルハ其目的タル外國人ヲシテ內國人ヲ敎育セシムルニ在ルナリ。譬ヘバ英國人ニシテ數年間驛遞ノ事務長ヲ勤メタル者其職ヲ退クニ當リ、余ハ更ニ他ノ英國人ヲ推擧スルコトヲ爲サズシテ其次席ニ在リ久ク敎育ヲ受ケタル內國人ヲ以テ其欠ヲ補フ可キ旨ヲ勸告セリ。要スル

ニ立會裁判所ハ亦政事(ポリチック)相牽連スルモノアリ。貴國若シ立會裁判所ヲ設立セバ該判事ヲシテ先ヅ國語ヲ學ブノ義務ヲ負ハシムベシ。中年以上ニシテ特殊ナル貴國ノ語ヲ學ブハ固ヨリ困難ノ事ナリト雖モ、國語ヲ解スルニ非レバ訴訟ヲ裁判スル能ハザルハ誠ニ明瞭ナル次第ニ非ズヤ。立會裁判所控訴院評定官伯爵マログナ氏曰ク、余ハ已ニ獨逸國內ニ於ケル始審裁判所長ノ職ヲ奉ジ、裁判官タルコト二十餘年、且其他獨逸政府ノ指名シタル判事ハ盡ク相當ノ資格ヲ有スル者ナリ。然ルニ先ニ言ヒシ如ク、無能力ナル判事數多ナルガ故ニ事務ノ繁劇ナル實ニ夥シク、則チ控訴院評定官ノ分課ハ有力者ト無能力者ト平均スベキ方法ニ依リ、且事務ノ分配ハ所長ノ權內ニシテ有力者ハ常ニ繁ニシテ無力者ハ常ニ閑ナル割合ナリ。而シテ無能力者中ニハ內國判事ヲ含入シ、卽チ內國判事ハ自ラ專任判事トナルコトナク一名ノ土耳格人ノミ少シク其任ニ適スルノ力アルニ過ギズ。

以上ハ埃及國立會裁判所ノ概況ニシテ其他ノ始末ハ別ニ携歸セシ所ノ各書類ニ於テ事每ニ之ヲ詳カニスルヲ以テ併テ玆ニ之ヲ進達ス。若シ夫レ御參考ノ一端トモ相成候ハヾ實ニ望外ノ幸ナリ。(大尾)

君主及國會ノ法律的地位

第一款　君主

第一項　君主ノ國家ニ於テ有スル法律的地位

夫レ世襲ノ最高權、舊獨逸帝國ノ伯及公ノ官職ヨリ發達シタル時ニ當リテハ、此最高權利尙ホ全ク私法的性質ヲ有シ、而シテ土地及人民ハ邦君ノ統御權ニ屬スル財產物ト認メラレ、又地方ノ住民ハ各種ノ關係卽チ忠順的關係、保護的關係及隷屬ノ關係ニ於テ邦君ニ從屬セリ。然リ而シテ邦君ノ各種權利漸ク單一ノ統御權ニ總合セラレシ以來、縱令當初ハ特權的等族ノ代議ニ過ギザルモ、一旦人民ノ代議體起リテ邦君ニ對立スルニ至リ、始メテ國家ハ邦君及其支配ニ屬スル人ノ上ニ位スル統一體ナルノ思考ヲ生ゼリ。是ニ於テカ始メテ國家ノ思想發シ、邦國ヲ一ノ協同體、邦君ヲ其最高機關ト認メ、且邦君ハ國民ニ對シ啻ニ權利ヲ有スルノミナラズ、又義務ヲ有スルモノト認メタリ。此方針ハ恰モ帝國漸次其事務ヲ行フノ能力ヲ失ヒ、百般ノ政治的事務、地方ニ遷ルニ依リ大ニ進步セリ。第十八世紀ニ在リテハ政治改革ノ主義總テ獨逸ノ大領地ニ行ハレ、殊ニプラ

ンデンブルグ、プロイセンニ於テホーヘンツオルレン家鋭意國家ノ思想ヲ實行セリ。(一)又後世ノ帝國國法學者ハ皆各邦ノ最高權ハ臣民ノ福利ヲ增ス爲メニ行フベキ統御權ナリト認メタリ。然レドモ小領地ニ於テハ悉ク此原則ヲ施行セザリキ。此小領地ハ舊獨逸帝國ノ瓦解及ビ之ニ關スル事變ニ依リ多ク其獨立ノ生存ヲ失ヘリ。又僅ニ殘存スル所ノモノハ漸次大國ノ例ニ倣フノ必要ヲ感ゼリ。本世紀ニ於テ立憲制度行ハルヽニ至リ、彼ノ進步全ク其局ヲ結ビ、現時ノ國法ニ於テ君主ハ國家ノ上ニ位セズ、國家ノ中ニ位シ、君主ハ國家ノ統御者(ベベルシユル)ニアラズシテ國家ノ機關トナレリ。

(一)君主ハ國家ノ機關ニシテ國家ノ爲メニ活動スベシトノ思想ハ既ニフリードリヒ大王ノ有名ナル「君主ハ人民ヲ支配スル所ノ專制君主ニアラズ國家ノ最高機關ナリ」トノ語ニ於テ發表セラレタリ。

然リ而シテ君主ハ國家ニ於テ卓越ノ位地ヲ有シ、且國權ヲ掌握セリ。凡ソ君主ノ有スル權利ハ國有ノ特權ナリ、又君主ハ萬般ノ國權ヲ一身ニ總攬ス。此原則ハ舊獨逸聯邦ノ法律ニ於テ明言セラレ、又此法律ニ基キテ起リタル獨逸憲法ノ大部ニ於テ之ヲ明言セリ(巴威憲第二章一、孛憲瓦(ウエルテンブルグ)憲四)又君主ハ國權ノ持主ナリトノ思考ハ此原則ヲ明言セザル國ノ憲法ニ於テモ亦存セリ。然レドモ君主ハ萬般國憲ノ持主ナリトハ決シテ其權威無限ナリト云フノ意義ヲ有セズ。立憲制度ニ於テハ君主其權利ヲ施行スルニ當リ、一ニハ一定ノ方式ヲ遵守セザルベカラズ、二ニハ他ノ機關ノ干與ヲ受ケザルベカラズ。然レドモ君主ハ權利ノ淵源ナリト假定セラルヽモノナリ。是レ君主ハ凡ソ明文ヲ以テ除却セラレザル所ノ權利ヲ掌握スト雖モ、他ノ機關ハ唯明文ヲ以テ與ヘラレタル所ノ權利ヲ有スル所以ナリ。

(二)殊ニ孛國憲法ナリ、此思考ハ憲法第四十五條(行政權ハ獨リ國王ニ屬ス)第六十二條(立法權ハ國王及兩院共同シテ之ヲ施行ス)第八十六條(裁判權ハ國王ノ名ヲ以テ施行セラル)ノ文面ニ依リ自ラ判然セリ。

君主ノ權利ハ施政權即チ國務ヲ施行スルニ必要ナル權利及名譽權若クハ「マイエステート」權、即チ其卓然タル地位ヲ表彰スル所ノ權利ニ分ル、名譽權ニ屬スルモノハ一定ノ尊稱(國王ハ陛下、大公ハ國王殿下ト稱スルガ如シ)ヲ求ムルノ權、一定ノ表章(冠冕、國技、球玉、寶劍、徽章)ヲ用フルノ權、兵事上ノ禮式、寺院ノ禮拜、國喪ニ關スル權利及宮廷官ヲ置クノ權利ナリ。又官名爵位又勳章ヲ授與スルノ權、等族ヲ進ムルノ權モ亦之ニ屬セリ。

君主ハ獨リ國家ノ統御ニ服從セズ、即チ臣民ノ性質ヲ有セザル者ナリ。憲法中ニ君主ハ神聖(巴憲第二章一、孛憲四、瓦憲四)ニシテ且犯スベカラザル者(學憲四三巴憲以下前ニ同ジ)ト規定セリ。神聖ナリトハ毫モ法律上ノ意義ヲ有セズ、犯スベカラザルトハ二樣ノ意義ヲ有セリ。即チ第一、君主ノ身體ハ特別ノ刑法ニ依リ保護セラルヽコト(帝刑八〇、八一、九四、九五、九

八、九九）第二國家ノ權柄ハ君主ヲ糺彈スルヲ得ザルコト是レナリ。此第二ノ意義ニ於テハ不可犯ハ不保仕ト同意ナリ。君主ハ不保仕ナリ、何トナレバ君主ハ國權ノ持主トシテ決シテ他機關ノ裁判權ニ服從セザレバナリ。此不保仕ハ啻ニ君主ノ施政事務ノミナラズ又其一私人トシテ爲ス行爲ニモ及ブモノナリ。

然リ而シテ一私人ノ行爲ニ付テハ此原則唯刑法ニ關シ私法ニ關セザルナリ。君主ハ其行爲ニ對シ毫モ罰ヲ受クベキモノニアラズ、之ニ反シ財産權ノ爭訟ニ付テハ自國裁判所ノ裁判ヲ受ケザルベカラズ。然レドモ訴訟ハ通常形貌上君主ニ對セズ國君ノ國庫若クハ奉養費ニ對シ提起スルモノナリ。

然リ而シテ君主ノ政務ニ付テハ君主ハ不保仕ナルモ他ニ責任者ナカルベカラズ。故ニ近時ノ憲法ニ於テ凡ソ君主ノ政務ハ責任大臣若クハ之ト同等ノ地位ニ居ル官吏（部長）ノ副署ヲ要スルコトヲ規定セリ。（孛憲四四、巴威爾千八百四十八年六月四日ノ大臣責任法律四、五、六孛憲四三、瓦憲五一）君主ノ政令ニシテ副署歟缺スルトキハ其政務ハ無效ナリ。抑此ノ如キ副署ハ既ニ代議制度ノ施行前ニ在リテモ獨逸各國ニ行ハレタリ。然レドモ此副署ハ素ト唯君主署名ノ眞誠ナルコトヲ公證スルノ目的ニ出デタリ、其後立憲制度ニ遷リタル以來、副署ハ該政務ニ付キ責ニ任ズル所ノ人ヲ確定スルノ用ニ供セリ。凡ソ副署ハ別段ノ規定アラザル限リハ一大臣ノ副署ヲ以テ足レリトス。然レドモ一大臣ノ副署ハ唯其自ラ關係シタルコトヲ證明スルモノニシテ、他大臣ノ關係セザルコトヲ證明スルモノニアラズ。又勳章及名譽章授與ノ場合ニ於テハ別ニ副署ヲ要セズ、又君主自己ノ意見ヲ述ル場合（國會ニ對シ勅諭ヲ述ル場合等）及軍兵ニ對シ命令權ヲ施行スル場合ニ於テハ副署ヲ要セズ、但兵部行政ノ事項ニ付テハ之ヲ要セリ。其他君主ノ波羅特斯且教會ニ對シ僧正ノ權利ヲ施行スルニハ固ヨリ副署ヲ要セザルナリ。何トナレバ此事タル政務ニ屬セザレバナリ。之ニ反シ大臣ノ任官及特赦權ノ施行ニ付テハ副署ヲ要セリ。

（三）ゲルベルハ大臣ノ任官ハ副署ナキモ其效力ヲ有セザルベカラズ、何トナレバ若シ辭職スル所ノ諸大臣新大臣ノ任官ヲ拒ムトキハ、君主之ヲ官ニ任ズル能ハザレバナリト云フ。然レドモ此說正當ナリトセズ、何トナレバ此ノ如キ場合ニ於テハ新任大臣自ラ其任官ニ付キ副署スレバナリ。又ツオプルハ大臣ノ任官ハ副署ヲ要セズ、何トナレバ之ガ爲メ法律若クハ憲法ヲ毀損スルコトナケレバナリト云フ。然レドモ君主、任官ノ能力ヲ有セザル者、例ヘバ大臣糺彈ノ爲メ免黜セラレ將來類似ノ官ニ就クコトヲ許サズト裁判セラレタル所ノ者ヲ大臣ニ任ズルトキハ是レ法律ヲ毀損シタルモノト云フベシ。

（四）モールハ特赦ニ付テノ副署ハ唯國王ノ意思及國王ノ署名ノ確定ナルコトヲ公認スルモ

ノニシテ、之ニ對シ責ニ任ズルモノニアラズト云フ。然レドモ國王ノ特赦權ニ付テハ憲法上ノ制限アリ（瓦憲二〇五、孛憲四九）故ニ大臣ハ此制限ヲ遵守スルノ責アリ、曾テロエンネモ亦モールノ說ニ同意シタリ。然レドモ今日ハ其說ヲ變ジタルモノヽ如シ。

第二款　國會

第一項　國會ノ法律的地位

夫レ獨逸ノ各地方ニ於テ等族ノ團結體生ゼシ時ニ在リテハ、此團結體ハ自己ノ權利及利益ヲ代表セル權利的主格トシテ邦君ニ對立シ、而シテ邦君ト等族トノ關係ハ全ク一人ト一人トノ關係ナリ。卽チ會員ハ一定地面ノ所有者トシテ、或ハ自己ノ權利ヲ以テ國會ニ出席シ、或ハ團結體ノ代人トシテ國會ニ參會シ、議決ニ當リ團結體ノ訓令ニ拘束セラレタリ。

然リ而シテ中古ノ地方體ヨリ漸ク輓近ノ國家起リ協同體ノ思想生ズルヤ、始メテ等族ヲ協同體ノ一機關ト認ムルニ至レリ。是ニ於テカ等族ヲ君主ナル邦君ニ對立セシメ、之ヲ人民ノ代議體ト看做セリ。此見解ハ既ニ舊帝國時代ノ後世國法學者中ニ於テ多數ノ認ムル所ナリキ。然レドモ人民代議體ナル見解ハ亦反對論者ノ攻擊スル所ナシドセズ。蓋シ當時ノ國會ニ於テハ人民ノ等級中代表セラレザルモノ多クシテ、唯一二ノ特權ヲ有スル等族代表セラルヽノミナレバ反對者ノ論亦一理アリト云フベシ。

漸ク千八百十五年以來憲法的運動ハ人民代議ノ思想ヲ全ク實行セリ。然レドモ既ニ從來等族會ノ存スル邦國ニ於テハ、新憲法ノ制定ニ當リ新舊制度ノ相異ナル所以ヲ充分ニ辯識スルナク、舊等族ノ制ヲ繼續セリ。卽チ從來存スル等族會、ランドステデ若クハ國會ランドターグノ名稱ハ保存セラレ、又國會ノ組織ニ等族主義ヲ基礎トシタルハ亦新國會ノ舊國會ニ類似スル所ナリキ。然ルニ千八百四十八年以來ノ法律ハ漸ク等族主義ヲ廢除セリ。

然リ而シテ國會ノ組織尙ホ等族制ヲ蟬脫セザリシ憲法ニ於テモ、亦國會議員ハ全國人民ノ代人タルノ原則ヲ明言セリ。是レ舊憲法ニ於テ議員ヲ以テ一二等族及等級ノ代人ト爲セシ制度ト大ニ異ナル所以ナリ。然レドモ國會議員ヲ以テ人民ノ「代人」トシタルハ議員其權利ヲ人民ヨリ享有シ、又ハ人民ヨリ委任及訓令ヲ受ケザルベカラズト云フ意ニアラズ。當初國會議員ハ全國人民ノ代人ナリトノ規定ヲ憲法ニ採用スルニ當リテハ、一般ニ其國法的意義ノ如何ナルモノナルヤヲ辨識セズ、唯政治的意義ヲ以テ定メタリ。法律ノ點ヨリ解釋スルトキハ國會ハ國民ノ代議體ニアラズ國民ノ撰擧ヨリ生ジタル國家ノ機關ナリ。

國會ノ行爲ハ國家ノ各種區域ニ及ブモノナリ。分權ノ原則ニ從ヘバ國會ハ唯立法事務ヲ執ルベキモノナレドモ、此原則ハ獨逸ノ國法ニ於テ絶ヘテ行ハレザリキ。獨逸各邦ノ國會ハ第一ニ立法ニ參與スルノ權ヲ有シ、又其他數多ノ行政事務ニ干與セリ。卽チ國家豫算表ハ唯國會ノ認可ヲ以テ確定セラレ、又國會ハ國有地ノ賣却、公債ノ募集保證ノ擔任ニ付キ認可ヲ與フベキモノトス。又一定ノ國約及其他國際法的事務モ亦其認可ヲ受ケザルベカラズ。國會ハ其他行政ノ全部ヲ網羅スル監督權ヲ有セリ。實ニ彼ノ大臣彈劾ノ如キハ此監督權ヨリ生ズルモノナリ。

國會ノ抗告及請願權（孛憲八一、巴憲第七章一九、孛憲一〇、九、二〇、一四〇、瓦憲一二四）ハ一ニハ行政ニ付監督權ヲ施行スルノ便ニ供シ、二ニハ政府ヲシテ法律ノ草案ヲ提出セシムルノ方便トナルモノナリ。此權ハ或ハ「レソルチオン」ノ方式ヲ以テ閣省ニ對シ、或ハ「アドレッセ」ノ方式ヲ以テ直チニ君主ニ對シ行フコトアリ。此ノ如キ行爲ハ或ハ國會々員ノ建議ニ出ルコトアリ、或ハ私人若クハ團結體ヨリ國會ニ提出シタル請願ニ出ルコトアリ。國會ハ憲法ノ明條ニ依リ此ノ如キ請願ヲ採用シ請願中ニ存スル愁訴ノ理由アルニ於テハ之ヲ政府ニ提出シテ其處分ニ任ズルノ權アリ。（孛憲八一、巴憲第七章二一、及千八百七十二年一月十九日ノ國會議事法律、孛憲一一一及千八百七十四年十月十六日ノ議事法律）然レドモ通常此ノ如キ請願ハ唯書面ヲ以テ送付スベク、自ラ若クハ總代ヲ以テ提出セシムルヲ得ズトノ制限ヲ憲法中ニ定メタリ。

國會議員ノ事務ヲ行フ爲メ必要ナル穿鑿ヲ爲サシムルガ爲メ、數多クノ憲法ハ明條ヲ以テ國會ニ大臣若クハ其他政府ノ代人ニ質問スルノ權ヲ與ヘタリ（孛憲八一巴議事法一八乃至二一索議事法三一）國會ハ假令憲法ニ明條アラザルモ政府ニ質問ヲ爲スノ權アリ。唯此場合ニ於テハ政府之ニ答フルノ義務ナシ。之ニ反シ憲法ニ於テ質問權ヲ公ニ許シタルトキハ、質問ヲ受ケタル政府ノ代人ハ常ニ其質問ニ答ヘザルベカラズ。若シ又其質問ヲ受ケタル事件ヲ公ケニシ、爲メニ國家ノ安寧ヲ害スルノ恐アル場合ニ於テハ事物上ノ答ヲ爲スヲ要セズ、自由ニ之ヲ拒ムノ權アリ（索議事法三一）又國會ハ時トシテハ事實審査ノ爲メ自ラ委員ヲ構成スルノ權アリ（孛憲八二）然レドモ是レ今日ニ至ルマデ獨逸ニ於テ未ダ十分ニ發達セザル所ノ制度ナリ。

國會ハ君主ト併立スル國權ノ持主ニアラズ、唯制限的要素ナリ。乃チ君主ハ其事務ノ一二ヲ行フ場合ニ於テ、國會ノ干與ニ拘束セラルヽモノナリ。故ニ國會ハ唯明條ヲ以テ自己ニ與ヘラレタル所ノ權利ヲ有スルモノナリ。（一二ノ憲法ニ於テ「國會ハ唯其權限ニ屬スル所ノ事項ヲ議定スルヲ得」ト規定セリ巴憲第七章索憲七九）然レドモ國會ノ權利ハ決シテ單ニ反面的卽チ唯民權ノ毀損ヲ豫防スル爲メノ權利ニアラズ（是レモールノ說ナリ）國會ハ啻ニ異議ノ權ヲ有スルノミナラズ、又國務ノ施行ニ付キ進取活潑ノ干與ヲ爲スモノナリ。然レドモ其行爲ハ唯決議ヲ爲スニ止マリ、其施行ハ政府ノ手裡ニ歸ス。國會ハ命令權若クハ直接ノ强制權ヲ有セザルモノナリ。

獨逸各邦ノ憲法ニ據レバ國家ノ重要ナル事務卽チ立法、豫算表ノ確定、一定國際法的條約ノ締結ニ付テハ國家ノ二要素卽チ君主ト國會トノ協同ヲ要セリ。蓋シ此制度ハ二要素ノ間ニ不調和ヲ生ズルノ恐ナキヲ必シ難シ。若シ其爭憲法ノ解釋ヲ異ニスルニ在ルトキハ、裁判官ノ判決ヲ以テ之ヲ完結スルヲ得ベシ。實ニ又一二ノ獨逸憲法ニ於テハ此ノ如キ規定ヲ定メ、其裁判ヲ或ハ特ニ構成スベキ仲裁裁判所或ハ國事法院（スターツスゲリヒツスホーク）ニ任ゼリ（索憲一五三）然レドモ此場合ハ單一ノ場合ニアラズ、又實際重要ノ場合ニアラズ、之ニ反シ屢々生ズル場合ハ政府及國會ノ間ニ一處分ノ政治的便不便ニ付キ見解ヲ異ニスルコトアル場合ナリ。此ノ如ク兩素ノ意見相協ザルガ爲メ時トシテ必要ノ法律又ハ豫算表ノ成ラザルコトアリ。況ンヤ此ノ如キ異見ノ爲メ殆ンド國家ノ生活ヲ窒息スルノ恐ナキヲ必シ難キニ於テヲヤ。

英國及之ニ摸倣シタル一二ノ立憲國ニ於テハ、議院政府ノ組織ヲ定メ以テ紛議ヲ解クコトヲ得タリ。蓋シ君主議院ノ多數ヲ占ムル政黨ノ首領ヲ政府ニ容レ、其責任ヲ以テ事務ヲ施行スルトキハ政府ト國會トノ必要ナル調和ヲ恢復スルコトヲ得レバナリ。此方法ヲ獨逸ニ輸入スルコトニ付テハ當ニ國會ニ於テ贊成ヲ得タルノミナラズ、又著書ニ於テモ之ヲ主張スル者尠シトセズ（モール）ハ主張者ノ巨魁ナリ）然レドモ此方法ハ今日ニ至ルマデ實行セラレザリキ。抑大臣ヲ任ズルニ當リ國會ノ思想ヲ顧慮スルハ前ニ希望スベキコトナルモ、獨逸ニ於テハ英國ニ於ケル如ク議院政黨ノ政府ヲ組成スルノ要件存セザルコトヲ認メザルベカラズ。獨逸ニ於テハ殊ニ此ノ如キ政治ノ基礎タル巨大ノ政治能力アル政黨存セズ、又獨逸帝國ノ政略ニ付キ之ヲ考フルトキハ各邦ニ於テ唯國會ノ多數ニ從ヒ閣員ヲ構成スルヲ許サヾルナリ。

第二項　國會ノ組織

英國議院ノ上院及下院ナル二院制ハ其國沿革上ノ關係ニ基クモノナリ。然ルニ二院制ハ殆ンド歐羅巴諸大國ノ制度トナレリ。又獨逸ニ於テモ大邦及中邦ニ於テハ悉ク此制ヲ採リ、唯小邦ニ於テ一院制ヲ立タリ。

二院制ノ成立スル邦國ニ於テハ國會ノ決議ハ二院ノ認可ヲ要スベシトノ原則行ハル。（孛憲六二巴憲第七章一九、索憲六二、一三二、瓦憲一八二）但其內部ノ規定ハ各院ノ自由ニ放任セラレタリ。是レ卽チ議員ノ資格ヲ審査スルコト議案ノ取扱方ニ關スル決議及議場警察ノ施行ナリトス。又各院ハ通常獨立シテ請願及抗告ノ權利ヲ施行ス（孛憲八一、瓦憲一七八）

兩院ハ各別ニ會議ス。其共同會議ハ例外ニ屬シ專ラ形式上ノ事務ヲ完了スルガ爲メニ開クモノトス。(一)

(一)殊ニ國會開閉ノ場合及君主若クハ攝政ノ憲法ノ宣誓ヲ受クル場合ナリ。其他孛憲第五

十六條及第五十七條ニ依レバ攝政ニ關スル決議ヲ爲スガ爲メ、共同會議ヲ開クベキモノトス。瓦憲第百九十條第百九十一條第百九十三條及第百九十六條ニ據レバ一定ノ撰擧ヲ爲シ、及一定ノ報告ヲ受クル爲メニ共同會議ヲ開クモノナリ。

兩院ノ權利ハ平等ナリ。唯財政的法律及豫算表ニ關シ下院ニ稍大ナル權利ヲ與ヘタリ。此種ノ草案ハ先ヅ下院ニ提出セザルベカラズ（孛憲六二、巴憲第六章一八、孛憲一二二、瓦憲一七八）豫算表ニ付テハ上院ノ權利ハ通常唯其全部ヲ採用シ、若クハ否決スルニ止マリ、各項ヲ修正スルヲ得ズ（孛憲六二、瓦憲一八一、然ルニ巴丁憲法第六十條ハ豫算表ノミナラズ又財政的法律ニ關セリ）此規定ニハ上院ハ唯下院ニ於テ確定シタル豫算表（按政府ノ提出シタル豫算表ニアラズ）ノ全部ヲ採用シ、若クハ否決スルヲ得ルモノト理會セザルベカラズ。何トナレバ此豫算表コソ獨リ會議ノ基礎ヲ爲セバナリ。(一)

(二)千八百六十二年十月十一日及千八百六十四年一月二十三日ニ於テ孛國上院ガ下院ニ於テ確定シタル豫算表ヲ採用セズシテ、政府ヨリ提出シタル豫算表ヲ採用シタルハ憲法ニ矛盾シタルモノト云ハザルベカラズ。ロエンネ、シユルツエモ同說ナリ。

一議案ニ付キ兩院ノ議協ハザルトキハ未ダ決議成リタリト云フベカラズ。一二ノ憲法ニ於テハ兩院ノ意見ヲ協同スルノ爲メニ特別ノ規則ヲ定メタリ。(二)

(三)索憲第九十一條第九十二條第百三十一條ニ依レバ兩院ノ間ニ異見アルトキハ兩院ヨリ總代ヲ派出シ之ヲ調和スルコトヲ試ムベシ。然リ而シテ尙ホ意見一ニ歸セザルトキハ法律案ヲ廢棄スル爲メニ兩院各三分ノ二以上廢棄ニ同意スルヲ要セリ。此最後ノ規定（按然リ而シテ以下ヲ指ス）唯政府ヨリ提出セラレタル草案ニ適用スルモノニシテ、議院ノ起草ニ係リタル草案ニ適用ス。瓦敦堡及巴丁ニ於テハ下院ノ採用シタル豫算表上院ヨリ否決セラレタルトキハ兩院ノ投票數合算シテ之ヲ決ス。若シ可否相半スルトキハ下院議長ノ決スル所ニ依ル。瓦憲一八巴丁憲法六一、七四

一二ノ邦國ニ於テハ國會ノ二院制ニ拘ラズ、一種ノ制度ヲ立タリ。此制ニ依レバ一國ヲ二個ノ多少獨立スル部分ヨリ成立セシメ、其各部ニ一ノ國會ヲ置キ又全國ノ爲メニハ一ノ共同國會ヲ開設スルモノトス。（索遜各堡額達）

第二項　國會組織ノ續一

獨逸各邦上院ノ組織ハ英國ノ上院ヲ摸範トセリ。然レドモ人唯其ノ外貌ヲ見テ英國上院ハ大土地所有者ノ代議體ナリト想像シ之ニ倣ヒタルノミ。然ルニ其本來ノ趣旨ヲ考フルニ英國上院ハ英國ノ政體ヲ有スル等級ノ代議體ナルモノナリ。夫レ此ノ如ク獨逸ニ於テハ英國上院ノ外貌ニ「ス

タンズテヘルン」及騎士ノ土地ヲ有スル貴族ヲ根本トセリ。而シテ其貴族ハ或ハ世襲議員或ハ被撰議員アルアリ、或ハ君主ヨリ命ゼラレタル終身議員ナルアリ、又佛國憲法ヲ模倣シテ君主ニ上院ノ終身議員ヲ（多ク員數ヲ制限シ）任ズルノ權ヲ與ヘタリ。其他一定ノ國家若クハ敎會高等官吏大學及大市府ノ代人モ亦上院ノ議員トナレリ。(一)

(一)孛漏士ニ於テハ千八百四十八年十二月五日ノ欽定憲法第六十三條ヲ以テ上院ノ議員ハ州縣及郡會議員之ヲ撰擧スベキコトヲ定メタリ。但上院議員ノ一部ハ國王ヨリ任ズベキカ又大都會ノ市長大學及學問美術專門學校ノ代人ヲモ上院ノ議員トスベキヤ否ヤハ憲法改正ノ時ノ審査ニ任ゼラレタリ。然ルニ州縣及郡會ハ漸ク將來ノ法律ニ依リ設立セラレザルベカラザレバ、憲法ノ發布後直チニ施行スベキ撰擧ニ應ズル能ハザルガ故ニ、千八百四十八年ヲ以テ上院假撰擧法律ヲ發布セリ。此法律ニ據レバ上院ハ問撰法ヲ以テ撰擧スベキ百八十名ノ議員ヨリ成立スベシ。其原撰ニ參與スルノ權利者ハ滿三十年ニ達シ、或ハ八「ターレル」ノ分等稅ヲ納メ或ハ五千「ターレル」ノ價アル土地ヲ有シ、或ハ每年五百「ターレル」ノ純益ヲ有スル者タルベシ。又被撰擧權利者ハ凡ソ孛漏士人ニシテ滿四十年ニ達シ五ケ年以上孛國國民タル者ニ限レリ。然ルニ千八百五十年一月三十一日ノ改正憲法第六十五條乃至第六十八條ハ上院ハ左ノ人員ヨリ成立スベキコトヲ定メタリ（イ）丁年王族（ロ）舊帝國等族ノ家長、國王ノ勅令ニ依リ長子直系法ニ從ヒ世襲スベキ上院ニ於テノ議席及投票權ヲ得タル家ノ家長（ハ）國王ヨリ任ゼラレタル終身議員但其員數ハ（イ）及（ロ）全員十分ノ一ヲ超過スベカラズ（ニ）九十名ノ議員、此議員ハ法律ノ定ムベキ撰擧區ニ於テ最高直接國稅ヲ納ムル原撰擧人ノ三十倍數ヨリ直撰セラレタルモノタルベシ（ホ）大都會ノ市會ヨリ選擧セラレタル三十名ノ議員（イ）（ロ）及（ハ）ノ議員ハ（ニ）及（ホ）全員ノ數ヲ超過スベカラズ。然レドモ此上院ノ組織ハ千八百五十二年八月七日ヲ以テ實際ニ行ハルベク又其時マデ從來ノ假撰擧法ニ據ルベキモノトセリ。此憲法規定ノ施行細則ハ千八百五十二年八月四日ノ假規則ヲ以テ定メラレ、千八百五十三年四月十四日ノ告示ヲ以テ議員ノ認可ヲ得タリ。然ルニ千八百五十三年五月七日ノ上院組織ニ關スル法律ニ依リ更ニ憲法第六十五條乃至第六十八條ヲ廢止シ、上院ハ國王ノ勅令ニ依リ構成セラルベシ。但其改正ハ兩院ノ認可ヲ經法律ヲ以テスベキコトヲ定メタリ。此法律ニ依レバ上院ハ國王ノ世襲若クハ終身問ニ對シ召集スベキ議員ヨリ成立スルモノニシテ、此法律ニ基キ千八百五十四年十月十二日ノ上院組織ニ關スル勅令發布セラレタリ。此勅令ニ依レバ上院ハ左ノ人員ヨリ成立スルモノトス（一）王家ノ王子、是レ國王其丁年ニ達シタル

後召喚スルモノナリ（二）侯家ホーヘン、ツオルレン、シクマリンゲンノ家長（三）舊帝國等族ノ家長（四）聯合國會ノ上院ニ招レタル侯伯及男竝ニ上院ノ世襲議席及投票權ヲ與ヘラレタル者（五）孛國ノ最高等官四名（六）國王ノ特ニ信任スル人、此部ニハ王家ノ緊要ナル法律的問題及法律上ノ事項ニ付キ意見ヲ提出セシメ或ハ之ヲ完結セシムル所ノ王室附屬法律家モ亦屬セリ。（七）左種ノ者ヨリ撰擧セラレタル代議員卽チ（イ）聯合國會ノ上院ニ列シタル寄附者（ロ）各州每ニ團結スベキ騎士領地ヲ有スル伯（ハ）廣漠ナル土地ノ所有ヲ以テ名アル豪族但國王其權利ヲ與ヘタル者ニ限ル（ニ）確實ナル舊家ノ地主連（ホ）大學（ヘ）代議權ヲ具備セル市府是レナリ。撰擧セラレタル議員ノ資格ハ撰擧ノ資格ヲ失フトキハ共ニ消滅スルモノトス。其他各議員ハ不正ノ所爲アルトキハ國王ノ認可シタル上院ノ決議ヲ以テ除名セラルヽモノナリ。

孛國上院ノ法律的成立ニ付テハ屢々議論アリキ、（ロエンネ、ラスケル、シユルツエ、コンスト、ロエスレル等ナリ）然レドモ其論タル詳ニ之ヲ審査スルニ當論ナリト云フベカラズ。第一、立法ノ要素ハ其一要素ニ憲法ヲ改正スルノ權利ヲ與フルコトヲ得ザルトノ假定ハ不當ナリ。顧フニ憲法制定ノ方法ヲ遵守スル以上ハ憲法ニ於テ定メラレタル事項ヲ整理スルコトヲ單純ナル法律若クハ命令ニ讓ルニ於テ何ノ妨アランヤ。是レ全ク許スベキモノナリ。又一說ニ曰ク、千八百五十四年十月十二日ノ命令ハ千八百五十三年五月七日ノ法律ト矛盾セリ。何トナレバ法律ハ唯國王ノ召喚スベキコトヲ定ムルニ、命令ニ依レバ撰擧ニ依リ議員ヲ召喚スルヲ得レバナリ。又法律ハ世襲及終身ノ議員ヲ置クヲ許ス。命令ニ依レバ撰擧セラレタル議員ノ資格ハ一定ノ性質ヲ失フト共ニ消滅スレバナリト云フ。然リト雖モ其假定ハ適當ナリトセズ。何トナレバ撰擧セラレタル議員ト雖モ亦同ク國王ノ召喚ニ依リ始メテ上院ノ議席ヲ得ルモノナレバナリ。又上院ハ國王ノ世襲若クハ終身間ニ對シ召集スル所ノ議員ヨリ成立スト云フ規定中ニ「終身間ヲ召集」トハ唯一時ノ召集ニ對スルモノナリ。又議員資格ノ喪失スベキコトアル規定ハ、王ノ召喚スベキ終身議員タルノ資格ヲ損セザルモノナリ。何トナレバ假令撰擧セラレタル所ノ議員ト雖モ例ヘバ公權ヲ失ヒ又ハ國民ノ資格ヲ失フガ爲メ其資格ヲ失フコトアレバナリ。

王國巴威爾ノ上院ハ左ノ人員ヨリ成立ス。

（一）王室ノ丁年王子（二）最高官吏（三）僧正二名（四）舊帝國等族ノ家長但王國內ニ存スル舊等族ノ支配地ヲ有スル間ニ限ル（五）國王ヨリ命令セラレタル僧正及波羅特斯且教會長（六）國王ノ或ハ世襲或ハ終身間議員ニ任ジタル者、世襲ノ權利ハ唯貴

族ノ土地所有者ニ與フベキモノトス。又終身議員ノ數ハ世襲議員ノ三分ノ一ヲ超過スベカラズ。世襲議員トハ國王ノ世襲議員ニ任ジタル者ノ外尚ホ二僧正、僧正及波羅特斯且教會長ヲ稱シ王子及最高官吏ハ此中ニ算セズ（巴憲第六章二、四、五及千八百二十八年三月八日ノ上院組織法律）上院ニ於テ投票權ヲ施行スルニハ一定ノ身上的性質ヲ要ス。此性質下院ノ議員ニ對シ要求スル者ト稍相同ジ。卽チ國民ノ資格、一定ノ年齡、公權ノ所有及一定ノ障害（後見、倒產、外國ノ官吏）ナキコトナリトス。各邦ノ憲法ニ於テ其邦內ニ住所ヲ有スルコトヲ規定スルコトアルモ今日ニハ獨逸帝國內ノ住所ヲ以テ足レリトス。

上院ノ議員ハ其職ヲ辭スルノ權アルヤ否ヤノ問題ニ付テハ普通ニ裁判スルヲ得ズ、各憲法ニ就キ議員ノ種類ニ付キ定メタル規則ヲ特別ニ審査シタル後始メテ判斷セザルベカラズ。議場ニ出席スルト否トヲ議員ノ自由ニ放任セザル所ノ邦國ニ於テハ、別ニ明條ナキ限リハ辭謝ノ權利ナキ者ト認メザルベカラズ。(1)

(二)孛國ニ於テハ上院議員ハ其職ヲ辭スルノ權ナシ。何トナレバ千八百五十四年十月十二日ノ命令第八條及第九條ニ於テ議員資格ノ消滅原因ヲ列記スレドモ辭謝ノコトヲ載セザレバナリ。上院ノ「マトリケル、コンミシオン（按一種ノ委員）モ亦此意義ニ於テ明言セリ。

著述家中ロエンネ及シユルツエハ之ヲ疑ヘリ。瓦敦堡ニ付テハモール辭謝ノ禁ズベキコトヲ主張シ又サルウユハ其許スベキコトヲ主張セリ。索遜ニ於テハ一定種類ノ議員ハ自由ニ上院ノ議員ヲ辭スルコトヲ得（千八百六十八年十二月三日ノ國會撰擧法律第八條）

第二項　國會組織ノ續二

下院ノ議員ハ悉ク若クハ其八九分ハ人民ノ撰擧ニ出ルモノナリ。國會ノ一院制ナル場合ニ於テモ亦然リ。撰擧ニ關スル法律的規定ハ或ハ憲法或ハ特別ノ撰擧法律ニ於テ定メラレタリ。(1)

(一)孛國ニ於テハ千八百四十九年五月三十日ノ下院議員撰擧ノ施行ニ關スル命令アリ、此命令ハ元來憲法ヲ改正スベキ議院議員ノ撰擧法ナリキ。千八百五十年一月三十一日ノ改正憲法ハ其第七十二條ニ於テ撰擧法律ノ制定スベキコトヲ定メ、且第百十五條ニ於テ其頒布ニ至ルマデ千八百四十九年五月三十日ノ命令ノ有效ナルコトヲ定メタリ○巴威爾ニ於テハ千八百四十八年六月四日ノ國會議員撰擧法律アリ、此法律ハ千八百八十一年三月二十一日ノ法律ニ依リ設定セラレタリ○索遜千八百六十八年十二月三日ノ國會撰擧法律○瓦敦堡千八百六十八年三月二十六日ノ撰擧法律、此法律ハ千八百八十二

年六月十六日ヲ以テ改正セラレタリ。

撰擧權ハ左ノ資格ヲ有スル者ニ屬ス（一）國民ノ資格（二）男性（三）一定ノ年齡、其年齡ハ多クハ二十五年ナリトス。又時トシテハ丁年ナルコトアリ（四）公權ノ所有ナリトス。公權ノ消滅ハ帝國刑法（三二乃至三七）ニ依レバ決シテ法律上當然生ズルモノニアラズ、之ヲ剝奪スルトキハ必ズ判決ニ於テ明言セザルベカラズ。而シテ裁判官ノ此剝奪ヲ言渡スト否トハ一二ノ例外ヲ除クノ外其思料ニ依ル、死刑及懲役ノ刑ニ處セラレタル者ハ必ズ附加刑トシテ公權ヲ剝奪セラルヽモ、禁獄ノ刑ニ處セラレタル者ハ其刑期三ケ月以上ニ達シ、且或ハ法律ノ明條ニ於テ公權ノ剝奪ヲ許シ、或ハ事情ヲ斟酌シテ懲役ノ代リニ禁獄ノ刑ニ處セラレタルトキニ限リ公權ヲ剝奪セラルヽモノトス。是ニ由リ之ヲ觀レバ各邦ノ法律ニ於テ撰擧ニ付キ賄賂ヲ行ヒタル罰トシテ裁判官ノ判決ニ依リ撰擧權ヲ剝奪シ（索遜小國）又ハ一定ノ犯罪若クハ一定刑罰ノ直接ナル結果トシテ撰擧權ヲ失ハシムル（王國索遜撰擧法二及他ノ小國）所ノ規定ハ之ガ爲メ廢止セラレタリ。之ニ反シ帝國刑法ノ規定ハ各邦ノ法律ニ於テ撰擧權利者ノ資格トシテ他人ノ非難ヲ受ケザルコトヲ要求スル所ノ規定（不倫瑞）ニハ影響ヲ及ボサズ。何トナレバ非難ハ啻ニ刑法的處罰ノ結果トシテ受クルコトアルノミナラズ、又不直ナル所業ノ結果ナルコトアレバナリ。（按刑法ノ範内ニ屬セザルヲ云フ）又特赦ハ公權ノ喪失ヲ取消スコトアリ、然レドモ是レ固ヨリ特赦後ノ時ニ對シ效力ヲ生ジ、處罰ノ時ヨリ特赦ノ時ニ至ル時日ニ溯リテ效力ヲ有セザルナリ（五）又後見ノ下ニ立チ倒產ノ現狀ニ居リ、又ハ公共資本ヨリ救助ヲ受クル者、又時トシテ公租收納ノ延期者（孛千八百四十九年五月三十日ノ命令ハ巴撰擧法五索撰擧法二）ハ撰擧權ヲ禁ゼラル（六）以上ノ資格ノ外ニ一二ノ憲法若クハ撰擧法ハ尙ホ國有獨立ノ家計ヲ有スベキコト（索遜諸小國、孛國ノ獨立トハ治產能力ト同意ニシテ此意義ト異ナリ）其國ノ町村ニ於テ町村撰擧權ヲ有スベキコト（孛憲七〇）但千八百四十九年五月三十日ノ命令中ニハ此要件ヲ規定ス）國家ニ直稅ヲ納ムルコト（孛憲七一、巴撰擧法五）不動產ノ所有若クハ一定ノ租額ヲ納ムルコト（索撰擧法三、五、一八）ヲ要求セリ○撰擧權ハ現役兵ニ屬スル軍人之ヲ有セズ、但陸軍官吏ハ此限ニアラズ。（千八百七十四年帝國陸軍法律四九）

被撰權ハ通常撰擧權ノ場合ト同一ノ資格ヲ要セリ（孛憲七四、千八百四十九年ノ命令二九、巴撰擧法二、索四、瓦一三五、一四六）然レドモ一二ノ法律ニ依レバ被撰擧權ニ付キ尙ホ更ニ重要ナル條件若クハ卑キ條件ヲ要スルコトアリ。卑キ條件トハ殊ニ被撰權ニ付テハ直稅ノ上納ヲ要セザルコトヲ指シ、又更ニ重要ナル條件トハ高キ年齡多クハ三十年（孛憲七四、命令二九、巴法一一、索憲七四）獨立スルコト（威密）非難ナキコト（威密）稍多額ノ租稅ヲ納ムルコト（索法四）一定年限內國民ノ資格ヲ有スルコト（孛憲七四、ハ三年間ヲ要求セリ索法四）ヲ云フナリ。然レドモ此最後ノ規定ハ帝國憲法第三條ニ依レバ唯該國民ノ資格ヲ得ル前ニ外國ノ國民タリシ者ニ通

用セラルヽモノニシテ、從前獨逸內ノ一國ニ屬シタル者ニ及バザルモノトス。又上院ノ議員又時トシテハ外國若クハ他獨逸國ノ政務官タル者（索法四）及既ニ撰擧セラレタル下院ノ議員ト近キ親屬（瓦憲一四八）ハ下院ノ議員ニ撰擧セラルヽヲ得ズ。

官吏ノ撰擧ハ總テ獨逸各邦ニ於テ許ス所ナリ。唯時トシテ一定種類ノ官吏（現任大臣、索法四、又檢査院長及檢査官、孛憲七十四條ノ追加タル千八百七十九年六月十四日ノ法律）及宮廷內ノ一定官吏（瓦憲一四六）ハ被撰擧權ヲ有セズ。凡ソ官吏ニシテ撰擧ヲ承諾シ若クハ國會ニ入ルガ爲メ其所屬官廳ニ就キ賜暇ヲ求ムベキヤ否ヤノ問題ハ數多ノ憲法及撰擧法ニ於テ裁決セラレ就中通常之ヲ要セザルコトニ定メタリ（孛憲法七八、巴法三〇）又一二ノ邦國ニ於テハ全ク之ト反對スル原則存セリ（孛憲七五）若シ其原則存セザルトキハ撰擧ヲ承諾スル爲メ本屬官廳ニ賜暇ヲ求ムルヲ要セズ（ゲルベルハ反對論者ナリ）然レドモ國會ニ入ルガ爲メ職務ヲ施行スルコト能ハザルトキハ賜暇ヲ請求セザルベカラズ（ツアリエツオプル）然レドモ官吏國會ニ入ル爲メ賜暇ヲ要セザルトノ規定ハ本國ノ官吏トナル場合ヲ云フナリ。何トナレバ此官吏ハ唯其國ノ法律ニ服從スレバナリ。若シ一邦ノ官吏ニシテ他邦ノ國會ニ撰擧セラルベキトキハ、其政府ニ就キ賜暇ヲ求メザルベカラズ。又一邦ノ官吏ニ付賜暇ヲ要セズト定メタル原則ハ、帝國ノ官吏若クハ兵員ニ適用スルヲ得ズ。蓋シ各邦ノ立法權ハ此者ノ職務上關係ニ付キ規定ヲ定ムルノ權限ヲ有セザレバナリ。而シテ帝國官吏ニ關スル法律及帝國陸軍法律ハ之ニ付キ一モ定ムル所ナシ。之ニ反スル各邦官吏ニ付テノ規定ハ自治體ノ官吏ニ適用セザルベカラズ。蓋シ自治體官吏ハ大體ノ點ニ於テ國家ノ官吏ト同格ナレバナリ（ロエンネハ同說ナリ。又賜暇中ノ代理費用ニ就テハ官吏ノ部ヲ見ルベシ）。

集會權ノ整理ニ關スル法律上ノ規定

第一　獨逸

舊獨逸帝國ノ法制ニ依レバ正當ノ目的ノ爲メニ會社ヲ起シ且集會ニ會合スルハ法律ノ許ス所ナリキ。然レドモ政治上ノ目的及一個人ヲシテ政府ノ支配ヲ脫セシムルノ目的ニ出ル所ノ會社及集合（ヒンドニング）ハ全ク禁ゼラレタリ。又凡ソ一般ノ安寧ヲ害スル所ノ會社及集會ハ直チニ解散スルコトヲ得タリ。

又千七百九十八年十月二十日ノ孛國法會（エヂクト）ニ於テモ、國家ノ憲法若クハ行政ノ變革ヲ討論シ、且之ヲ變革スルノ方法若クハ處分ヲ議スルノ目的ヲ有スル所ノ集合ヲ禁制セリ。又孛國普通法典第二章第六條、第三條、第四條ニ於テ凡ソ會社ノ目的若クハ事業、一般ノ靜謐、堅固及秩序ニ背ク所ノモノハ默許スルヲ得ズ。又元來正當ノ集合ト雖モ一般ノ害トナリ若クハ危險ナルモノト認ムルトキハ之ヲ禁ズルコトヲ得タリ。

千八百三十二年七月五日ノ聯邦決議ニ依レバ、從來慣行セザル人民ノ集會及人民ノ祭儀ハ豫メ政府ノ許可ヲ要ス。集會ニ於テ政治上ノ演說ヲ爲スヲ得ズ。又建議及決議ヲ提出スルヲ得ザリキ。千八百四十八年ノ革命以來臣民ノ集會權ハ一般ニ認容セラレタリ。然レドモ此權利ノ施行ヲ整理シ且一般ニ危險ナル該權ノ濫用ヲ豫防スル爲メニ法律上ノ規定ヲ定メラレタリ。

此關係ニ付テハ千八百五十年三月十一日ノ孛國法律ヲ以テ重要ナルモノトス。而シテ巴威爾及其他各邦ノ法律ハ大體ニ於テ孛國法律ニ符合セリ。此法律ノ緊要ナル規定ハ左ノ如シ。

一　公共ノ事項ヲ講談論議スル所ノ集會ハ、遲クモ二十四時間前ニ集會ノ場所及時日ヲ記載シテ其旨ヲ豫メ地方警察署ニ屆出ベシ。但官許ヲ受クルヲ要ス。

二　政治上ノ事項ヲ講談スル所ノ集會ニハ女子生徒及弟子參與スルヲ得ズ。

三　屋外ノ集會ハ豫メ地方警察署ノ許可ヲ要ス。巴威爾ニ於テハ其他尙町村行政部ノ認可ヲ要ス。

四　凡ソ集會ニシテ法律上ノ規則ニ從ヒ屆出ヲ爲サズ又ハ許可ヲ受ケズ、又ハ犯罪ノ行爲ヲ敎唆誘導シ又ハ兵器ヲ携帶スル者其中ニ在ルモノハ總テ解散セラルヽコトヲ得。

五　公共事項ニ干涉スルヲ目的トスル會社ハ其規約及社員ノ氏名ヲ地方警察所ニ通知スベシ。

六　此法律ノ違犯ニ關スル刑罰ハ又會場ヲ貸シタルモノニ及ブモノトス。

此法律中專ラ注目スベキ點ハ殊ニ豫メ屆出ヲ要スル集會ナル義解ノ廣汎ナル範圍ニアリ卽チ左ノ如シ。

集會權ノ整理ニ關スル法律上ノ規定

（イ）凡ソ公事ヲ講談若クハ論議スル集會ハ皆此法律ノ支配ニ屬ス。公事トハ純粹ナル私己ノ性質ヲ有セザル事項ヲ云フ。故ニ當ニ政治及國家ノ秩序ニ關スルモノナルノミナラズ、總テ人民ノ公共生活ニ屬スルモノヲ云フ。例ヘバ地方組合、商業、工業、宗教等ノ事項其他總テ公益ニ關スル事件ナリ。

（ロ）集會人員ノ多寡併ニ招集又集會ノ方法如何ヲ問ハズ、皆此法律ノ支配スル所ナリ。例ヘバ集會ノ公行ナルト秘密ナルト、又ハ一定ノ人ニ限ルト若クハ公衆ノ集會スルト、又ハ他ノ會同ノ機關例ヘバ晩餐ノ時ニ於テスルト、又會場ノ如何ナル種類ナルトヲ問ハザルナリ。

（ハ）又集會ノ公ケナル講談ヲ爲スノ目的ニ出ルト又ハ其元來ノ目的ハ他ノ點ニ在ルトヲ問ハザルナリ。又如何ナル時ニ於テ公ケナル論談ノ目的アルコトヲ認タルトヲ問ハザルナリ。例ヘバ元來交際上談話ノ爲メニ招集シ後ニ至リ通常ノ祝詞若クハ私己談論ノ區域ヲ超越シタル政治的演說ヲ爲スコトアリ、此事ハ孛國ノ法律ニ依レバ豫メ警察署ニ屆出ヲ爲サヾル以上ハ之ヲ許サヾルモノトス。又偶然數人ノ集會スル場合ニ於テモ此意義ニ於ケル政治的講演ヲ爲スヲ得ズ。

（ニ）法律ニ背反シタル刑罰ハ又會場ノ持主ニ及ブモノナリ。故ニ會場ノ持主ニ於テ元來若クハ形貌上全ク私己ノ目的ノ爲メニ集會シタル者ガ公事ノ講談ニ遷ルコトヲ發見スルトキハ之ヲ禁止シ、又ハ其旨ヲ警察署ニ報知スルノ義務アリ。是レ固ヨリ二十四時間前ニ集會催主ヨリ法律上規定ノ屆出ヲ爲サヾル時ヲ云フナリ。

此孛國法律ノ規定ニ依レバ政治的集會ハ甚ダ廣汎ナル警察上ノ監督ニ屬セリ。然レドモ豫メ屆出ヲ爲サズシテ此ノ如キ集會ヲ爲ス者ナキヲ必シ難シ。此ノ如キ集會ハ何時タリトモ解散ヲ命ズルヲ得。然レドモ之ヲ爲スニハ總テ公私ノ會場及集會ニ付キ甚ダ緻密ナル警察上ノ監督ヲ要スルモノナリ。故ニ警察官ニシテ最モ注目シ、地理人物ヲ熟知シ、以テ一集會ノ果シテ政治的講演ノ爲メ又ハ他ノ目的ノ爲メニ開クヤ否ヲ判斷スルヲ得ザルトキハ、法律ハ一二ノ場合ニ於テ違背セラル、ナキヲ保證シ難シ。是故ニ孛國ニアラザル他國ノ法律ハ國家ニ有害ナル集會ヲ豫防シ、若クハ監督スル爲メ他ノ方法ヲ採レリ。是レ卽チ墺國ナリ。

第二　墺地利（千八百六十七年十一月十五日ノ法律）

此法律ノ大要ハ左ノ如シ

一　人民ノ集會及其他凡ソ招待シタル客員ノミニ制限セズ、何人ト雖モ入場スルヲ得ル集會ハ其目的、場所及日時ヲ記載シ三日前ニ之ヲ地方警察署ニ屆出ベシ。

二　屋外ノ集會ヲ爲スニハ豫メ官廳ノ許可ヲ受クベシ。

三　集會ニシテ其目的刑法ニ背反シ、又ハ其方法公ケノ安全若クハ公ケノ安寧ヲ妨グルモノハ官廳ニ於テ之ヲ禁ズベシ。又集會條例ニ背反シテ集會ヲ爲ス者モ亦同ジ。

四　集會ヲ起スノ方法、法律ニ背キ又ハ集會ニシテ法律ニ背反シタル有樣ニ陷リ、又ハ公ノ秩序ヲ紊スベキ性質ヲ採ルトキハ集會ヲ解散ス。

五　集會者ヨリ提出シタル請願ハ十人以上ノ者共同シテ提出スルヲ得ズ。

此法律ハ大體ニ於テ孛國ノ法律ト同一ノ精神ニ出デ、總テ屋外ノ集會ハ豫メ官廳ノ許可ヲ要シ又其他公ノ集會ハ豫メ許可ヲ受クルヲ要セザルモ、豫メ屆出ルコトヲ要セリ。蓋公衆ノ入場スルヲ得ル所ノ集會ハ常ニ公事ヲ講談スルガ爲メニ開クモノナルベケレバナリ。然リ而シテ孛國法律ハ集會ノ表面的體裁ニ關係セズ、一定ノ人ヲ招集シタル場合ト雖モ集會ニ於テ公事ヲ講演スル以上ハ之ニ屆出ノ義務ヲ課スル點ニ於テ稍嚴ナリ。此點ニ於テハ孛國ノ法律其當ヲ得ルモノヽ如シ。何トナレバ爰ニ人アリ、一定ノ人ヲ招キ政治上ノ演說ヲ爲シ、又ハ公事ヲ論議セントスル場合ハ屢々存スルコトアルベケレバナリ。此ノ如キ集會ハ墺地利ノ法律ニ依レバ屆出ノ義務ニ服セズ、故ニ殆ンド全ク警察上ノ監督ヲ受クルコトナシ。然レドモ墺地利ノ法律ハ屆出ノ義務ヲ獨リ公事ヲ講談スルノ集會ニ制限セズ。總テ公ケノ集會ニ課セリ。故ニ表ニ他ノ目的ヲ以テ集會ヲ起シ以テ法網ヲ脫スルノ弊ナシ。

故ニ今總テ犯則者脫漏ノ弊ヲ救ハント欲セバ兩個ノ法律ヲ合併シ、凡ソ招キタル一定ノ客ニ限ルコトナク、總テ公衆ノ入場スルヲ得又ハ公事ヲ講談シ若クハ論議スル集會ハ悉ク屆出ノ義務ニ服スルヲ以テ最モ良策トス。

墺國及孛國法律ハ唯屋外ノ集會ニ付キ豫メ官許ヲ受クベキコトヲ要セリ。何トナレバ此集會ニ於テハ最モ容易ニ靜謐ヲ妨ゲ、人民ヲ煽動スルヲ得レバナリ。然レドモ墺國法律ハ左ノ場合ニ於テ孛國ノ法律ヨリ一層嚴重ナリ。

一　集會ノ目的刑法ニ背反スル場合ニ止マラズ（是亦孛國ニ於テモ憲法ニ基キ豫メ集會ヲ禁ズルヲ得ルナリ）尙集會ノ方法公ノ安全若クハ公ノ安寧ヲ妨グル場合ニ於テモ豫メ集會ヲ禁ズルコトヲ得、孛國ニ於テハ此ノ如キ理由ニ基キ豫メ集會ヲ禁ズルコトヲ得ズ。

二　法律上ノ方式ニ關スル規則ヲ犯シ、又ハ兵器携帶者ノ入場スル場合ハ勿論其他集會ニ於テ法律ニ背反スル有樣現出シ、又ハ集會ニシテ公ケノ秩序ヲ紊スベキ性質ヲ採ル場合ニ於テモ集會ヲ解散スルヲ得、之ニ反シ孛國ニ於テハ犯罪所爲ヲ敎唆誘導スルノ建議若クハ申立ヲ講談スル時ニ限リ集會ヲ解散スルヲ得。然レドモ余ノ考フル所ニ依レバ孛國ノ警察ハ實際ニ於テハ集會ヲ解散スルニ當リ、時トシテハ墺國法律ノ許ス如ク嚴重ニ處分シテ孛國法律規定ノ文面ニ顧慮セザルモノヽ如シ。

又墺地利ノ法律ハ戰爭若クハ內地(インネレウンルーエ)ノ不穩ナル場合ニ於テハ政府、時ト場所トヲ限リ此法律ヲ廢止シ得ルコトヲ定メタリ。卽チ集會ヲ尙嚴重ナル規則ノ支配ニ服セシムルコトヲ得、此權利タル又孛國政府ノ有スル所ナリ。是レ憲法第百十一條ニ基キ戰爭若クハ一揆ノ場合ニ於テ事危急ナルトキハ公ノ安全ヲ保持スル爲メニ行フベキモノナリ。

第三　佛國。

佛國刑法第二百九十一條乃至第二百九十四條ニ依レバ、凡ソ二十人以上ノ集合ハ其目的ノ政治ニ在ルト他ノ點ニ在ルトヲ問ハズ、豫メ政府ノ許可ヲ受クルヲ要セリ。又集合(フエルセンドレンク)ノ爲メニ其家屋ヲ貸與セントスル者ハ豫メ政府ノ許可ヲ受ケザルベカラズ。此規定ハ千八百五十二年ノ法令ニ依リ唯一定ノ人ニ限ラザル公ノ集會ニ適用セラレタリ。此員數ニ關スル法律上ノ規定ハ屢々會社若クハ集會ヲ二十名以下ノ數ニ分配シ、以テ法網ヲ脫スルガ故ニ、千八百三十四年ノ法律ヲ以テ凡ソ集會及集合ニシテ表面上少數ノ部ニ分タレタル如ク見ユルモノモ亦法律ニ服從スベキコトヲ定メタリ。

千七百九十年八月十六日ノ法律ニ依レバ公ノ靜謐ヲ保持スルニ必要ナルトキハ、警察官廳ハ總テノ會社及集會ヲ禁ズルコトヲ得タリ。

然ルニ千八百六十八年六月六日ノ法律發布セラレ、二十人以上ノ集會ト雖モ豫メ許可ヲ經ルコトナクシテ之ヲ爲スコトヲ得ルニ至レリ。然レドモ孛墺兩國ノ法律ノ如ク、豫メ屆出ヲ要セリ。唯政治若クハ宗敎ノ目的ヲ有スル集會ニ限リ、其公行シ且二十人以上ナルトキハ依然豫メ許可ヲ要セリ。

是ニ由リテ之ヲ觀レバ佛國ノ法制ハ二箇ノ點卽チ第一集會ノ公行及第二集會人ノ員數ニ要點ヲ置クモノナリ。凡ソ二十人以下ノ集會及一定ノ人ヲ招ク所ノ集會ハ全ク自由ニシテ、唯公共靜謐ノ理由ニ基キ警察官廳ヨリ之ヲ禁ズルヲ得ルモノナリ。抑集會人ノ員數ハ最モ注意スベキ一大要件ナリ。何トナレバ多大數ノ集會ハ容易ニ煽動セラレ暴動ヲ敎唆セラルヽコトアレバナリ。故ニ公共安寧ヲ保持シ且騷擾及顚覆ノ破裂ヲ豫防スル爲メニハ公行ノ大集會ヲ嚴重ニ取扱ザルベカラズ。是レ毫モ疑ヲ容レザル所ナリ。實ニ佛國ノ法制ハ此主義ニ及ビ近時佛國數回ノ革命ニ於テ發見シタル實驗ニ基クモノナリ。然レドモ余ノ見ル所ニ依レバ佛國ノ法制ハ集會ヨリ生ズル慢性(急性ナラザル)ノ弊害ヲ除去スルニハ十分ナリトセズ。而シテ其弊害ハ殊ニ漸ク犯罪的思想、國家ニ危險ナル思想、急激ノ思想ヲ人民ノ腦髓ニ容レ、且其他人民ヲ政治上ノ惡道ニ導キ、且之ヲシテ顚覆心ヲ起サシムルニ至ルベシ。此事タル事實ニ於テ證明セラレタリ。蓋凡ソ國民中佛國人民ノ如ク顚覆ニ傾キ易キモノナシ、又佛國ノ政府ハ未曾テ久シク此顚覆ヲ鎭制シタルモノナ

シ。是レ蓋國家ニ危險ナル理論及方向幷現存國家及法律及當時ノ政府ヲ敵視スル理論及方向ハ少數ノ集會又ハ一定ノ人ヲ招キタル大集會ニ於テ傳播スルコトヲ得ルニ淵源スルモノナリ。

然リ而シテ佛國モ亦千八百四十八年ニ於テ稍々墺ノ法律ニ類スル集會法律ヲ發布セリ。然レドモ千八百五十二年ニ於テ再ビ之ヲ廢止セリ。今其要領ヲ擧グレバ左ノ如シ。

一　公ケノ性質ヲ有スル集合若クハ集會ハ少クモ開會ノ四十八時間前ニ警察官廳ニ屆出ヲ爲サヾルベカラズ。但一定禮拜式ノ施行又ハ撰擧ノ爲ニスル集會ハ此例外トス。

二　各集會ノ會議ニ付キ筆記錄ヲ作リ之ヲ公ノ官廳ニ提出セザルベカラズ。

三　公共ノ秩序若クハ道德ニ背キタル事項ニ付キ辯論シ又ハ犯罪ノ所爲ヲ敎唆シ他人ヲ誹毀抗擊スルヲ禁ズ。又此種類ノ書類ハ傳播スルヲ得ズ。

四　祕密結社ハ嚴刑（二年以下ノ禁獄）ニ處ス、幹事及發起人ハ一倍ノ重刑ニ處ス。

五　非政治的目的ヲ有スル所ノ公ナラザル集合及集會ハ、豫メ其目的會場發起人及幹事ノ氏名ヲ屆出タル後ニ之ヲ許スモノトス。屆出ヲ爲サズ又ハ僞製ノ屆出ヲ提出スル場合ニ於テハ直チニ之ヲ閉鎖シ、而シテ其集會者ニ祕密結社ノ社員ノ如ク罰ヲ課ス。此規則ノ例外ニ屬スルモノハ唯工業及慈惠的會社ナリトス。

六　政治的目的ヲ有スル所ノ公ナラザル集會ハ唯豫メ町村官廳ノ許可ヲ受ケ、其定メタル條件ニ基キ爲スモノトス。此許可ハ何時タリトモ取消スコトヲ得。又此ノ如キ許可ヲ受ケズシテ開キタル集會ハ之ヲ閉鎖ス。此規則ニ背ク場合ニ於テハ集會者幹事及發起者ハ祕密結社社員ト同一ノ罰ニ處セラルヽモノトス。

此法律ヲ見レバ一目以テ此法律ノ恰モ孛國及墺國ノ法律ニ於ケル如ク關係人ノ員數ニ注目セザルコトヲ知ルニ足ル。而シテ此法律ハ非政治的集會ニ對シ啻ニ屆出ノミナラズ、許可ヲ受クルヲ要シタルヲ以テ一層嚴ナリト云フベシ。又其罰則モ甚ダ嚴重ナリ。

第四　英國。

英國ノ集會及結社法ハ甚ダ不完全ナリ。大體ニ於テハ全ク自由ナリト稱シテ可ナリ。但通常ノ刑法ヲ犯ストキハ其罰ヲ課セラルヽナリ。

一　集會ニ於テ國王若クハ大臣ニ對シ、反逆、不敬ノ語ヲ發シ又ハ集會人ノ群集若クハ激烈ナル演說ニ依リ、或ハ公衆ヲ畏怖セシムルニ依リ、公ノ平和ヲ妨ゲ且平穩ノ人民ニ恐懼及驚愕ノ心ヲ生ゼシムル者ハ法律ニ背反シ、且反逆ナル集會トシテ處罰セラルヽモノトス。

二　五十人以上議院近傍ノ屋外ニ集會シ、敎會及國家ノ事ニ關シ國王若クハ兩院ノ一ニ請願（アドレッヒ）ヲ提出セントスル者ハ法律ニ背キタルモノナリ。

三　祕密ノ組織ヲ有シ、又ハ他ノ會社ト聯結スル會社又ハ土地所有權ヲ沒收シ分配シ、又ハ廢止スルノ目的ヲ有スル會社ハ嚴禁ナリトス。

此不完全ナル英國ノ法制ハ今日日本ノ有樣及需要ニ適セザルベシ。英國ニ於テハ需要ノ生ズル毎ニ時々人民ノ反逆的方向ニ對シ、例ヘバ愛蘭ノ事件ニ關シ甚ダ嚴重ナル處分ヲ爲スモノトス。然レドモ通常ノ法制甚ダ寛大ナルヲ以テ、此ノ如キ一時ノ處分ヲ爲ストキハ却テ不平心ヲ益シ抵抗力ヲ起スニ過ギズ。是レ英國ニ於テ現存秩序及平和ノ保護不十分ナル結果ヲ生ズル所以ナリ。

孛國及墺國ノ法律及千八百四十八年ノ佛國法律ハ最モ注目スベキモノナルベシ。其重要ナル問題ハ政治的集會ニ付キ唯豫先ノ屆出又ハ豫先ノ許可ヲ要スベキモノナルヤ否ヤニアリ。余想フニ墺地利及佛蘭西ニ於ケル如ク、政府ハ凡ソ公ノ安全若クハ一般ノ安寧ヲ妨グル集會ヲ禁ズルノ權ヲ有スベシ。又政府ハ此ノ如キ權利ヲ有スルニモ拘ラズ、總テ公事若クハ政治ヲ講談スルノ目的ヲ有スル屋内ノ集會ハ唯豫メ屆出ヲ爲スニ止マラズシテ十分ナリト思惟ス。何トナレバ一ニハ警察機關ニシテ集會ノ模樣ヲ監視セシムルヲ得、二ニハ若シ其許可ヲ拒ムトキハ容易ニ政府ノ虚弱及恐懼ヲ示シ、却テ不滿足心ヲ傳播スルノ辭柄トナレバナリ。又佛國ニ於ケル實驗ニ依レバ許可權ノ價値ナキヲ看破スルニ足ル。何トナレバ恰モ此佛國タル常ニ顚覆ノ絶ヘザル國ナレバナリ。又外國（孛墺）ニ行ハル、所ノ原則ヲ去ルコト遠キニ過ルハ策ノ得タルモノニアラザレバナリ。

又此區域ニ於テハ嚴重ノ罰則ヲ設クルヲ宜シトス。此點ニ付キ余ノ注意ヲ乞ハントスルハ現時ノ日本ノ刑法ハ此關係ニ於テ甚ダ缺典アルコト是レナリ。凡ソ祕密ノ集合及集會ハ嚴ニ禁止シ且嚴刑ニ處スルヲ要ス。

登記條例創定ノ儀ニ付意見書

登記條例創定ノ儀ニ付司法大臣請儀ノ旨趣ヲ審査スルニ、方今地所家屋船舶ノ賣買讓與質入書入ノ法不完全ナル爲メニ弊害百出爭訟相次デ起レリ。故ニ區戸長ヲシテ公證ヲ掌ラシムルノ制ヲ改メ、更ニ裁判官ヲシテ登記ヲ爲サシムルノ法ヲ設ケ、以テ行政事務ト司法事務トノ區分ヲ明カニセントスルニアリ。此要點ニ付テハ異議ナシト雖モ、其着手ノ方法ニ至テハ甚ダ完全セザル所アリト信ズ。治安裁判所々在地外ニ在テハ當分ノ内區戸長ヲシテ登記ヲ掌ラシメントスル是レナリ。蓋シ財政上已ムヲ得ザルニ出ルモノナルベシト雖モ、大ニ登記法創定ノ主義ニ反セリ。何トナレバ治安裁判所ハ全國ニ百九十餘箇所アルノミ。區戸長役場ハ一萬千七百ノ多キニ及ブヲ以テ、實際治安裁判所ニ於テ取扱フ所ハ僅少ノ數ニシテ、區戸長役場ニ於テ取扱フ所ノ數ハ之ニ幾數十倍ナルベシ。果シテ然ルトキハ登記法ノ創定タルヤ法ニ明カナル裁判官ヲシテ登記ヲ掌ラシムルノ旨趣ナルニ、其實ハ依然法律ニ熟セザル行政官吏ヲシテ之ヲ取扱ハシムルモノナリ。尙此事タル當分ノ便宜法ニシテ永久ノ事ニアラズト謂フト雖、裁判所增設ノ期限等ヲ豫定スルニ非ザレバ其久キニ亙ルモ未ダ量ル可カラズ。之ヲ要スルニ司法省上申案ニ依レバ、其名ハ行政部分ト司法部分ノ事務ヲ區別スト雖モ、其實ハ從前ニ異ルモノナシト云フモ可ナリ。而シテ區戸長ヲシテ登記ヲ管セシムルニ於テハ、登記ノ整頓到底無覺束、從テ不動產保護ノ主義決シテ相立タザルベシ。依テ司法大臣請儀ノ旨趣ヲ贊成シ、之ヲ貫徹セシムル爲メニ登記役所創定ノ鄙見ヲ左ニ開陳ス。

一　全國各郡役所管内ニ登記所平均二ケ所ヲ設置スベシ。其數千百二十ケ所一ケ所ニ創立費平均五百圓ト見積リ此費額五十六萬圓ナリ。

一　各登記役所ニ平均登記官一名屬員一名半小使一名ヲ置クベシ。登記官ノ數千百二十名屬員ノ數千六百八十名小使千百二十名トナル。

一　登記官ノ給料平均三十圓ト見積リ、一ケ月三萬三千六百圓、一ケ年四十萬三千二百圓トナル。

一　屬員ノ月給平均十圓ト見積リ、一ケ月一萬六千八百圓、一ケ年十九萬千六百圓トナル。

一　小使月給四圓ト見積リ、一ケ月四千四百八十圓、一ケ年五萬三千七百六十圓トナル。

一　廳費一ケ年一ケ所二百圓ト見積リ、二十二萬四千圓トナル。

總計創立費五十六萬圓

爾後每年入費額八十七萬二千五百六十圓トナル。

右ノ如ク全國ニ登記役所ヲ設置シ其事務ヲ司法部内ニ屬シ、各始審裁判所ヲシテ之ヲ管轄セシムルトキハ行政事務ト司法事務トノ區別判明シ、不動產保護ノ道相立隨テ司法大臣請議ノ旨趣貫

徹スルヲ得ベシ。或ハ云ン如此爲ストキハ特ニ創立費ニシテ五十餘萬圓ヲ要スルノミナラズ、毎年八十七萬二千五百六十圓ノ經費ヲ支出セザル可ラザレバ、國庫ニ於テ堪ユベキモノニアラザルベシト。然ルニ司法大臣ノ縷述ノ如ク、他年ヲ期シ該登記ノ事務ヲ擧テ治安裁判所ニ移サントスレバ大ニ其數ヲ增加セザルヲ得ズ。假リニ前陳登記役所ノ數ニ因リ一郡區ニ治安裁判所二ケ所ヲ設置スルモノトシ、同省ノ呈按ニ揭グル豫算ニ基ヅキ一ケ年登記ノミニ係ル裁判所ノ經費額ヲ算スレバ左ノ通。

一金十三萬六千七百六十圓六十錢

右金額ハ司法省呈按ニ揭グル治安裁判所百九十四ケ所ノ登記課經費ニシテ一ケ所ニ付金七百四圓九十五錢二厘ノ合計ナリ。

一金八十四萬五千九百四十二圓餘

但後來一郡區毎ニ治安裁判所二ケ所卽チ全國二千二百ケ所ヲ設置スルトキノ一ケ年經費額ナリ。

右ノ如キ計算ナルヲ以テ前文登記所ヲ新設スルモノト後來經費ニ於テハ別ニ大差ナキナリ。而シテ登記ノ事務擧テ治安裁判所ニ移サンガ爲メ如此多數ノ治安裁判所ヲ設クルモノトスレバ、獨リ登記ニ係ル費用ニ止マラズ、裁判所ニ屬スル費用ニ於テ更ニ莫大ノ支出ヲ要スルヲ以テ一郡區ニ二ケ所治安裁判所ヲ設クルハ到底難カルベシ。

又登記役所ヲ新設スルノ費用合計五十六萬圓ト見積リタリト雖モ、猶一層經費節約ノ方法ヲ案ズレバ當初人民ノ家屋又ハ寺院等ヲ借入登記役所ニ仕用スル是レナリ。然ルトキハ創業費ハ僅ニ筆墨紙硯机等ノ買入ニ及ビ、帳簿新調代價等ニ止マリ、其借家料ノ如キハ別ニ創業費ヲ要セズ、一ケ年一ケ所見積經費二百圓ノ內ヲ以テ之ヲ支辨スルヲ得ベシ。茲ニ創業費ヲ概算スルコト左ノ通リ。

一金三萬三千六百圓　創業費

是ハ全國登記役所ノ數千百二十ケ所、但一ケ所ニ付金三十圓見積リ

內譯

金三圓七十五錢	椅子五脚但一脚七十五錢
金六圓	机四脚但一脚一圓五十錢
金十圓	西ノ內製帳簿二十冊代
金二圓	筆墨紙硯等雜費
金二圓	火鉢土瓶茶碗等ノ什器代
金六圓二十五錢	豫算外ノ雜費

右ノ如クナストキハ大ニ經費ヲ節約シ、殆ンド創業費ナシト云フモ可ナリ。而シテ登記役所設置ノ便ハ獨リ不動產ノ登記ニ止マラザルモノアリ。他日會社條例ノ發布及ビ商法制定ノ日ニ至レバ會社契約ノ登記商人ノ代理人丁年未丁年等ニ於ケル裁判官ヲシテ登記セシメザル可カラズ。民法ニ於ケルモ後見人代理人ノ如キ亦然リトス。實ニ人民ノ權利義務ニ關スル事件ニシテ往々裁判事務ニ屬シ登記ヲ要スルモノ枚擧ス可カラズ。今登記役所ヲ設クルトキハ是等ノ事件ハ法律制定ノコトニ皆登記役所ニ托スルノ便益ヲ得ベキナリ。

又現今調査中ノ公證人規則ヲ案ズルニ假令該規則ヲ發布スルモ急ニ完全ノ試驗ヲ請ケ公證人タルヲ得ル者全國ニ偏カラザルハ各地免許代言人ニ徵シ推測スルニ足ルベシ。故ニ公證人アル地ニ於テハ別ニ官ノ手數ヲ煩サズト雖モ、公證人ナキ地ニ於テ公證ヲ爲スノ便法ヲ設クルハ該規則發布ニ際シ最モ必用ナルベシ。依テ考フルニ登記役所ヲ設クルニ於テハ公證人ナキ地方ニ於テ姑ラク公證人ノ公證事務ヲ兼ネシムベシ。然ルトキハ一面登記役所ノ費用ヲ補ヒ一面公證人規則ヲ全國ニ普及スルノ便ヲ得ベシト信ズ。

夫レ非常ノ改革ヲ爲スニ當リテハ多少ノ入費ヲ顧ミルニ遑ナキハ百事皆然リ。今ヤ不動產公證ノ事務ヲシテ行政部分ヨリ司法部內ニ移シ、以テ之ガ宿弊ヲ一洗セントスルハ不動產保護ノ點ニ付テハ一大改革ト謂ハザル可カラズ。此一大改革ヲ爲スヤ多少ノ創業入費ヲ國庫ヨリ支出セラレザル可ラズ。不然レバ登記法ノ完備ハ得テ望ム可ラザルナリ。況ンヤ一時ノ創業費ハ一案ニ依ルモ五六十萬圓ニ過ギズ。又一案ニ依レバ僅カニ數萬圓ニ止マリ、而シテ爾來收入ノ年額ハ二百萬圓以上ニ達シ、其內每年入費ヲ除却スルモ仍ホ國庫ニ數十萬圓ノ實收アルニ於テヲヤ。

右ノ理由ニ依リ此際各地方登記役所設置ノ儀裁定セラルヽニ於テハ人民ノ便益ナルハ勿論國庫亦益スルアリテ失フ所ナカルベシ。依テ玆ニ鄙見ヲ陳ズ。

明治十九年二月二十七日

登記條例調査委員　岸本辰雄
登記條例調査委員　男谷忠友
登記條例調査委員　周布公平

法典（民法商法）ノ編纂及其公布

明治十年五月民法編纂掛ヲ司法省ニ置キ、箕作麟祥外若干名ヲ委員ニ命ジテ其取調ニ從事セシム。該委員ハ民法草案（第三編財産所有權ヲ得ル方法第六百二十六條乃至第千百七十九條）ノ稿ヲ脫シテ之ヲ大木司法卿ニ呈セリ。

十三年四月民法編纂局ヲ元老院ニ置キ、大木司法卿ヲ總裁トシ、王乃司法大輔議官及判事若干名ヲ委員ニ命ゼラル。該委員ハ法律顧問佛人ボアソナードノ起稿ニ係ル民法草案ニ就キ審査ニ從事セリ。

十四年四月太政官ニ於テ法律顧問獨人ロエスレルニ命ジテ商法草案ヲ起稿シ、山田參議主任トナリ周布公平等其編纂ニ從事ス。

十五年三月更ニ商法編纂委員ヲ置キ鶴田皓ヲ委員長トナス。

十五年八月商法編纂委員ハ商法第一編第一章乃至第六章（通則ヨリ會社ノ部ニ至ル）ノ成案ヲ內閣ニ呈セリ。

十五年九月商法編纂委員ハ爲替法ヲ議了セリ。

十五年民法編纂委員中主任ヲ定メテ人事編ノ起草ニ着手セリ。

十六年七月商法編纂委員ニ於テ取調ベタル商事慣例類集（五冊）ナルモノヲ刊行セリ。本書ハ各地方ニ官吏ヲ派遣シテ商業上ノ慣習等ヲ實地ニ査察シ商法編纂上ノ參考ニ資シタルモノニ係ル。

十七年五月商法編纂委員ヲ解キ更ニ太政官ニ於テ會社法編纂委員ヲ置キ、官內省出仕寺島宗則ヲ委員長ニ、細川潤次郎箕作麟祥等ヲ委員ニ命ジテ其取調ニ從事セシム。

十八年三月破産法編纂委員ヲ置キ會社法編纂委員ヲシテ之ヲ兼ネシム。

十九年三月民法編纂委員ハ財産編及財産取得編ヲ議定シテ內閣ニ呈セリ。

十九年四月民法編纂局ヲ廢シテ其事務ヲ司法省ニ移サレ爾來同省ニ於テハ更ニ民法草案編纂委員ヲ置キ人事編ノ起草ヲ繼續セシム。民事局長南部甕男外數名委員トナリ專ラ本邦ノ習慣ニ依リテ其編纂ニ從事ス。

十九年五月商法編纂委員ニハ會社法ノ取調ヲ終ヘテ之ヲ內閣ニ呈セリ。

二十年四月商法編纂委員ヲ解カル。

二十年十月諸法典編纂ノ事業ヲ完成スル爲メ新ニ法律取調委員會ヲ設ケラレ、山田司法大臣ヲ委員長ニ、細川潤次郎外十三名ヲ委員ニ任ジ、其他報告委員若干名ヲ置キ其取調ヲ分掌セシム。

茲ニ該委員會ノ組織ヲ略述スレバ委員ハ討議決定シ、報告委員ハ議案ノ調査説明等ヲ掌ル。而シテ原案ノ起草者ハ法律顧問ヲ以テ之ニ充テ、卽チ民法ハ佛人ボアソナード商法ハ獨人ロエスレルトス。其法律取調委員會人名ハ左ノ如シ。

法律取調委員長　山田顯義
法律取調委員　細川潤次郎
〃　箕作麟祥
〃　村正直
〃　清岡公張
〃　鶴田皓
〃　尾崎忠治
〃　尾崎三良
〃　西成度
〃　渡正元
〃　村田保
〃　三好退藏
法律取調報告委員　松岡康毅
〃　南部甕男
〃　北畠治房
〃　黑川誠一郎
〃　河津祐之
〃　磯部四郎
〃　光妙寺三郎
〃　栗塚省吾
〃　長森敬斐
〃　今村和郎
〃　本尾敬三郎
〃　進十六
〃　寺島直
〃　奥山政敬
〃　岡村爲藏

〃　小松濟治
〃　黑田綱彥
〃　渡邊康吉
〃　木下周一
〃　岸本辰雄
〃　高野眞遜
〃　長谷川喬
〃　熊野敏三
〃　出浦力雄
〃　龜山貞義
〃　井上正一
〃　宮城浩藏
〃　三坂繁人
〃　波多野敬直
〃　今村信行

〃　加藤高明
〃　都築馨六
〃　工藤則勝
〃　曲木如長

二十一年五月法律取調委員會ハ商法第一編第一章乃至第六章（第一條乃至第二百七十三條）ノ調査ヲ終レリ。

二十一年十月商法第一編第一章乃至第六章ヲ元老院ノ會議ニ付セラル。

二十一年十二月法律取調委員會ハ商法第一編第七章以下商法全部（第二百七十四條乃至第千六十四條）ヲ議了シテ內閣ニ呈セリ。

二十一年十二月法律取調委員會ハ民法中財產編（第一條乃至第五百七十二條）財產取得編（第一條乃至第二百八十五條）債權擔保編（第一條乃至第二百九十八條）及證據編（第一條乃至第百六十四條）ヲ議了シテ內閣ニ呈セリ。

二十二年一月商法第一編第七章以下商法全部ヲ元老院ノ會議ニ付セラル。同院ハ調査委員ヲ設ケ又審查委員ヲ置キ、數十回ノ會議ヲ經タル後、六月ニ到リ總會議ニ於テ之ヲ可決セリ。

二十二年一月民法中財產編（第一條乃至第五百七十二條）財產取得編（第一條乃至第二百八十

五條）債權擔保編（第一條乃至第二百九十八條）及證據編（第一條乃至第百六十四條）ヲ元老院ノ會議ニ付セラル。同院ハ七月ニ到リ之ヲ議定上奏セリ。

二十三年四月法律取調委員ハ民法中人事編（第一條乃至第二百九十三條）及財産取得編相續等ニ關スル規定（第二百八十六條乃至第四百三十五條）ヲ議了シテ內閣ニ呈セリ。其成案ハ特ニ民法擔當ノ報告委員ヲシテ之ヲ起草セシメ、法律取調委員會ニ於テ反覆審議セルモノニ係ル。

二十三年五月民法中人事編及財産取得編ヲ元老院ノ會議ニ付セラル。九月ニ到リ之ヲ議定上奏セリ。先是民法全部ハ既ニ樞密院ノ諮詢ヲ經タリ。

二十三年三月政府ハ法律第二十八號ヲ以テ民法中財産編、財産取得編、債權擔保編、證據編ヲ公布セリ。其公布ハ左ノ如シ。

朕民法中財産編財産取得編債權擔保編證據編ヲ裁可シ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十六年一月一日ヨリ施行スベキコトヲ命ズ

御名御璽

明治二十三年三月二十七日

內閣總理大臣兼內務大臣　伯爵　山縣有朋

海軍大臣　伯爵　西鄕從道
司法大臣　伯爵　山田顯義
大藏大臣　伯爵　松方正義
陸軍大臣　伯爵　大山巖
文部大臣　子爵　榎本武揚
遞信大臣　伯爵　後藤象次郎
外務大臣　子爵　青木周藏
農商務大臣　岩村通俊

二十三年三月政府ハ法律第三十二號ヲ以テ商法ヲ公布セリ。其公布ハ左ノ如シ。

朕商法ヲ裁可シ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十四年一月一日ヨリ施行スベキコトヲ命ズ

御名御璽

明治二十三年三月二十七日

內閣總理大臣兼內務大臣　伯爵　山縣有朋
海軍大臣　伯爵　西鄕從道

司法大臣　伯爵　山田顯義
大藏大臣　伯爵　松方正義
陸軍大臣　伯爵　大山巖
文部大臣　子爵　榎本武揚
遞信大臣　伯爵　後藤象次郎
外務大臣　子爵　青木周藏
農商務大臣　岩村通俊

二十三年十月政府ハ法律九十八號ヲ以テ民法中財産取得編人事編ヲ公布セリ其公布ハ左ノ如シ。

朕民法中財産取得編人事編ヲ裁可シ茲ニ之ヲ分布セシム此法律ハ明治二十六年一月一日ヨリ施行スベキコトヲ命ズ

御名御璽

明治二十三年十月六日

内閣總理大臣　伯爵　山縣有朋

内務大臣　伯爵　西郷從道
司法大臣　伯爵　山田顯義
大藏大臣　伯爵　松方正義
陸軍大臣　伯爵　大山巖
遞信大臣　伯爵　後藤象次郎
外務大臣　子爵　青木周藏
海軍大臣　子爵　樺山資紀
文部大臣　芳川顯正
農商務大臣　陸奥宗光

二十三年十二月衆議院議員永井松右衞門外二十九名ハ商法及商法施行條例施行期限法律案ヲ提出シ兩院ヲ通過セリ其法律案ハ左ノ如シ。

商法及商法施行條例期限法律案

明治二十三年三月法律第二十二號商法及同年八月法律第五十九號商法施行條例ハ明治二十六年一月一日ヨリ施行ス。

二十三年十二月商法實施延期ニ關スル法律案兩院ヲ通過シ政府ニ於テ議會ノ議ヲ容レ將サニ同

法延期ニ決セントスルヤ、山田司法大臣ハ其延期ノ不可ナル所以ヲ痛論セル一篇ノ意見書ヲ內閣ニ提出セリ。而シテ其延期ヲ公布セラルヽニ際シ病痾ニ依リ辭表ヲ奉呈セリ。

聖明其辭表ヲ許サレズ、大木樞密院議長ヲシテ司法大臣ノ職ヲ臨時兼任セシメラレタリ。

二十三年十二月政府ハ議會ノ議ヲ容レ商法及商法施行條例施行期限法律竝ニ商法ニ關スル法律施行期限法律ヲ公布セリ。其公布ハ左ノ如シ。

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル商法及商法施行條例施行期限法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名御璽

明治二十三年十二月二十六日

內閣總理大臣　伯爵　山縣有朋
司法大臣　伯爵　大木喬任
內務大臣　伯爵　西鄕從道
大藏大臣　伯爵　松方正義
陸軍大臣　伯爵　大山巖
遞信大臣　伯爵　後藤象次郎
外務大臣　子爵　青木周藏
海軍大臣　子爵　樺山資紀
文部大臣　芳川顯正
農商務大臣　陸奥宗光

法律第百八號（官報十二月廿七日）

明治二十三年四月法律第三十二號商法及同年八月法律第五十九號商法施行條例ハ明治二十六年一月一日ヨリ施行ス。

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル商法ニ關スル法律施行期限法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名御璽

明治二十三年十二月二十六日

內閣總理大臣　伯爵　山縣有朋
司法大臣　伯爵　大木喬任
大藏大臣　伯爵　松方正義

法律第百九號（官報十二月廿七日）

左ニ掲グル法律ハ明治二十六年一月一日ヨリ施行ス

一、明治二十三年八月法律第六十六號商事非訟事件印紙法

一、同年八月法律第七十二號銀行條例

一、同年八月法律第七十三號貯蓄銀行條例

一、同年十月法律第百一號

二十四年一月衆議院議員佐竹義和外二十一名ハ商法及民法修正方案ヲ提出シタルモ院議ニ上ラザリシ其修正方案ハ今之ヲ略ス。

二十四年二月貴族院議員小畑美稻外九十六名ハ民法商法ニ關スル建議案ヲ政府ニ提出セリ其建議案ハ左ノ如シ。

某等民法及商法ヲ審査スル爲メニ委員ヲ構成スルノ最大急務ナルヲ認メ、我貴族院ヨリ左ノ建議ヲ爲サンコトヲ發議ス。

曩ニ本院ニ於テ商法延期ノ議決ヲ爲シタルモノハ唯ダ其ノ施行期限ノ急迫セルヲ不可トスルニ止マラズ、該法ニ規定スル所往々民情ニ違ヒ習慣ニ背キ、法文難澁ニシテ意義明晰ヲ缺キ、不備缺典尠カラザルヲ以テ先ヅ其ノ施行ヲ延期シ、其ノ期限ニ到ルマデノ間ニ於テ再ビ審査ヲ經、大ニ修補ヲ加ヘントスルヲ以テ延期ノ主眼トシタルハ載セテ當時ノ議事筆記ニ詳カナリ。

而シテ今ヤ既ニ兩院ノ議決ヲ裁可セラレ、其ノ施行期限ヲ延期セラレタルヲ以テ、一日モ速ニ特別審査委員ヲ設ケザルベカラズ。然ルニ商法ハ民法ノ特別法ナルガ故ニ、勢ヒ民法ニ波及セザルヲ得ザルハ論ヲ俟タズ。殊ニ民法モ亦商法ト同ジク民俗習致ニ通ゼズ。不備缺典ノアルハ一般法學者ノ唱道スル所ナルヲ以テ、商法ヲ審査スルト同時ニ於テ民法ヲモ審査シ、兩法相待テ完全ヲ期セザルベカラザルナリ。

然リ而シテ一院ニ於テ之ヲ審査セント欲セバ必ラズ繼續委員ヲ設クルノ外方法アルコトナシト雖ドモ、商法民法共ニ浩瀚ノ法典ナルヲ以テ、之ヲ審査セントセバ其委員タル者ハ院内ノ學識才藝アルモノヲ以テ足レリトスベカラズ。法官法學家幷ニ世間實歷經驗アルモノヲモ加ヘザルベカラズ。或ハ一院ニ於テ審査スルヲ得ザレバ宜ク兩院ノ繼續委員ヲ聯結シ、以テ審査ヲ擔理セシムベシト說クモノアリト雖モ、議會ハ單ニ院内ヲ限リ、苟クモ院外ノ人タルニ於テハ何等ノ名家有識モ之ニ加フル能ハザルノミナラズ、此ノ如キ場合ニ於テ兩院聯結スルハ議院法ノ許サヾル所ナリ。殊ニ商法ヲ審査スルト同時ニ於テ相併立シテ始テ完全ヲ得ルノ民法ヲモ審査セザルベカラズトセバ、其事業ヨリ論ズルモ又其ノ規則上ヨリ考フルモ、商法ノ審査ハ決シテ議會ノ專ラ擔任スベキ事業ニ非ザルベキナリ。

且其ノ施行期限ハ僅ニ二年ノ後ナルヲ以テ、其實施ニ支障ナキノ時限ニ於テ審査ヲ了ヘ、而シ

テ其ノ結果ニ由リテ必要ナル修補ヲ施サシメザルベカラザルヲ以テ、到底議會ニ於テ企及スベカラザルノ事業タルハ瞭々タリ。是ヲ以テ某等ハ審査ノ業ヲ以テ之ヲ政府ニ擔任セシメ、政府ノ事業トシテ特ニ審査委員ヲ設置セラレンコトヲ冀望ス。

審査委員ハ內閣ニ置カル、モ又ハ司法省ニ設ケラルルモ一ニ政府ノ撰擇スル所ニ任スベシト雖、其何等ノ人ヲ以テ委員ヲ組織スベキヤニ付テハ豫メ政府ノ注意ヲ請ハザルベカラズ。

一、兩院議員中ヨリ一個人ノ資格ヲ以テ勅選スベシ。

二、法官

三、帝國大學ノ教員

四、商法會議所ノ會員ヲモ勅選シテ之ニ加フベシ。殊ニ商法ニ付テハ商法會議所會員ノ如キ實際經驗家ノ說ヲ參酌セザルベカラザルノ要アリ。

夫レ此ノ如キ完全ナル組織ニ係ル委員ヲシテ審査セシムルトキハ、初メテ法文明晰習慣民情ニ適應シタル主意目的此ニ存スルヲ以テ、某等特ニ審査委員ヲ政府部內ニ設ケ、兩法施行期限ニ支障ナキノ時限ニ於テ審査セシメラレンコトヲ玆ニ建議ス。

二十四年三月衆議院議員高木正年ハ商法改正案ヲ提出シタルモ院議ニ上ラザリシ。其改正案ハ今之ヲ略ス。

二十四年三月

天皇陛下ハ法典編纂事業ノ完結セルヲ嘉賞セラレ、法律取調委員長山田顯義ヲ正二位ニ陞敍シ、法律取調委員箕作麟祥以下四十一名ニ各々勳章ヲ授與セラレタリ。

二十四年四月貴族院提出民法商法ニ關スル建議案ニ對スル閣議ハ左ノ如ク一決セリ。

明治二十四年四月十四日

內閣總理大臣　法制局長官

各大臣

別紙貴族院建議民法商法ニ關スル件ヲ審査スルニ、建議ノ要點ハ民法商法ニ規定スル所往々民情ニ違ヒ習慣ニ背キ法文難澁ニシテ意義明晰ヲ缺キ、不備缺典尠カラザルヲ以テ、兩法施行期限前、政府ニ於テ兩院議員、法官、帝國大學教員、商業會議所員ノ中ヲ以テ審査委員ヲ設ケ更ニ之ヲ調査セシメンコトヲ請フニ在リ。

右建議ノ旨趣ニ依レバ民法商法ニ異議ヲ容ルルノ所個々ノ場合ヲ指スニ非ズシテ其全體ヲ攻擊スルモノナリ。其委員ニ委任スルノ條件モ定マラズ漠然再審ヲ請フニ止マリ、之ガ爲メニ設立スル委員ハ無制限ノ意見ヲ以テ自由ニ之ヲ修正スルヲ得ベシ。此ノ如キ修正委員ハ編纂委員ト殆ンド異ナル所ナク、之ヲ今日ヨリ二十六年一月一日前僅ニ一歲半ノ事業トシテハ人ノ能ク爲シ得ベ

キコトニ非ズ。此ノ如キ短日月ノ間ニ此ノ如キ大事業ニ著手スルモ班々歸一ヲ失フ龍頭蛇尾ノ修正ヲ爲ス歟、其業未ダ半ナラズシテ施行期限ヲ經過スル歟、必ズ其一ニ居ラン。加之政府ハ既ニ完全ノ編纂トシテ兩法ヲ發布シタリ。之ヲ非議スルモノ一モ場合ヲ揭ゲテ其非ヲ指摘スルモノナク、政府亦其非ノ何處ニ在ルヤヲ認メズシテ漫ニ委員ヲ設ケテ再調査ヲ爲サシムルハ自家撞着ノ處置ト謂フベキノミ。

右ノ理由ナルヲ以テ政府ハ更ニ其非ヲ明白ニ指摘スル歟、又ハ實施ノ後實際ニ害アル點ヲ發見シタル歟ヲ待テ徐ニ改正ヲ爲スコトニ決意シ、右建議ハ採用不相成方可然ト信認ス。

新法典非難ノ批評

ボアソナード稿

吾雜誌記者ハ原來嚴正中立ヲ守リ、日本帝國議會場裡及ビ新聞紙上ニ於テ論議分裂セル問題ニハ敢テ容喙セザラン事ヲ期シタリ。然リト雖ドモ新法典實施延期問題ノ若キハ事國際上ニ涉リ極メテ重大ニシテ、其影響スル所少カラザルガ故ニ、余輩ハ特ニ玆ニ之ヲ論ゼントス。蓋シ此問題ニ對シテ非難ヲ加ヘタル者少カラザルニアラズ。然レドモ其基ク所ヲ觀レバ概ネ日本新法ノ模範タル佛國法典ニ對スル非難ニアラザルハナシ。是ヲ以テ吾日本佛文雜誌ハ玆ニ其謬妄ヲ辯ゼントス。

日本新法及ビ佛法ニ對シ兩院議員ノ加ヘタル非難ハ其暴慢荒誕ナル往々聞クニ堪ヘザルモノアリ。然レドモ余輩ハ之ニ答フルニ當リ敢テ其人ヲ指摘セザル・ベシ。蓋シ余輩ハ其說ヲ攻擊スルモ其人ヲ攻擊スルコトヲ欲セザレバナリ。

今ヤ民法及ビ商法ノ施行ハ兩院之ヲ三年間延期スベキコトニ議決シタリ。然レドモ其議決ハ未ダ勅裁ヲ經ザルヲ以テ、彼ノ二法典ヲ發布シテ一千八百九十三年一月一日ヨリ之ヲ施行スベキヲ命ジタル一千八百九十年三月二十七日ノ勅令ヲ廢スルノ法律ト爲ラズ。是ヲ以テ二法典ノ尙ホ維

持セラレテ明年ヨリ施行セラルヽニ至ルヤモ未ダ知ル可ラズ。又縱令本編ヲ世ニ公ニスルニ先チ二法典延期ノ勅裁アルモ余輩ハ本編ヲ公行スルコトヲ憚カラザル可シ。何トナレバ純然タル施政上ノ理由ニ出デ、三大立法權ノ衝突ヲ避クルニ至ルモ未ダ之ガ爲メ余輩ノ玆ニ辯破セントスル謬說ノ如キ、沿革上哲學上及ビ法律上ノ迷謬ヲ變化シテ眞理トナラシムル能ハザレバナリ。

今若シ法典ノ効用漸ク顯レントスル時ニ方リ、之ヲ抛棄スルコトアラン乎。國家ハ他日斯ノ如キ虛妄ノ原因ニ誤ラレテ不幸ナル結果ヲ被リタルヲ自ラ怪ミ且之ヲ悔ユルニ至ル可シ。

余輩ハ固ヨリ法典ニ對シテ兩院議員ノ加ヘタル非難ノミヲ批評スルニ止マルヲ得可キモ、尙ホ日本法律家中嚮ニ一篇ノ意見書ヲ草シ、議會ノ討議ニ先チ之ヲ議員其他全國到ル處ニ配布シテ輿論ヲ喚起セントシタル者アリテ輕々ニ看過スベカラザルガ故ニ、併セテ其迷謬ヲ辯破セン。蓋シ其意見書ノ誤謬ハ盡ク議會ニ於テ唱道セラレザリシト雖ドモ、新聞雜誌ニシテ之ヲ敷衍又ハ轉載シタルモノ鮮シトセズ。是ヲ以テ其謬說ハ法典ノ聲價ヲ毀損シ隨テ兩院ノ議決ニモ多少影響スル所アリシヤ必然ナリ。

是ヲ以テ余輩ハ先ヅ彼ノ意見書ノ非難ヲ辯破シ、次デ貴族院及ビ衆議院議員ノ非難ヲ反駁セン。

第一章　意見書ノ非難ヲ駁ス

今其反駁ヲ爲スニ當リ其非難ヲ區別シ主トシテ民法ニ加ヘタルモノト、民法商法ニ通ジテ加ヘタルモノト、特ニ商法ニ加ヘタルモノトシ、其失當ナルヲ論明セン。

其一　主トシテ民法ニ對シ併セテ民法ト商法トニ通ジタル非難ニ答フ

法典實施延期意見ニハ十一人ノ氏名ヲ揭ゲタリ。而シテ其過半ハ唯ダ英法若クハ米法ノミヲ學ビタル辯護士ニシテ、就中二三者ハ知名ノ士ナリ。余輩固ヨリ其惡意ヲ挾ンデ言ヲ構フモノニアラザルヲ知ル。然レドモ亦其民法及ビ商法ニ對シテ不滿ヲ抱ク所以ノモノハ、果シテ其學ブ所ニ偏スルモノニ非ザル無キ乎。新法實施ノ曉ニ至ラバ更ニ之ヲ研究セザル可ラザルヲ以テ不快トスルモノニ非ザル無キ乎。加之其法條ノ非難ヲ見ルニ、往々其意義スラ猶ホ之ヲ理會セザルヲ證スルニ足ルモノナリ。

然リ而シテ余輩ハ玆ニ意見書ノ謬說中、議會ニ於テ唱道シタル者アラザリシ點ノミヲ指摘攻擊スルニ止マルベシ。蓋シ重復ヲ避ケンガ爲メナリ。

今其民法（人事編）ノ家制ニ關シ國俗ヲ擲チタリトノ非難ハ議會ニ於テモ亦唱道シタル者アリシガ、意見書ニ其論據トシテ述ベタル所ハ實ニ怪訝ニ堪ヘザルモノアリ。意見書ニ曰ハク、今ヤ

我民法ハ祖先ノ家制ヲ排却シ、極端ナル個人本位ノ法制ヲ設ケ、數千年來ノ國俗ヲ擲チ、耶蘇教國ノ風習ヲ移入セントス。倫常ヲ壞亂セント欲スルモ豈ニ得ベケンヤ。夫レ一男一女情愛ニ因リテ其居ヲ同フスルハ所謂耶蘇教國ノ一家ナリ。平等博愛君臣ノ別ナク、父子ノ倫ナキハ耶蘇教國ノ常道ナリ。人類ノ敬ト愛トハ獨尊ノ耶蘇基督獨リ之ヲ專ニスル所、君父ノ與リ知ルベキモノニアラズ。故ニ耶蘇基督ノ前ニ在テハ父子平等ニシテ尊卑ナシ。祖先及ビ父ヲ敬慕スルハ却テ耶蘇基督ヲ侮辱スルモノナリ。子孫豈ニ祖先ノ敬スベキヲ知ランヤ。是ニ於テカ孝道衰焉。故ニ耶蘇基督ノ前ニ在テハ君臣平等ニシテ上下ナシ。君主ヲ崇敬スルハ却テ耶蘇基督ヲ侮辱スルモノナリ。臣民豈ニ君主ノ神聖ヲ認ムルコトヲ得ンヤ。是ニ於テカ忠君ノ道廢焉ト。

嗚呼吾人固ヨリ外教ヲ知ラザルモ敢テ不可ナリト謂フ可カラズ。若シ知ラズンバ宜ク語ラザルベキノミ。知ラズシテ之ヲ論ズルハ徒ラニ識者ノ嗤ヲ招クノミ。論者ニシテ若シ傳道師若クハ基督信者ニ質サン乎。其言ノ全ク基督教旨ニモ反スルヲ知ルベシ。蓋シ基督教ノ經文ニ『父母（勿論祖先ヲ含蓄ス）ヲ尊敬シ「セザール」ノ物ハ之ヲ「セザール」ニ還ヘシ、神ノ物ハ之ヲ神ニ納ムベシ』ト言ヘルハ卽チ臣子タルノ分限ト基督信者タルノ義務トヲ調和シタルモノナリ。又耶蘇ノ「我レニ從ハントスル者ハ其父母ヲ辭セザル可ラズ」ト謂ヒシモ、是レ決シテ現世人倫ヲ說キタルニアラズ、後世未來ノ圓滿ヲ諭シタルノミ。是レ佛教ニ遁世ヲ說クニ異ナラズ。毫モ法律ト相關スル所ナシ。

論者ハ又日本家制ノ基督家制ニ比シテ勝レルモノアルヲ指サントシ論ジテ曰ハク「一男一女情愛ニ因リテ其居ヲ同フスルハ所謂耶蘇教國ノ一家ナリ」ト亦妄誕ノ言ノミ。論者ノ所謂單ニ男女ノ同居スルハ卽チ野合ニシテ、基督教亦固ヨリ不德トシテ誡シムル所ノモノナリ。

日本國風ノ祖先ヲ尊ミ子孫ヲ卑ミ、先天ヲ以テ後系ニ勝レリトスルハ余果シテ其歐洲國俗ノ卑屬親ノ爲メニ尊屬親ノ躬ヲ顧ミザルヲ尙ムニ若カザルヤ否ヤヲ知ラズト雖トモ、子孫其祖先ノ祭祀ヲ絕タザルガ若キハ啻ニ日本及ビ支那ニ止マラズ、萬邦普及ノ俗習ト謂フベシ。唯夫レ祖先ノ餘教ヲ墨守シテ資產ノ分配及ビ料理ヲ爲スニ至テハ國家經濟上容喙スベキ所ナシト謂フ可カラズ。蓋シ東洋國民ノ近世文化ノ域ニ進ムノ遲キハ主トシテ人民偏ヘニ其父祖ノ陋習ヲ株守シ、更ラニ子孫ノ利ヲ圖ラズ、百世ノ計ヲ畫スルノ迂ナルニ由ル。

是ニ由テ之ヲ觀ルニ新民法ハ從來ノ家制ヲ釐革セズ、纔カニ二三ノ變更ヲ施シタルニ過ギズ。且相續ノ制ノ若キハ一ニ嫡子權ヲ存シタルガ故ニ新法ノ果シテ從來ノ家制ヲ紊亂シタルヤ否ヤノ重問題ハ敢テ論ズルノ要アラザルナリ。

論者ハ更ラニ其論場ヲ轉ジ民法ヲ非難シテ曰ク「古來ノ民法ニ在テハ人事ヲ重ンジ人事ヲ主トスルヲ通則トスレドモ、顧ミテ我法典ヲ考フレバ財產ニ關スル規定ヲ主トシタリ云々」ト。

若シ夫レ法條ノ多寡ヲ標準トシテ法理ノ輕重ヲ知ルヲ得ベキモノトスレバ、論者ノ非難當ヲ得タリト謂フ可キモ、論者モ亦敢テ法文ノ多寡法理ノ輕重ニ相應スルモノト謂フノ意ニアラザルベシ。抑々財産編ノ人事編ニ比シ殆ト二倍ノ條項ヲ要シタル所以ノモノハ、財産ヲ組織スル權利ノ種類多キト、所有權及ビ債權義務ノ原因タル合意ノ理論ニハ細密ノ規定ヲ要シ、殊ニ人權ノ規定中ニハ其消滅ニ關スルモノヲ掲ゲザル可カラザルニ由ル。之ニ反シテ家制及ビ人事ハ斯ノ如ク複雜ナルモノニアラズ。是レ財産編ノ條項人事編ヨリ多キ所以ナリ。

左レバ論者ノ財産編ヲ先ニシテ人事編ヲ後ニスルトノ言ノ若キハ其說全ク架空ニシテ、余輩其論旨ヲ理會スルニ苦シム。顧フニ財産人事二編ノ理論ハ各々單行スベキモノニシテ、卽チ財産編ノ理論ハ道理公義公益ノ普通原則ニ基クヲ以テ、時ト處トニ由リテ異ナルコトナシ。之ニ反シ人事ハ時ト處ヲ異ニスルニ從テ多少ノ異同ナキ能ハズ。若シ論者ニシテ諸外國ニ行ハレタル法律ノ沿革史ヲ繙カバ必ズヤ所有權義務及ビ債權擔保ノ理論（此理論ハ總テ財産編ノ權利ヲ組織スル所ノ者ナリ）ハ希臘羅馬ニ於ケルト同ジク近世ニ於テモ概ネ其軌ヲ一ニスルヲ見ル可シ。之ニ反シテ家制ノ組織ハ古今大ニ其趣ヲ異ニスルモノナリ。之ヲ要スルニ財産編ノ理論ハ時ノ古今ヲ問ハズ、國ノ東西ヲ論ゼズ、其綱領殆ント同一ナリト雖モ、民事上ノ能力婚姻及ビ養子ノ要件夫權及ビ親權ハ古來幾多ノ變革ヲ經テ今日ニ至リタルモノナリ。

是ヲ以テ日本ニ於テ假リニ人事編ナク舊來ノ制度ヲ依然固守スルト爲スモ猶ホ財産編以下ハ之ヲ施行スルヲ得ベシ。蓋シ人事編ハ最モ後ニ之ヲ編纂シ、且之ヲ制定スルニ當リ財産編中爲メニ改正ヲ要シタル條項ノ多カラザリシヲ見テモ亦然ルヲ得ル所以ヲ知ルニ足ラン。加之人事編ノ編纂後其財産編ト相矛盾スル所ニ關シテハ財産編ニ更正ヲ加ヘタリ。故ニ民法ニ於テハ財産ヲシテ人事ニ適合セシメタリト謂ハザルベカラズ。例ヘバ當初財産編ニ於テ多數相續ノ制ヲ認メタリト雖ドモ、後日單數相續卽チ嫡子相續ヲ認メンコトヲ決議スルニ至リ、遺産分配ノ均不均ニ關スル條項ハ悉ク之ヲ財産編ヨリ削除シタリ。然ラバ則チ論者ノ所謂財産法ヲ先ニシテ人事法ヲ後ニシタルモノハ果シテ何クニカ在ル。

之ヲ要スルニ論者ノ非難ハ全ク據ル所無キモノナリト謂フ可シ。蓋シ財産人事二編ノ理論ハ概ネ各々獨立スベキモノニシテ、固トヨリ其先後ノ問題ノ起ルベキ因緣アラザルナリ。唯一ノ場合ニ於テハ二理論ノ相牽連スルモノアリト雖ドモ、民法ハ此場合ニ於テ人事ヲ先ニシテ財産ヲ後ニセリ。故ニ此場合ニ付テハ論者人事ヲ措テ財産ヲ先ニシタリト强辯非難スルモ其非難ハ極メテ薄弱ナルノミ。

論者ノ所謂民法ハ耶蘇教主義ニ依リテ編纂シタルモノナリトノ說ハ毫モ論據ナク、其謬誕ナルヤ瞭然ナリ。論者ハ更ラニ謂フテ曰ク、民法ニハ家及ビ戶主ナル空文ヲ存スルニ過ギズ云々、然

レドモ民法ノ所謂家ナル者ハ耶蘇教俗ノ家ナリ、數千年來吾人ノ認可セル一法人ニアラズシテ夫婦同居セル一概ノ總稱タルニ過ギザレバ、民法ハ飽迄個人ヲ以テ權利ノ主體ト爲セリト。斯ノ如キ非難ハ奈何ゾ嫡子權及ビ其必然ノ結果ヲ認許シタル法典ヲ施行スル邦國ニ於テ之ヲ主張スルヲ得ンヤ。且民法編纂者ハ家及ビ戸主ナル語ニ附スルニ從來日本ニ於テ使用シ來リタル意義ヲ以テシタルノミ。決シテ其意義ヲ變ジタルニハアラザルナリ。民法ハ多少戸主ノ權力ヲ制限シタリト雖ドモ、敢テ之ガ爲メ其性質ヲ變更セズ。是ヲ以テ編纂者ハ或ル論者ノ人心ヲ煽動セントシテ主張スルガ如ク、國教ヲ紊亂シ家制ヲ破壞スベキ法則ヲ以テ民法中ニ設定シタルコトナシ。

論者ハ又新法典ヲ非難シテ云ハク、人事編ノ規定ハ父死亡スルトキ母ヲシテ當然後見人タルノ權利ヲ有セシメタリ。故ニ一家ノ財産ハ悉ク未亡人ノ意思ヲ以テ自由ニ之ヲ處分スルコトヲ得、是レ家ヲ重ンジ家ヲ以テ一法人トスルノ家制ニ適スルモノト謂フ可キカト。

論者ニシテ若シ右ノ規定ト後見ニ關スル規定トヲ對照スレバ、母ノ權力モ亦普通後見人ノ權力ト同ク精密ナル親族會議ノ監督ノ爲メニ制限セラルルヲ見ル可シ（人事編第百九十四條）蓋シ後見人ノ管理其處ヲ得ザルコトアリ、加之往々其惡意ヲ挾ムコトアルハ今日既ニ其弊ニ堪ヘザル所ニシテ、民法ノ之ヲ慮リテ未成年相續者ヲ保護シタルハ全ク其最恩惠ナリト謂ハザル可カラズ。夫レ親權ハ後見職ト等シク之ヲ執行スル者ヲシテ利スル所アラシメントシテ設定シタルモノニアラズ、一ニ未成年者ノ利益ヲ圖リタルニ出ヅルノミ。是ヲ以テ法律ハ家族中最モ信用スルニ足リ、且未成年者ヲ慈愛スルコト深シト認ムベキ者ニ親權ヲ附與セザル可カラズ。若シ父ニシテ存在セン乎、父ノ親權ヲ行フ可キハ勿論ナリト雖ドモ、父ニシテ既ニ死セン乎、母ハ自カラ未成年者ノ養育教育ヲ爲シ、身體上ノ監督者トナリ、併セテ其利害ヲ計畫シ法律上ノ監督者タル可キナリ。畢竟スルニ未成年者ノ身體利益ハ叔伯父ヲシテ保護セシメンヨリモ、母ヲシテ保護セシムルヲ勝レリトスルヤ毫モ疑フ可キニアラズ。既ニ日本ニ於テハ女權ノ擴張ヲ唱フルニ至リタルニアラズヤ。民法ハ少シク母及ビ妻タルモノノ地位ヲ高メタルノミ。蓋シ文化既ニ進ミタル邦國ニ於テハ斯ノ如クナラザル可カラザレバナリ。然ラバ則チ親權及ビ後見職ヲ母ニ與フルニ於テ何ノ不可ナルコトカ之レ有ランヤ。

又論者民法ノ子孫ニ養料ヲ給スルノ義務ヲ命ズルヲ見テ之ヲ非難セリ。就中子ヲ設ケタル妻ニシテ離婚後其夫後妻ヲ迎フルニ當リ、先妻ノ子其母ニ養料ヲ給セザル可カラザルヲ難ジテ謂ハク、是レ親子ノ間ニ確執ヲ生ジ一家ノ紛紜ヲ來スベシト。

然レドモ論者ハ離婚ニ因リテ家族タル法律上ノ關係絶ヘタル後、尚ホ養料ヲ給スルノ義務ヲ負フ者ハ唯自己固有ノ財産ヲ所持スルトキ、其財産ヲ以テ之ヲ給スルノ義務アルニ止マリ、一家ノ財産ヲ割キテ之ヲ給スベキモノニアラザルヲ知ラズ。夫レ然リ子ハ唯自己固有ノ財産ヲ有スルニ

當リ、養料ヲ給スルニ止マルガ故ニ、論者ノ恐ルヽガ如キ親子間ニ確執ヲ生ズベキノ理アラザルナリ。且離婚ハ夫婦タル法律上ノ關係ヲ絶ツベシト雖モ、母子間ノ愛情及ビ血統上ノ關係ハ之ヲ絶チ得ベキモノニアラズ。彼ノ相續權ノ如キハ母ノ離婚後母子間ニ喪失スベシト爲スヲ以テ可ナリトスト雖モ、養料ヲ給スルノ義務ノ如キハ人倫自然ノ大道ニ出ヅルノ法則ナルガ故ニ、民法ハ之ヲ認メザル可カラズ。若シ之ヲ認メザラン乎、却テ野蠻草莽ノ陋法タル譏ヲ免レザル可シ。

論者ハ又兄弟姉妹ノ間ニ養料ヲ給スルノ義務アルヲ難ジテ、此規定ハ養料ヲ受クル權利アル者ヲシテ怠惰ニ陷ラシムベシト謂ヘリ。然レドモ論者ノ言ハ毫モ其當ヲ得タルモノニアラズ。蓋シ法律ハ既ニ此危險ヲ豫防シタレバナリ。夫レ養料ハ疾病其他本人ノ責ニ歸スベカラザル事故ニ因リテ生活スル能ハザル場合ニアラザレバ之ヲ給スベキモノニアラズ（人事編第二十七條）而シテ怠惰ハ本人ノ責ニ歸スベカラザル不幸ノ原因ナリト謂フベカラズ。

論者又養料ノ給不給ニ付キ親子兄弟等屢々法廷ニ相爭フニ至リ、親族間ノ德義ハ漸ク廢頽シ、本邦從來ノ美風ハ全ク地ヲ掃フニ至ルベシト云ヘリ。論者ノ所謂德義トハ奈何ナルモノカ、若シ養料義務ニシテ故障ナク執行セラレン乎、訴權アルモ之ヲ利用スルノ必要アラザルヲ以テ、焉ンゾ德義ヲ害センヤ。又若シ養料義務ニシテ執行セラレザラン乎、最モ貴重ナル義務ニ背キテ愧ヅルコトナキノ不德ヨリハ法廷ニ出訴シテ之ヲ執行セシムルノ勝レルニ若カザルベシ。

論者又私生子ノ父母ノ婚姻ニ因リテ嫡出子ト成リ得可キヲ見テ非難ヲ加ヘタリ。然レドモ法律ハ婚姻ノ行ハレタル日ヨリ以前ニ溯リテ私生子ヲ嫡出子ト爲スコトヲ許サズ（人事編第百五條ヲ見ルベシ）故ニ結婚前夫既ニ他日一家ノ戸主タルベキ嫡出子ヲ設ケタルトキハ、年長ノ私生子ヲ以テ嫡出子トスルモ之ニ長子ノ特權ヲ與フル能ハズ。是ヲ以テ私生子ヲ嫡出子ト認ムルノ規定アルモ決シテ長次ノ順序ヲ紊ルガ如キ結果ヲ生ズルコト無シ。論者ハ民法編纂者ヲ誹リテコンスタン帝ノ法律ニ倣ヘリト謂フト雖ドモ、編纂者ハ敢テ之ヲ模倣シタルニアラズ。唯道理ニ照ラシ、正當ニ婚姻シタル父母ノ子ヲ家族ノ內ニ加フ可カラザル理由無キヲ知リシノミ。論者ハ全力ヲ盡クシテ民法ノ聲價ヲ減ゼントシテ國教信者ヲ眩惑セントシ、民法ハ基督教ノ主義ヲ執リテ編纂セラレタルモノナリト謂ヒ、又保守主義ヲ執ル者ヲ欺瞞セントシ、民法ハ古來ノ家制ヲ紊亂スルモノナリト謂ヒ、遂ニ論鋒ヲ憲法問題ニ轉ジ、大權及ビ議會立法權ノ護衛者ヲシテ民法ヲ厭惡セシメント圖リ、民法ノ或ル規定ヲ指示シ、大權及ビ議會立法權ト撞着スルモノナリトノ妄言ヲ吐キタリ。

論者ノ日本法典ハ共和主義ニ基キテ制定セラレタル佛國法典ニ倣フガ故ニ、君主國ニ之ヲ施行スベカラズト謂ヘルハ、卽チ大權ノ護衛者ヲシテ疑懼ヲ懷カシメントノ底意ニ出デタルヤ明カナリ。

余輩ハ左ニ其妄誕ヲ辯破セン。

論者ハ故ラニ附會ノ說ヲ唱道スルモノニアラザルベシト雖トモ、其說ハ歷史上ノ謬說ニシテ前キニ辯駁シタル宗教上ニ關スル謬說ト均シク之ヲ打破スルコトハ最モ容易ナリ。夫レ佛國法典ハ一千八百三年共和政治ノ時ニ於テ制定セラレタリト雖モ、當時既ニ拿破翁ハ終身一等岡士ニシテ其後幾クモナク帝位ニ卽キタリ。是ヲ以テ佛國法典ハ第一帝政ノ時ニ施行セラレタルコト二十年間（一千八百四年ヨリ一千八百十五年ニ至ル）後ブールボン家ノ再ビ佛國ニ君臨スルニ方リ、施行セラレタルコト十五年間（一千八百十五年ヨリ一千八百三十年ニ至ル）又ルウヰ、フイリツプ、ドルレヤンノ王朝ノ下ニ施行セラレタルコト十八年間（千八百三十年ヨリ一千八百四十八年ニ至ル）ナリ。然レドモ未ダ曾テ其綱領ヲ更メントシタルコトアラズ。爾後第二共和政府ノ興ルニ當リ施行セラレタルコト五年間（一千八百四十八年ヨリ一千八百五十二年ニ至ル）ナポレオン第三世ノ政ノ時ニ施行セラレタルコト十八年間（一千八百五十二年ヨリ一千八百七十年ニ至ル）ニシテ、現共和政府ハ既ニ二十年前ヨリ之ヲ施行シ、而シテ君主政治ニ於テ施行セラレタル體裁ヲ變ゼズ。佛國法典ハ其レ斯ノ如ク共和政治ノ時ニ於テ施行セラルヽコト二十七年、君主政ノ下ニ於テ施行セラルヽコト六十三年ノ長日月ニ亙ルモ猶ホ其體裁ヲ更メザルハ正ニ政體ノ如何ニ拘ハラズ之ヲ施行スルヲ得ルヲ證スルニ足ルベシ。

然レドモ佛國法典ハ斯ノ如ク長日月ノ間全ク同一ニシテ進歩セザルニアラズ。貴族院ニ於テ或ル議員ノ唱ヘタル所ノ若キハ誤謬ノ最モ甚シキモノニシテ（余輩ハ第二章ニ之ヲ論ゼントス）民法ノ數タビ修正アリタルコトハ吾人普ネク知ル所ナリ。然レドモ其修正タルヤ政體ノ君主タルト共和タルヲ問ハズ、其體裁ト毫モ關係ヲ有シタルコトナシ。蓋シ民法ハ私法ニシテ公法ト牽連スルモノニアラザレバナリ。

論者ハ又大權ノ保護者ヲシテ疑懼ヲ懷カシメントシテ非難シテ謂ハク、新法ハ佛國民法ノ如ク人定法ニ先天ノ自然法ヲ認ムルモノナリト、此非難ハ貴族院ニ於テ唱道シタル者アルガ故ニ余輩ハ第二章ニ於テ之ヲ駁擊スベシ。

論者ハ大權ノ保護者ヲシテ民法ヲ厭惡セシメントシタルノミナラズ、又帝國議會ノ議員ヲシテ民法ヲ信ゼザラシメントシテ、民法ハ議會ノ立法權ト抵觸スルモノナリト謂ヒ、民法ニ於テ國家ノ公有物ハ讓渡ス可カラザルモノト規定シタルヲ非難シテ、是レ議會ノ權限ヲ侵害スルモノナリト爲シ、加之公有物ハ一ノ勅令ヲ發シテ之ヲ拂下グルヲ得ベク、唯拂下ゲタル代金ニ至リテハ之ヲ國庫ノ總豫算ニ組入ルマデナリト云ヘリ。

論者ノ言ニハ法律上二個ノ誤謬アリ。蓋シ議會權限ハ右ノ規定ト牴觸スルコトナシ。蓋シ議會ハ其決議ヲ以テ勅裁ヲ經タル上法律ト爲シ、公有財產ヲ變ジテ私有財產ト爲シ、然ル後行政處分

ヲ以テ之ヲ拂下グルニ於テ何ノ妨ゲカ之レ有ンヤ、然リト雖ドモ財産ノ國用ニ供セラレタル間ハ其代價ヲ國庫ニ納ムルモ猶ホ勅令ノミヲ以テ之ヲ拂下ゲ得可キモノト謂フ可カラズ。蓋シ公有物ノ特殊ノ利益ハ其價額ノミニ存セズ、國家ノ需用ニ應ズベキ性質ニ在リ。是故ニ勅令ヲ以テ公有財産ヲ讓渡スルトキハ必ラズヤ他物ヲ以テ之ニ代置セザルベカラズ。然ルニ代物ノ價額一層巨多ナルカ、又ハ其功用一層少キコトナシトセズ。勅令ノミヲ以テスルトキハ公有財産ヲ變ジテ私有財産ト爲スコト能ハズ。其性質ヲ變ズルニハ必ズ法律ヲ以テセザル可カラズ。從來日本ニ於テ二物ノ區劃判然タラザリシ所以ノモノハ、一ニ　天皇陛下ノ立法行政ノ二大權ヲ掌握シ給フニ因ル。然レドモ今ヤ既ニ憲法發布セラレテ二大權ノ區劃整然タルニ至リタルヲ以テ、民法モ亦之ニ吻合セザル可カラズ。

又論者ノ民法ハ勅諚ノ法律タルニモ拘ハラズ、大權ヲ制限スルモノナリト謂フニ至テハ奇極レリト謂フ可シ。論者ハ裁判所構成法モ之ヲ改正スルニ法律ヲ以テスルヲ要スルガ故ニ、亦大權ヲ侵害スルモノト謂ハントスルカ（同法第四條第八條第九條ヲ見ヨ）嗚呼論者ハ自カラ大權ヲ蔑視スルモノナリ。然ルニ自カラ知ラズシテ大權ヲ保護スルノ說ヲ唱フ、豈ニ奇ナラズヤ。蓋シ二法典ハ憲法ト俱ニ　陛下ノ發案權及ビ特權ニ據リテ制定シ給ヒタル國典ニシテ、立法上最重ノ事業タリ。然ルニ論者ハ濫リニ之ヲ誣ユルノ言ヲ吐キ毫モ憚ル所ナシ。是レ豈ニ大權ヲ蔑視スルニアラズシテ何ゾヤ。

論者ハ重ネテ國家ノ公有物ト私有物トノ區別ヲ論難シタリト雖ドモ、其言フ所全ク論者一家ノ妄想ニ屬スル謬說ヲ基礎トシタルモノニシテ、重ネテ其民法ヲ解セザルヲ表證シタリ。卽チ論者ハ民法ガ國家ニ法人ト私人トノ二資格ヲ認メタリト解シタルガ如シ。

然レドモ國家ハ二資格ヲ具フルモノナリトノ說ハ何人モ未ダ曾テ唱ヘザリシ所ナリ。夫レ國家ハ一ニシテ公法人タルノミ。唯其財産ニ至テハ之ヲ二種ニ區別シ、一ハ公用ニ供スルモノニシテ、一ハ一私人ノ財産ト同ジク其資産ニ屬シ、其費用ニ充ツベキ收入ヲ生ズルモノトス。民法豈他ヲ言ハンヤ（財産編第二十一條乃至第二十三條ヲ參看スベシ）

論者ガ國家ハ公法人タルヲ以テ之ニ屬スル財産ハ總テ公有物タラザル可カラズト言フニ至テハ實ニ奇怪ナル謬言ナリ。思フニ論者ハ公有物ノ用方ヲ誤リタルモノナラン。

又論者ハ民法ノ公用徵收ヲ規定シタルハ豫算ノ原理ニ違フト云ヘリ。然レドモ其言極メテ迷謬ニ出ヅ。論者ノ誤謬ハ全ク公用徵收ト豫算法ニ由リ毎年臣民ノ負擔スベキ租稅徵收トヲ混ズルガ故ニ生ジ來ルモノナリ。

動産公用徵收ハ歐洲諸國ニ於テハ一般ニ行ハルヽモノニアラズ。唯戰時市府ノ重圍中ニ陷リタル時、其他荒凶等ノ若キ非常ノ時ニ於テ日用品ニ付キ之ヲ行フノミ。初メ日本法典ヲ編纂スルニ

當リテハ却テ一層動産徵收ノ區域ヲ擴張セントセリ。然レドモ國家ノ此權ヲ施行スルニ際リ、時ニ濫用ノ弊ナキ能ハズ、又博物館等ニ備フルガ爲メ珍奇ノ物品ヲ徵收スルガ若キハ假令所有者ニ相當ノ金額ヲ給スルモ猶ホ不可ナルニ、或ハ官廳ノ專横ニシテ之ヲ徵收スルノ懼無キニアラズ。是ヲ以テ新法典ハ此場合ニ於テ不動產ヲ徵收スルガ若キ行政處分ヲ以テ足レリトセズ、特ニ法律ヲ發布スルヲ要ストセリ。蓋シ十分所有者ヲ擔保スルガ爲メナリ。是故ニ若シ人アリ土地ヲ開鑿シテ一國ノ政治上若クハ美術上ノ沿革ニ關シ極メテ重要ナル物品ヲ發見シタルニ當リ之ヲ徵收セントセバ、則チ特別法ヲ制定シ其償金ヲ定メ然ル後之ヲ行フヲ要ス。

右ノ規定ハ立法上及ビ實際上或ハ其利害得失ヲ論ズルヲ得ン。然レドモ之ヲ論ゼントセバ先ヅ能ク法文ヲ理會セザルベカラズ。然ルニ論者ノ如ク第三十一條ハ臣民ノ每年負擔スベキ租稅ノ徵收ヲ規定スルモノナリト云フハ毫モ法文ノ意義ヲ理解セザルモノト謂ハザルベカラズ。要スルニ論者ハ公用徵收ト租稅徵收トヲ混ジタルモノナリ。夫レ公用徵收ハ强制ニ出ヅルモ尙ホ必ラズ人民償金ヲ受ケザル可カラズ。之ニ反シテ租稅ハ人民ヨリ拂ハザル可カラザルモノナリ。故ニ納稅者ニシテ其義務ヲ怠ルトキハ債務者ノ如ク財產差押ヲ被ムルベキノミ。安ンゾ特別法ヲ要センヤ。

余輩ハ論者ノ非難ノ多キニ驚カズンバアラズ。而シテ其非難ノ全ク兒戲ニ類スルモノナキニアラズ。然レドモ余輩ハ之ニ應ヘテ遺ス所ナカラントス。蓋シ論者ノ說ニシテ一トシテ認ム可キモノナキノミナラズ、若シ余輩其非難中辯破セザルモノアラバ、論者ハ之ヲ以テ暗默ノ承諾ト爲ス可ケレバナリ。要スルニ余輩ノ以下駁擊セントスル非難ノ妄誕ナルハ前ノ非難ト毫モ徑庭アルコトナシ。

今論者非難ノ順序ヲ逐フテ左ノ九點ヲ指摘辯駁セン。

（第一）論者曰ク、新法ハ個人主義ノ法典ニシテ社會的共同體ヲ認メズト。然レドモ民法及ビ商法ハ私法典ナルガ故ニ社會的共同體ノ自體ニ關スルモノニ非ズ。近世社會學ナル一派ノ學說生ジタルヨリ、日本ノ壯年者流ハ好デ之ヲ講ジ、言語思想共ニ漠然タルヲ喜ブト雖ドモ、新法ノ起案者ハ毫モ是等ノ理論ニ關スベキニ非ズ。但間々法典中社會的共同體ヲ代表スルモノトシテ國ノ事ヲ記スルコトアルモ、是レ偏ヘニ其權利ヲ留存センガ爲メニシテ敢テ之ヲ規定センガ爲メニ非ズ。

右ノ非難ノ結果トシテ、論者新法ノ主トシテ各人ノ契約ノ自由ヲ確認スルコトヲ非難シタリ。是レ論者ハ知ラズ識ラズ法典ノ長所ヲ擧グルモノト謂フベシ。蓋シ私法典ニシテ合意ノ自由ヲ確認スルモノハ卽チ一國ノ法典トシテ最モ望ムベキ所ノモノト云ハザルベカラズ。

尙ホ論者ノ言ニシテ余輩ノ會得シ難キ所ハ其新法典ハ合意ノ自由ヲ確認スルニ由リ强食弱肉ヲ奬勵スト云フニ在リ。合意ノ自由ヲ確認スルト云ヒナガラ强食弱肉ヲ奬勵スト云フニ至テハ全ク

自家撞着ノ言タルヲ免レズ。尙ホ論者ハ益々自家撞着ノ言ヲ重ネントシテ、合意ノ自由ハ政黨熱ヲ盛ニシ、社會黨ノ勃興ヲ促スモノナリト云ヘリ。斯ノ如ク法典ノ意義ヲ矯メントスルハ實ニ讀者ヲ眩惑セントスルモノニ非ザルカ。

（第二）論者ハ撞着ノ言ヲ重ネ、新法典ハ國家思想ナシト云ヒナガラ、民法ハ個人ノ權利ヲ保護シ、債務ヲ履行セシムルニ付テハ個人ヲシテ國家ノ權力ヲ使用シテ充分餘裕アラシメタリト云ヒ、以テ之ヲ非難シタリ。論者ハ債權者ヲシテ其債權ヲ行ヒ、又所有者ヲシテ其權利ヲ行フニ何等ノ强制手段ヲモ有セシメザルヲ欲スルモノナルカ。且法典ノ視ル所ニ依レバ人民彼我ノ間ニ差別ヲ設クルコトナク、普ネク其權利ヲ保護スルモノニシテ、且人民其權利ノ保護ヲ求ムルハ國ニ對スルニ非ズ、裁判所ニ對シ之ヲ求ムルモノニシテ、裁判所ノ眼ニハ强弱大小ナク、訴訟ヲ爲ス者盡ク之ヲ平等視ス。嗚呼論者ハ弱者ヲ煽動シ强者ニ對抗セシメントシ、自ラ社會黨ノ拳ヲ爲スモノニ非ザルカ。

（第三）意見書ハ更ラニ妄說ヲ吐テ曰ク「債權者債務者ニ與フルニ一片ノ告知書ヲ以テスル以上ハ、何人ニテモ其債權ヲ讓渡スルコトヲ得セシムルハ財產編第三百四十七條ニ認ムル所ナリ。故ニ甲乙親友間ノ貸借モ忽チニシテ高利貸ニ對スル債務ト同ジク他ニ最モ恐ルベキ債主ニ對スル義務ト變ズベシ」ト。蓋シ論者ハ債權ノ讓渡ヲ以テ一ニ債務者ノ意思ニ關セシメント欲スルモノナラン。然レドモ古來何レノ國ニ於ケルモ、又已ニ日本ニ於ケルモ、債權者其債權ヲ賣渡スコトヲ得タリシ、少壯ノ立法者タラントスル論者ハ今突然之ヲ變ゼント欲スルモノノ如シ。果シテ然ラバ論者ハ舊慣ヲ破ラント欲スルモノナリ。蓋シ債權モ亦動產所有權ノ如ク一ノ財產ナレバ、亦之ヲ讓渡スルコトヲ得ザル可カラズ。唯道理上公義上必要ナリトスル所ノ一ノ條件ハ、債務者ヲシテ之ヲ知ラシメ其重ネテ辨濟ヲ爲スノ憂ヲ免カレシムルニ在ルノミ。

縱令毫モ法律思想ナキ者タリトモ猶ホ斯ノ如キ孟浪無稽ノ言ヲ吐カバ既ニ怪訝ニ堪ヘザルベシ。況ンヤ法律家タルモノ斯ノ如キ迷信ヲ吐クハ愍ムニ餘リアリ。

（第四）民法ハ要約者正當ニシテ且金錢ニ見積ルヲ得ベキ利益アルニアラザレバ要約ノ有効ヲ認メズ（財產編第三百二十三條）論者ハ此規定ヲ非難シテ是レ人民ノ名譽等ノ無形ノ利益ヲ保護セザルモノナリト云ヘリ。論者ノ此謬言ヲ吐クハ卽チ契約ト犯罪トヲ混淆シタルガ故ナリ。民法ハ名譽ニ對スル犯罪ノ事ヲ直接ニ規定セズ。是レ刑法ノ範圍ニ屬スルモノニシテ、刑法ハ誹謗ヲ罰スルニ禁錮及ビ罰金ヲ以テセリ。且夫レ民法ノ理論ハ極メテ妥當ノモノニシテ、誹謗ヲ受ケタル當事者之ガ爲メニ損害賠償ヲ求メントセバ（他人ヲ誹謗スル文章ノ取消及ビ判決ノ公示ノ外ニ）必ズ間接ナリトモ金錢上ノ損害アリタルコトヲ證明セザル可カラズ。是ニ由テ之ヲ觀レバ右ノ非難モ亦民法ト裁判所ノ職務トニ關スル初學ノ原則ヲ誤解遺忘シタルニ因ルモノナリ。

（第五）意見書ハ重ネテ新法典ハ個人ノミヲ保護シ、民人共同體ヲ顧ミザルモノナリト稱シ、技藝學術ノ組合ヲ以テ會社ト看做サヾルヲ非難セリ。蓋シ技藝組合モ亦一ノ組合ナリト雖ドモ、民事會社商事會社ノ規定ヲ之ニ適用セントスルハ極メテ失當ナリ。若シ論者ニシテ會社ノ眞正ノ法律上ノ性質ヲ知了セバ、斯ノ如キ妄言ヲ唱ヘザルベシ。抑々會社ノ主タル目的ハ金錢ニ見積ルベキ利益ヲ得、之ヲ社員間ニ分配スルニ在リ。然レドモ茲ニ彼等ニ對シ法律ノ講義ヲ爲スハ徒費ナルヲ以テ敢テ之ヲ爲サズ。

（第六）論者ハ會社ニ關スル新法ノ規定ハ富豪家ヲシテ薄貧者ヲ壓シ商業ノ專權ヲ蹂躙セシムルニ外ナラズト非難セリ。

然ラバ則チ論者ハ商工業ノ退歩シ、往時ノ日本ニ於ケルガ如ク商工業共ニ一地方ノ小事業タルヲ望ムモノナルカ。封建ノ時各州交通ヲ相遮斷シタル時ニ當テハ、商工業ノ規模ヲ狹隘ニスルモ猶ホ足レリトシタリシモ、之ヲ以テ新社會ノ需用ニ應ズルニ足レリト謂フ可カラズ。其證據ハ既ニ法典實施前ニ在テ夙ニ銀行其他商工業會社其他ノ株式會社起リ、人ヲ集合スルニ非ズ資本ヲ集合シテ業ヲ營ミタルヲ見ルモ亦明カナリ。新法ハ尙ホ其會社ノ一層發達スルコトヲ奬勵シ、此事ニ關スル法律ノ缺點ニ因リ生ジタル諸般ノ弊害ヲ豫防シ充分ノ注意ヲ施スモノナリ。

若シ夫レ小資本家ノ利益ヲ計リ、大資本家ノ事業ヲ害スルハ腕力又ハ馬力ヲ以テ物ヲ運搬スルコトヲ奬勵スルガ爲メ、器械其他ノ鐵道ノ使用ヲ打破セントスルト毫モ異ナルコトナシ。論者ハ宜ク經濟初學ノ原理ヲ講習スベシ。

又論者ハ新法典ノ農業組合ヲ保護セザルコトヲ難ズルモ、是レ亦妄言ノミ。農業組合ハ民法ノ發布ニ拘ハラズ更ラニ成立スルモノ、依然繼續スルヲ得ベク、殊ニ新民法ノ會社ノ規則ヲ適用スベキモノハ主トシテ農業ノ組合等ナリ。何トナレバ商業及ビ工業ノ會社ニ至テハ商法ヲ以テ支配スベキモノナレバナリ。

又論者ノ羅馬法ハ古羅馬ノ小市府ニ於ケル法律ナリト云フニ至テハ誤謬モ亦太甚シ。實ニ論者ハ羅馬ノ盛時諸國ヲ服從スルニ至リ、而シテ其之ヲ服從スルヤ先ヅ武威ヲ以テシ、後ニ至リ法律ヲ以テ之ヲ制御シタルコトヲ知ラザルモノト謂フベシ。而シテ羅馬ノ武威ハ其正道ナラザリシガ故ニ永ク繼續セザリシモ、其法律ニ至テハ人民相互ノ關係上公義道理ノ命ズル所ニ外ナラザリシヲ以テ、永ク其跡ヲ殘スニ至リタリ。

（第七）論者ハ地役ニ關シ水ノ飲用ニ係ル二三ノ新制、就中自己ノ土地外ニ天然若クハ人造ノ水源ヲ有スル者、隣地ヲ經過シテ水ヲ引クノ權ヲ（場合ニ依リ地上又ハ地下ヨリ）有スルヲ非難シ、又自己ノ地上ニ水ノ漲溢スルトキ、隣地ヲ通過シテ之ヲ排斥スル權アルコトヲ駁擊シタリ（財産編第二百三十三條以下ヲ參觀スベシ）

論者ハ妄誕無稽ヲ顧ミザルヨリ、右二個ノ法律上ノ地役ヲ非難スルガ爲メ、日本農業ノ性質上水ノ必要ナルコトヲ論據トセリ。然レドモ是レ實ニ撞着ノ言ニシテ、右ノ地役ハ水田ノ水ニ乏キ處ニ之ヲ導キ、其過分ナルトキ之ヲ疏通スルヲ得セシムルモノニシテ、却テ米作國タル日本ニ適當スルモノナリ。伊太利ノ如キ或ル部分ニ於テハ水田ヲ耕スヲ以テ其農業ト爲ス國ノ法律モ、亦日本ニ於ケルガ如ク同一ノ地役ヲ認メタリ。佛蘭西ノ如キ水田アラザル國ニ於テハ同一ノ理由アラザルモ猶ホ然リ。然ラバ則チ日本ノ農業家ハ論者ヨリ一層事理ニ通曉スベキヲ以テ却テ右ノ地役ヲ喜ブナラン。

（第八）意見書中ニハ終始撞着ノ言ノミヲ列スルニ因リ、盡ク之ヲ枚擧スルハ際涯ナカルベキガ故ニ之ヲ省略スト雖モ、尙ホ二個ノ點ニ付キ一般ノ理論ニ關シ撞着ヲ免カレザル所アルガ故ニ之ヲ摘示セン。

意見書ニハ始メ民法ノ從來ノ慣習ニ反スルノ甚シク　天皇ノ大權及ビ議會ノ權利ヲ障害スルヲ非難シナガラ更ラニ難ジテ曰ク、近世ノ社會ニ適用スベキ法理ヲ度外視シ云々、特別ヲ以テ將來ニ之ヲ定メンコトヲ約定シ、又ハ之ヲ習慣ニ一任スベキ者トセリ云々ト云ヘリ。是ニ由テ之ヲ觀レバ民法ハ決シテ論者ノ臆測スル如ク將來ニ向ヒ立法權ヲ制限セントスルモノニ非ズ（民法ヲ以テ立法權ヲ制限セントスルガ如キハ到底得テ能ハザル所ナリ）又民法ハ賃貸借地役習業契約ノ如キ全國一定ノ法律ヲ以テ規定ス可カラズ、地方ノ習慣ニ從フベキモノハ之ヲ存スルモノタルコト明瞭ニシテ、論者モ亦自ラ認ムル所ナリト謂フベシ。

若シ民法ヲシテ特別法タラシメバ、敢テ特別法律又ハ規則ヲ引用スルコト非ザルベキモ、民法ハ普通法ニシテ諸般ノ相異ナル事項ヲ包含シ、而シテ其各事項間々細則ヲ要スルモノアルガ故ニ、其細則ヲ定ムルハ民法中ニ於テセズ、特別法ヲ以テスベク、徒ラニ民法ヲシテ浩瀚ニ失セシムルコトナキヲ要ス。加之民法ニ於テ引用スル所ノ他ノ法律ハ概ネ民法起案ノ時共ニ起草中ニシテ、今日ニ至テハ既ニ實施スル所ノ訴訟法ナリ。

訴訟法ハ千八百九十年三月二十七日ニ之ヲ發布シ、同年十一月一日ヨリ之ヲ實施シタリ。故ニ議會ニ於テモ之ニ對シ非難ヲ爲スコトナシ。若シ民法及ビ商法モ亦共ニ之ヲ實施シタリシナラバ、議會モ敢テ之ニ容喙スルコトアラザリシナラン。今若シ民法及商法ノ實施ヲ延期セバ（其實施延期ハ全部ノ破壞ニ外ナラザルベシ。何トナレバ新法ノ修正ヲ爲サントスルハ反對論者間ニモ亦論議ノ合スルコト非ザルベケレバナリ）民事訴訟法ハ恰モ攻緻ナル紡績機械ノ材料ナキモノノ如クニ至ルベシ。

地方ノ習慣ヲ以テ法典ト爲サントスルニ至テハ毫モ必要ナキ所ナリ。何トナレバ地方裁判所及ビ地方ノ人民ハ充分其習慣ヲ知了スルモノニシテ、且時ニ從ヒ多少ノ變動ヲ免カレザルガ故ニ、

之ヲ以テ一定不易ノ法律ト爲スコト能ハザルベシ。

（第九）論者ハ又民法ハ租稅ノ主義ト背馳スト云ヘリ。

然レドモ民法ハ秋毫モ租稅ノ事ヲ規定スルモノニ非ズ。但財產編第四十條第八十八條第百十四條及ビ第百六十六條ヲ以テ租稅ハ或ル割合ニ從ヒ、虛有者用益者使用者竝ニ地上權者等ノ負擔タルベシト爲スト雖ドモ、何レノ場合ニ於ケルモ只利害關係人中結局租稅ヲ負擔スベキ者何人ナルヤヲ定ムルニ過ギズシテ、毫モ其租稅ノ定率若クハ徵收方法ヲ規定スルモノニ非ズ。今一例ヲ擧ゲテ之ヲ論ゼンニ、現時日本ニ於テハ地租ヲシテ地價ニ割合ハシム、而シテ一個ノ土地ニ用益權ヲ附スルモ亦之ガ爲メニ其地租ヲ增減スルコトナシ。只善良ノ管理者タル者ハ租稅ヲ拂フニ土地收入ヲ以テスルモノニシテ、而シテ其收入ヲ所得スル者ハ用益者ナルガ故ニ、結局每年ノ租稅ハ用益者ノ負擔タルベキモノトスルノミ。故ニ用益者ニシテ虛有者ニ代ハリ租稅ノ支辨ヲ爲シタルトキハ、虛有者ニ對シ求償權ヲ行フコト能ハズ。又用益者之ヲ拂ハズ虛有者官廳ヨリ之ヲ拂フノ要求ヲ受ケタルトキハ用益者ハ之ニ其租稅ヲ償還スベキノミ。

然リ而シテ參政權ハ現時直稅ヲ納ムルモノニ限リ之ヲ許與スルニ因リ、用益者之ヲ得ベキカ、論者ハ斯ノ如キ問題ニ論及セザレトモ一言之ヲ說カン。

余輩ハ用益者結局租稅ヲ負擔スルモ、尙ホ選擧人及ビ被選擧人タルノ資格ハ依然虛有者ニ存スベキモノト信ズ。蓋シ憲法ヲ以テ直稅ヲ納ムル人ニノミ參政權ヲ附與シタルハ、租稅ハ所有權ノ輕重ヲ代表スルモノニシテ、而シテ所有權ノ多キ者ハ少ナキ者ニ比シ一層國家ノ安寧秩序ヲ希望スルモノナリト看做シタルガ故ナリ。然ルニ用益者ノ如キハ僅カニ一時ノ權利ヲ有スルニ過ギズ、其權利ハ自己ノ姓名ト共ニ消滅スルモノナルガ故ニ或ハ貧者タルヲ免カレズ。

是ヲ以テ民法ハ決シテ租稅ノ原理及ビ選擧參政ノ原則ニ背馳スルモノニ非ズ。

又論者ハ民法ヲ難ジテ曰ク「民法ノ實施ハ稅法ヲ改正シ租稅ヲ分テ通常租稅及ビ臨時又ハ非常ノ租稅ニ區分スルノ必要ヲ生ズ」ト。然レドモ非常稅ナルモノハ其名稱ニ指示スルガ如ク全ク非常ニシテ民法中用益權ノ事ニ付キ法文ノ之ニ及ビタルハ只萬一ヲ計リタルノミ。決シテ租稅法ヲ改正スルモノニアラズ（財產編第七十九條）蓋シ非常稅ナルモノハ戰亂若クハ國家ノ災害アル場合ニ非ザレバ徵收スベキモノニ非ズ。然ルニ偶々斯ノ如キ場合アツテ特別法ヲ發スルニ至ルトキハ、虛有者ト用益者トノ關係ヲ定メザル可カラザルモ、特別法ノ如キハ決シテ是等ノ事ヲ規定スルコトアラザルベシ。若シ新法ニシテ是等ノ場合ヲ慮カラザリシナラバ却テ非難ヲ被ルベシ。

又新法ハ學理ニ偏シ法律學ノ講義錄ニ似タリトノ非難アルモ、此點ニ付テハ後ニ至リ貴族院議員ノ陳ベタル所ヲ反駁スルト共ニ之ヲ辯破スベシ。

又意見書ハ新法ノ羅馬法及ビ佛蘭西法ニ模倣セントシテ却テ其解釋ヲ誤リタリト云フト雖ドモ、

論者ハ羅馬法及ビ佛蘭西法ヲ解スルコト民法ノ編纂委員ニ及ハザルコト遠キモノナリ。貴族院ニ於テモ亦多少之ニ類スル非難ヲ唱ヘタルコトアリシモ、是其權力ヲ濫用スルノ致ス所ニシテ其無識ニ出デタルニハ非ザルベシ。

其二　特ニ商法ニ對スル非難ヲ反駁ス

論者ハ商法ニ對シ非難ヲ容ルヽコト民法ニ對スルヨリ較々少ナシト雖ドモ、其趣意ニ至テハ均シク據ナキモノナリ。

（第一）論者ハ商業帳簿調製ニ關スル規定ヲ非難シ、是レ着實ノ小商人ヲ困却セシメテ投機的商人ヲ利セシムルモノニ非ズヤト謂ヘリ。

商業帳簿ノ調製ハ如何ナル理由ニ依リ特ニ投機的商人ヲ利セシムルカ、投機的商人モ亦同一ノ義務ニ服從スルニ非ズヤ。

蓋シ帳簿ノ調製ハ（第一）商人自身ヲシテ其債權者ト債務者ニ對スル自己ノ位置ヲ一目瞭然ニシ、其資力外ニ義務ヲ負ハザルニ注意セシムルノ利アリ。（第二）其債權者及ビ債務者ト自己トノ間ニ訴訟起ルカ又ハ自己ノ破產スルニ當リ其債權者及ビ債務者ニ利アルモノナリ。論者ハ帳簿ノ記入ハ極メテ嚴正詳密ニシテ萬一ニモ誤テ秩序ナク記載シタルトキハ過怠破產ノ刑ヲ被ラザルヲ得ズト云フト雖ドモ、是レ法律ヲ誤解スルモノニシテ、帳簿ノ記入如何ニ秩序ナキモ此一事ニ因リ刑ヲ被ルコトナシ。其刑ヲ被ルニ至ルハ破產シタルトキノミニ限ル。然ラバ則チ何ゾ帳簿ノ調製ヲ要スルモ特ニ恐ルベキコトアランヤ。

又論者ハ帳簿調製ノ義務ヲ設ケタルヲ非難スルニ次デ從來ノ商人ト雖ドモ大抵皆帳簿ヲ作リ大抵ノ事項ヲ記入セリト云ヘリ。是レ自家撞着ノ言ニシテ、從來既ニ帳簿アラバ法典ヲ以テ之ヲ一般ノ義務トスルニ毫モ法典ニ非難ヲ容ルベキノ理ナシ。

論者ハ商業帳簿ノ記入ヲ爲スニハ少ナクトモ簿記學校ノ卒業生ヲ雇ハザル可カラズ、財產目錄貸借對照表ヲ造ルニハ其上別ニ一通リ法律ニ通ジタル法學校ノ卒業生徒ヲ抱ヘザル可カラズト云ヘリ。其法學校ノ卒業生ヲ要スト云フニ至テハ誣妄モ亦甚シト云フベシ。何トナレバ如何ナル法學校ニ於ケルモ商業帳簿ノ調製ヲ講習スルモノアラザレバナリ。又簿記學校ノ卒業生ヲ雇フベシト云フニ至テモ營業ノ錯雜セル大銀行ニ必要ナルコトアルニ止マリ、通常ノ商家ニ至テハ商人自ラ其帳簿ニ記入ヲ爲スコト恰モ今日ノ狀態ニ於ケルト同一ナルベキノミ。若シ偶々商人ニシテ帳簿ニ記入ヲ爲シ、其計算ヲ爲スニ迂ナル者アラバ毎月末練達セル者ニ問フテ帳簿ヲ整頓スベキノミ。

論者ハ更ニ唱ヘテ曰ハク、若シ商法ヲ實施セバ投機的商人ヲ助長シテ着實的商人ヲ破壞スベ

シ、大商ヲ利シテ小商ヲ害スベシ。小商ハ刑セラレテ大商ハ免カル。着實商人ハ罰セラレテ投機的商人ハ免カレント。是レ日本ノ法官ヲ毀ルノ言ニ非ズシテ何ゾヤ。外國人ノ尙ホ治外法權ヲ保タントシ、日本裁判官ノ獨立ヲ疑フニ當リ、小班ノ法學者ニシテ斯ノ如キ妄言ヲ吐クハ愛國ノ心ニ乏シキモノト謂フベシ。

（第二）論者ハ破産法モ亦富豪者ヲシテ細民ノ職ヲ奪ハシムルノ一大利器ニ過ギズト云ヘリ。夫レ斯ノ如ク細民ヲ煽動シテ富豪者ニ對シ不滿ノ意ヲ抱カシメントスルハ徒ラニ誇大ノ言ヲ吐クニ過ギズ。且其所爲甚ダ惡ムベキモノアリ。斯ノ如キ言ハ只民心ヲ煽動シ、國安ヲ傷害スルニ至ルモノニシテ、却テ論者ノ民法ニ誹ル所ノ社會的主義ニ屬スルヲ免カレズ。抑々破産法ヲ以テ破産者ノ財産ヲ隱匿シテ債權者ニ害ヲ加フルヲ豫防スルノ處分ヲ設ケタルハ大商ト小商トヲ問ハズ、均シク其利ヲ受クル所ニシテ彼我ノ間ニ區別アルコトナシ。實ニ權利ノ平等ハ卽チ公義ナリト謂ハザル可カラズ。

又小數額ノ身體限處分ハ債權者ヲシテ徒ラニ費用ヲ負擔セシムルニ過ギズ。故ニ破産法ニハ必ズ或ル程度ノ標準點ヲ設ケ負債ト財産ノ高トニ依リ執行手續ニ寬嚴ノ差ヲ設ケザル可カラズト云ヘリ。

然レドモ負債ト財産トノ割合ニ應ジテ區別ヲ設ケ執行手續ヲ異ニスルハ必ズヤ立法者ノ專斷タルヲ免カレザル可キヲ以テ、商法ハ債權者ヲシテ自ラ其利益ヲ保護スルノ任ニ當ラシメタリ。故ニ債權者ハ相協議シテ債務者篤實ナルモ一時困窮スルニ止マルトキハ之ニ期限ヲ與ヘ又ハ一分ノ免除ヲ爲スコトヲ得ベシ（商法第千六十一條及第千六十三條ヲ參觀スベシ）

（第三）論者ハ航海商業ノ規定ヲ非難シ、其民法ヲ論ズルトキト同ジク經濟ノ理ニ暗キヲ示シタリ。論者ハ日本人民ノ所有スル船舶ヲ以テ日本船舶タルノ資格アルモノトスルヲ不充分ナリトシ、將來航海ノ會社起ルニ當リテハ、外國人其所有權ノ半以上ヲ得ルニ至リ、沿海貿易權ハ外人ノ占有ニ歸スルニ至ルベシト云ヘリ。

若シ夫レ外國人ヲシテ日本ノ法律及ビ裁判所ニ服從セシムルモ、尙ホ日本ノ商業ニ外國資本ノ流入ヲ恐ルルニ於テハ、啻ニ航海業ノミニ限ラズ、其他萬般ノ商工業ニ外國人ノ參與スルコトヲ禁ゼザルヲ要ス。是レ道理上法律上共ニ何人モ主張スルコト能ハザル所ナリ。加之外國資本日本ノ商工業ニ流入スルコトアルモ、是レ日本固有ノ資本不足スルカ、又ハ日本資本家ノ出資ヲ欲セザルトキニ限ルベキガ故ニ、毫モ憂フベキコトナク、却テ日本ハ何等ノ事業モ發達セザルニ比スレバ利益ヲ得ルヤ明カナリ。現ニ今日ニアルモ既ニ外國資本ヲ以テ運轉スル事業アルガ爲メ日本ノ利益タルコト少ナカラズ。

船積證書ヲ有スベキ船舶ヲ十五噸以下ニスルノ當否ニ至テハ既ニ商法取調委員ニ於テ充分ノ

調査ヲ遂ゲタル所ニシテ、論者ヨリ一層緻密ノ取調ヲ爲シテ決シタル所ナリ。論者ノ如キハ若シ商法ニ十噸ヲ以テ制限トセバ之ヲ五噸ニ減ゼントスルニ至ルモノナラン。又船舶ノ登記ハ毫モ其必要ナク、外國ノ類例ヲ按スルニ一モ斯ノ如キ二重ノ手數ヲ要スルモノナシト云ヘリ。

論者ノ新法ヲ非難スルノ方法ハ實ニ奇怪ニシテ、或ハ其外國法典ニ倣ヒタルヲ非難シ、或ハ之ニ倣ハザルヲ非難ス。是レ論者ハ一ニ法典ヲ攻擊スルヲ以テ其快ヲ貪ラントスルニ因ルナラン。然レドモ船積證書ノ登記ハ論者ノ言ト異ナリ、行政秩序ノ整齊セル邦國ニ於テハ皆其類例アリ。加之此處分タル、人身及ビ財産ノ安寧ヲ保ツニ必要ナルモノニシテ、其利益アルヤ毫モ爭ヲ容レザル所ナリ。

（第四）商法第九百四十三條以下海難救助ニ關スル規定漠然タリト云フニ至テハ毫モ其理由トスル所ナク、却テ同條以下ノ規定ハ頗ル詳密ナリ。故ニ此非難ハ只例ノ妄言ニ過ギザルナリ。加之論者ガ此規定ヲ非難シ、從來我國ニ行ハレタル良習慣ヲ破壞スルト云フニ至テハ論者ノ言却テ漠然トシテ捕捉スベカラザルモノアリ。此場合ニ於テハ習慣ノ如何ヲ問フベキニ非ズ。只第九百四十三條ニハ海難物ノ分配ヲ規定スルニ過ギザルモノナリ。

殊ニ此規定ハ船舶ノ危險ヲ增加スルノ弊アリト云フニ至テハ亦一ノ妄想ニシテ毫モ其理由ヲ示サズ。

此規定タル歐洲ニ於テハ古來普ネク行ハレタル所ニシテ、何人モ未ダ曾テ危險ヲ增加シタルモノナリト唱ヘタル者アラズ。若果シテ實際船舶ノ危險ヲ增加スベキモノナラバ、海上保險會社ニ於テ苦情ヲ唱ヘザルノ理ナシ。然ルニ保險會社ハ未ダ嘗テ此規定ヲ非難シタルコトアラズ。

若シ以上ノ如キ理由ニ依リ商法ノ實施ヲ延期セントセバ、是レ亦民法ニ於ケルト同ジク架空ノ理由ニ依リ其延期ヲ求ムルニ外ナラズ。

第二章　貴族院ニ於ケル法典

貴族院ニ於テ法典施行延期案ノ討議ニ附セラレタルハ實ニ五月二十六日ニシテ、同案ハ百十六名ノ議員ノ名ヲ以テ提出セラレタルモノナリ。而シテ討議ハ開期ノ短キニモ係ハラズ三日ノ長キニ亙レリ。以テ此問題ニ重キヲ置タルヲ知ル可シ。而シテ委員會ヲ設ケントノ動議ハ第二日ニ至リテ始メテ提出セラレタルヲ以テ、時機既ニ遲レタルモノト傚シ之ヲ設ケズ、第三日ニ至リ終ニ逐次三讀會ヲ經テ議決セリ。夫レ此ノ如ク委員會ヲ設ケズシテ議決ヲ急ニシタルハ少シク法律精神ニ反スルノ嫌ヒナキニアラズ。然レドモ結局議決ニハ何等ノ差異モ生ゼザリシヤ明カナリ。

蓋シ提出案ハ討議ニ先チ既ニ百十七名ノ氏名ヲ列ネテ議場ニ顯レ、第一讀會ニ於テ六十一ニ對スル百二十三、卽チ議決ニ與カリタル者ノ三分二ノ贊成ヲ得タレバナリ。

貴族院議員ノ唱ヘタル非難ハ意見書ニ比スレバ更ニ體裁ノ宜ヲ得、且相互ニ矛盾スルコト少ク殊ニ一人ニシテ自家撞着ノ言ヲ吐ク者鮮カリシト雖ドモ、其根本ニ付テ之ヲ察スレバ其說ノ據ル所無キハ稍ヤ意見書ト相似タルモノナリ。

三大臣其他法典維持說ヲ述ベタル者ハ反對說ヲ唱ヘタル者ヨリ其數多キノミナラズ、其見ル所高遠ニシテ其說論理ニ適シタリト雖ドモ、議案ノ提出セラレタル日既ニ勝敗ノ數決シタリシヤ明カナリキ。

（壹）議案提出者ハ前元老院議官ニシテ法典取調委員タリシモノナリ。而ルニ議院ニ於テ其說ヲ述ブルニ方リテ法典ノ編纂ハ之ヲ急劇ノ間ニ終ラントシ、每日若干條ヲ議定シタリト云ヘリ。

余輩ハ今茲ニ前元老院議官タリシ者ニシテ前職ニ關スル事實ヲ引證シテ政府ヲ攻擊スルノ材料ト爲スノ當否ヲ論ズルヲ要セズ。唯一言セザル可カラザルモノアリ。論者ノ說ハ議員ヲシテ僅々數月ニシテ法典ヲ編纂シ了リタリト誤想セシメタルコト是レナリ（數月ニシテ法典ノ編纂ヲ了ラントスルガ若キハ到底不能ナルノミナラズ輕忽ノ誹ヲ負カレザルベシ）然レドモ民法ハ十有餘年以來絕ヘズ之ヲ研究シ、遂ニ其編纂ヲ了ルニ至リタルモノナリ。而シテ之ヲ調査スルニ方リ或ハ一タビ元老院委員會ヲ督促シタルノ觀ナキ能ハザル時アリシト雖ドモ、此時ニ於ケル調査ハ最終ノ調査ニシテ屢々之ヲ行ヒタル後ニ在リシナリ。加之凡ソ大事業ノ價値ヲ論ズルニ當リテハ法律編纂タルト其他學術技藝建築等ニ關スルトヲ問ハズ、一ニ歲月ノ長短ヲ標準トス可カラズ。唯其本來ノ價値奈何ヲ量ルベキノミ。是ヲ以テ法典ニシテ若シ編纂者其人ヲ得ザリシナラン乎、二十年ノ歲月ヲ要スルモ爭デカ今日ノ如キ法典ヲ見ルヲ得可ケンヤ。

（貳）民法ニ對スル非難ノ重ナルモノハ貴族院ニ於テモ亦人事ニ關スル日本從來ノ慣習ヲ更ラタメタリト云フニ在リシ。然レドモ日本ノ慣習ハ已ニ各地方ニ於テ互ニ之ヲ異ニスルニアラズヤ。然ラバ則チ民法ノ是等地方慣習ト悉ク吻合シ能ハザルモ何ンゾ驚クニ足ランヤ。人事ニ關シテモ全國通ジテ全ク其慣習ヲ相同フスルニアラズ、斯ノ如ク各州互ニ其慣習ヲ異ニスルハ數百年間封建制度ノ下ニ在リテ互ニ交通スルコト無カリシ時代ニ於テハ避ク可カラザル結果ナリシト雖ドモ、今ヤ日本ハ帝國ニシテ各府縣ハ唯帝國ノ行政畫劃ニ過ギズ。又裁判ハ到ル所　天皇ノ任命シ玉ヘル判事　天皇ノ名ヲ以テ之ヲ宣告ス。是ヲ以テ帝國ヲ支配スル法律ハ帝國ニ通ズル一貫ノ法律ナラザル可カラズ。古來各地方ニ行ハレタル慣例及ビ法律

ヲ參酌シテ統一ノ法典ヲ作リタルノ例歐洲各國ニ少シトセズ。佛國ハ一千七百八十九年ノ革命後全國普及ノ法律ヲ制定シ、伊太利ハ一千八百六十年同盟後ニ於テ、又日耳曼ハ千八百七十年聯合ヲ組織シタル後ニ於テ、皆ナ統一普及ノ法律ヲ發布シ以テ全國ノ慣例及ビ法律ヲ均一ニセリ。

民法ノ父子夫婦間ニ訴權ヲ與フルヲ非難スル者アリ。云ハク、民法ハ一家ノ和合及ビ幸福ヲ害シ從テ一國ノ德義心ヲ湮滅セシムルモノナリト。

子ノ親ヲ艱ヒ、夫ノ婦ヲ艱フ可キ義務アルハ何人モ非難セザル所ノモノナリ。然レドモ若シ此義務ヲ盡サヾル者アルモ法律ニ制裁ナキトキハ父子夫婦ノ法典ニ反目シテ相爭ヨリモ却テ一家ノ和合及ビ幸福ヲ害シ、一國ノ德義心ヲ湮滅セシムルヤ必然ナリ。蓋シ權利アルモ法律ニ於テ之ヲ認メザルノ故ヲ以テ法律ノ保護ヲ受クルコト能ハザル者ハ、惡意ノ故ヲ以テ敗訴スル者ヨリモ其地位更ラニ憐ム可ク、又之ガ爲メ一國ノ風俗ヲ害スルコト更ラニ大ナルモノアレバナリ。且制裁ヲ受クルノ恐レナキトキハ義務アルモ其義務ヲ履行スルモノ少キヲ保スベカラズ。辨濟セザルモノ益々少キニ至ルベシ。民事上ノ義務皆然ラザルハナシ。豈獨リ家族內ニ於ケル義務ノミ然ラザルヲ得ンヤ。

（參）論者又云ハク、民法ハ佛國法典ニ倣ヒ、商法ハ獨逸法典ニ倣フヲ以テ我二法典ノ間相牴觸スル點少シトセズト。

論者ハ唯ダ二法典牴觸スト言ヒ、而シテ其牴觸スル所以ノ理ヲ言ハズ。之ヲ指示スルノ難キニ因ル歟。

然レドモ余輩ハ云ハントス。論者ノ所謂牴觸ハ要スルニ二法典ノ間ニ在ル可キモノニアラズ、蓋シ二法典ハ其目的ヲ異ニスレバナリ。思フニ民法ハ普通私法ニシテ、商法ハ商取引及ビ商人ニ適用ス可キ特別法ナリ。是ヲ以テ二法典ノ規定ニ相異ナル所アルハ畢竟之ヲ適用ス可キ範圍ノ同ジカラザルニ由ル。例ヘバ商事賣買ノ成立及ビ之ヲ證明スルノ方法ニハ民事賣買ニ比シ更ニ簡易迅速ナル條件ヲ以テ足レリトス。是等ハ二法典ノ其性質ヲ同フセザルヨリ生ズル自然ノ結果ニシテ、之ヲ觀テ以テ二法ノ牴觸ト謂フ可カラズ。商業手形ノ讓渡ハ裏書ノミヲ以テスルヲ得、民事債權ノ讓渡ハ債務者ニ通知シ、若クハ其承諾ヲ要スルガ如キモ亦同一ノ理ニ基クモノナリ。苟モ法律ヲ知ル者ハ此相異ヲ以テ立法ノ牴觸ト謂ハザル可シ。

然リ而シテ二法典ハ各別ニ之ヲ起草シタルヲ以テ、起案ノ當時多少牴觸スル所有リシト雖ドモ、個ハ後チ悉ク之ヲ訂正セリ。蓋シ二法典ヲ起草スルニ方リ或ル行爲ヲ以テ民事上ノモノト爲スベキ乎、商事上ノモノト爲ス可キ乎、未ダ判然タラザルコトアリ。又各草案ハ某々ノ行爲ヲ以テ其範圍內ニ含蓄スルモノトシテ之ヲ規定シタルコトアリ、是レ其間ニ牴觸スル所

アルヲ免カレザリシ所以ナリ。然レドモ後之ヲ訂正スルニ當リ商法ト牴觸スルモノハ悉ク之ヲ民法ヨリ削除セリ。

（肆）貴族院ニ於テ或ル有名ナル學者ハ意見書ト同一ノ非難ヲ民法ニ加ヘ、且間接ニ商法ヲ難ゼリ。而シテ其新法ノ基礎ヲ攻擊スル點ニ至リテハ稍々反駁スベキノ價値アリ。其說ニ曰ク新法ハ人定法ニ先チ自然法ノ存在スルヲ認メタリ。夫レ自然法ハ我ガ憲法トハ併立スベキモノニアラズ。蓋シ我憲法ニ依レバ人民ノ權利ハ悉ク　天皇ノ附與シ玉ヒタルモノナレバナリト。

論者ノ說ハ日本ニ於テ公法上ノ議論トシテ之ヲ見レバ間然ス可キモノナキヤ必セリ。蓋シ憲法發布以前ニ在リテハ臣民ハ大政ニ參與スル能ハズ、其今日アルニ至リシ所以ノモノハ全ク　天皇ノ恩賜ニ因ルモノナレバナリ。執レカ人民ニ憲法以前ノ參政權アリト言フ者アランヤ。然レドモ民法及ビ商法ハ原ト公然ト牽連スルモノニ非ズ。且日本ニシテ若シ私法ノ準繩トス可キモノ從來特ニ發布シタル法令ヲ措テ他ニ之レ無シトスレバ、其位置誠ニ痛嘆ス可キモノナリト謂ハザルベカラズ。蓋シ新法發布以前ニ在リテ民事及ビ商事ニ關スル法令ノ發布アリタリト雖モ、其數多カラズ。殊ニ特別法ノミニ限リタリ。斯ノ如ク法律不完全ナルモ（法典未ダ施行セラレザルヲ以テ現時尙ホ法律ノ不完全タルヲ免レズ）人民ノ訴訟ハ尙ホ之ヲ斷ゼザル可カラズ。而シテ之ヲ斷ゼントスルモ慣習ノ不足ナルノミナラズ、往々古來日本ニ於テ未ダ曾テ見ザル所ノ訴訟事件ノ生ジ來ルガ故ニ、裁判所ハ自然法卽チ道理ニ據リ正當ト認ムル準繩ヲ基礎トシテ訴訟ヲ斷定セザル可カラズ。幸ニシテ能ク自然法ヲ明確ニ指示セル佛國法典ノ在ルアリテ、有司ハ明治ノ初年旣ニ之ヲ翻譯セシメ以テ纔カニ日本法令ノ缺ヲ補ヒタリ。

天皇陛下ノ曩キニ憲法ヲ制定シ給ハントスルノ日ニ在テハ其綱領ヲ示シ給ヒタリ。是レ公權ハ臣民ニ之ヲ與フ可カラザルモノアレバナリ。然レドモ　天皇陛下ノ曩キニ民法及ビ商法編纂委員、元老院議官及ビ其他ノ有司ニ法典ノ編纂ヲ命ジ給フニ當リテハ、私權ノ標準ト看做ス可キ要領ヲ垂示シ給ハズ、唯道理公義公益ヲ根據トシ、私權ニ關スル人民ノ爭訟ヲ斷定スルノ準繩ヲ索リ、以テ之ヲ明文ニ表ハス可キヲ命ジ給ヘルノミ。唯編纂委員ノ上奏シテ勅裁ヲ仰ギタル二法典ハ、自然法ノ最良ノ明文ナルヤ、將タ更ラニ完全ノモノヲ制定シ得ベキ否ヤハ或ハ學理上之ヲ論ズルヲ得ン。然レドモ二法典ノ基礎トスル所ノモノニ至リテハ自然法ヲ措テ又他ニ之レ有ル可カラズ、自然法ヲ除ケバ則チ專斷ノ外アラザル可シ。法典ハ大權ヲ認メズト云フハ何ヲ以テ是レヲ謂フカ、夫レ法典ヲ公布シタルモノハ　君主ニアラズヤ。然ラバ則チ論者ノ所謂大權ヲ認メザル者ハ却テ論者ナリ。

又新法典ハ論者ノ云フ如ク議會ノ民法公布以後ニ得タル立法權ヲ認メザルニアラズ、蓋シ議會ニシテ若シ經驗ニ徵シテ必要ト認ムルトキハ、何時ニテモ之ヲ改正シ得ルヲ以テ、議會ノ立法權ヲ認メザラントスルモ得可カラザレバナリ。然リ而シテ余輩ニシテ若シ他日議會ハ勅裁ヲ經テ二法典ヲ改良スルコトアラバ、余輩ハ言ハントス。議會ハ自然法ヲ表示スルコト舊法ヨリモ更ラニ明確ニ至リタルモノナリト。蓋シ議會ハ法律ヲ改良スルニハ必ズ道理公義公益ヲ標準トセザルベカラズ、決シテ專横ニ之ヲ制定ス可カラザレバナリ。要スルニ新法ハ將來改良スルトスルモ今ヨリ直チニ之ヲ適用スルヲ得ベシ。唯法律家ハ更ラニ之ヲ完備センガ爲メニ非難ヲ容ルヽヲ得可シト雖ドモ、法律家ノ精神ヲ照シテ法典ノ缺點ヲ知ラシムルモノハ常ニ自然法ナリト知ル可シ。

右ノ說タルヤ簡明ニシテ之ヲ理會スルコト甚ダ容易ナラン。然レドモ天下ノ人悉ク之ヲ知ル能ザルノミナラズ、數百言ヲ費シテ法律家ニ之ヲ敷衍セザルヲ得ザルニ至リタルハ慨嘆ノ至リナリ。

然レドモ玆ニ一言セザル可カラザルモノアリ。民法ハ自然法ヲ確定シテ之ヲ明文ニ表ハシタリト雖モ、亦未ダ自然法ノ解釋者タルニ止マラザルコト是レナリ。蓋シ自然法ニシテ一タビ體裁ヲ變ジテ法典ト爲ルトキハ、亦是レ人定法タレバナリ。是ヲ以テ民法ノ條項ハ千ヲ以テ數フ可シト雖ドモ、自然法ニ從ヒ判決ヲ爲ス可キコトヲ言フハ纔カニ二個條ニ過ギズ。一ハ財產取得編第二十二條ニシテ、過多ノ法條ヲ設ケ複雜ヲ來サンコトヲ避ケ、條理ヲ以テ之ヲ補フベシトシタルモノニシテ、一ノ法律ヲ說明スルニ際シ、法文ニ徵シ精神ニ照ラシ條理ニ依リ缺點ヲ補フ可キヲ判事ニ示シタルモノナリ。（證據編第九條）

日本民法ハ所謂自然義務ノ爲メニ別ニ一章ヲ設ケタリ。（自然義務ノ爲メニ一章ヲ設ケタルハ日本法典ヲ以テ嚆矢トス）或ル貴族院議員ハ大ニ之ヲ非難シタリ。此非難ハ上ノ非難ト性質ヲ同フスルモノニアラズト雖モ、余輩ハ玆ニ之ニ應ゼントス。蓋シ非難者ハ有名ノ法律家ナガラ、其說大ニ謬リ余輩ノ驚愕ニ堪ヘザルモノアレバナリ。新法ニ規定シタル自然義務ニハ民事上ノ或ル效力ヲ與ヘタリ。是ヲ以テ此義務ハ純然タル法定義務トナリタルモノニシテ、唯任意履行ヲ爲スヲ得ルニ止マリ、其履行ノ爲メ直接訴權及ビ損害賠償ノ訴權アラザルノミ。是レ別ニ此義務ニ一章ヲ供セザル可カラザリシ所以ナリ。

余輩ハ今玆ニ自然義務ノ法定ノ效力ヲ詳論スルノ要ナシ。唯一言民法ニ定メタル所ヲ約言セン、時効債務者ノ利益ニ於ケル確定判決及ビ其他ノ場合ニシテ、民法上債務者義務ヲ免カレタルノ推定アルトキト雖モ、尙ホ自然義務存在スルコトアリ。是ヲ以テ此場合ニ於テ債務者其債務ヲ履行スルコトアラバ、任意ノ履行ニシテ彼ノ返還義務ヲ生ズ可キ不當辨濟アリタ

リト謂フ可カラズ。又之ヲ贈與ト做ス可カラズ。歐洲各國ニ於テハ此點ニ關シ屢々疑問ノ生ジタルコトアリ、若シ明文ニ徵セバ日本ニ於テモ亦他日必ラズ然ルニ至ル可シ。是ヲ以テ法典ハ遠ク之ヲ慮リ特ニ法條ヲ設ケタルノミ。

(伍) 法典維持者ハ皆言ヘリ、法典ヲ施行シテ若シ不完全ナル個條アラバ特別法ヲ以テ之ヲ補フヤ甚ダ易シト、然ルニ反對論者ハ此說ヲ見テ云ク、是レ國民ヲ以テ法律ヲ經驗スル器械トスモノナリ。

維持者ノ腦中豈斯ノ如キ觀念アランヤ。思フニ維持者ハ若シ法典ノ不完全ナル條項目前ニ表ハルヽアラバ、自ラ進ンデ直チニ之ヲ改正シ、之ガ爲メニ施行ヲ延期スルガ若キハ毫モ厭フ所ニアラザルヲ示シタルモノナラン。然レドモ延期論者ノ唱フル所ハ一モ明了ニ缺點ヲ摘示セズシテ架空ノ妄言タルヲ免カレズ。又其漠然タラザルモノハ謬說タルカ又ハ家制及ビ社會ノ秩序ニ關シ疑懼ヲ生ゼシムベキノ誣言タルノミ。若シ非難者ノ論法ヲ可ナリトセバ、法典維持者モ亦法典ノ長所ヲ擧グルガ爲メ、同樣ノ空言ヲ吐クヲ得可シ。況ンヤ維持者ノ述ブル所ハ空言ニアラズ、法典ヲ施行シ公平ニ之ヲ經驗シタル後修正スベキヲ言フノミ。故ニ維持者ノ言ノ如クセバ能ク法典ノ適否ヲ知ルヲ得杜撰ニ陷ルコトナカルベシ。

立法者ニシテ若シ自ラ其制定スル法律ノ結果ヲ察スル能ハズシテ、而シテ直チニ之ヲ施行スルアラバ、卽チ是レ法律ヲ試驗スルモノニシテ容ス可カラザル所ナリト雖モ、孰レカ敢テ斯ノ如キ無望ノ意志ヲ懷クモノアランヤ。今醫師アリ自ラ良藥ト信ズルモノヲ患者ニ投ズルトキハ、假令不幸ニシテ其希望ニ反シ之ヲ醫スル能ハザル時ト雖モ、誰カ患者ヲ犧牲ニ供シテ自ラ經驗ヲ爲スモノト言ハンヤ。顧フニ法典維持者ハ必ズヤ自ラ法典ノ日本國ニ宏大ナル利益ヲ與フ可キヲ信ジ、唯其適否ヲ知リ且ツ必要ノ生ズルアラバ、將來之ヲ改良スルコトアルベシト云フノミ。然ラバ則チ貴族院ニ於テ或ル論者ノ非難シタルガ如ク法典ハ國民ヲ以テ試驗ノ具ト爲スモノト謂フベカラズ。

(陸) 又法典ニ對スル一ノ非難アリ、意見書ノ既ニ記載シタル所ニシテ或ル論者ハ貴族院ニ於テ再ビ之ヲ述ベタリ。其說稍ヤ明瞭ヲ缺クト雖モ、亦大ニ民心ヲ煽動スルニ足ルモノアリ。日本新法ハ外國法典ノ影響ヲ受クルモノナリトノ說卽チ是レナリ。論者ハ說ヲ爲シテ曰ク、是レ我大日本國ノ名譽ヲ毀損スルモノナリト。思フニ日本ハ往古淸國ヨリ哲學宗敎及ビ文學ヲ輸入シ、今日ハ泰西ヨリ理學交通運搬ノ方法、要塞ノ器具及ビ海陸軍ニ關スル學術等ヲ輸入シ、而シテ未ダ之ヲ以テ自ラ其位ヲ失墜セリト爲サザルニアラズヤ。又例ヲ法律ニ取リテ之ヲ言ハンニ、日本ハ刑法ヲ制定スルニ際シ歐洲ニ摸倣シタルニアラズヤ。而シテ其刑法ハ往古支那ニ倣ヒテ制定シタル法律ニ比スレバ寬嚴宜ヲ得、刑罰ト犯罪ト能ク應當セリ。日本

ハ敢テ之ガ爲メ國體ヲ恥カシメタリト謂フベケンヤ。又憲法ヲ制定セントスルニ當リテモ、歐洲各國特ニ獨逸ノ制ニ倣ヒタルニアラズヤ。然ルニ獨リ民法商法ニ限リ歐洲各國ニ倣ヘルノ故ヲ以テ之ヲ非難スルハ余輩之ヲ解スル能ハズ。蓋シ道理ハ一國民ノ特權ニアラズ。人類共有ノ無盡藏ナル泉源ナリ。各國民ハ敢テ恥ヂズ、敢テ憚カラズ、汲ンデ以テ其需要ニ充ツルヲ得可シ。今ヤ佛蘭西白耳義伊太利等ノ諸國鋭意「各國ノ比較法律」ヲ講ズ。是レ之ヲ奇トスルガ故ニアラズシテ、其國ノ法律ヲ改良セントスレバナリ。日本ハ其粹ヲ拔テ法典ヲ編纂ス。安ンゾ其國威ヲ失墜スルコトアランヤ。要スルニ日本新法典ハ歐洲法律家ノ注意ヲ惹キ、彼等ハ之ヲ觀テ以テ各國ノ法律ヲ改良スル模範ト爲スヲ得可シト言ヘリ。噫日本法典ハ嚮キニ各國ノ法律ヲ模範トシ、今ヤ乃チ反テ各國ノ模範タラントス亦快ナラズヤ。

（漆）又貴族院ニ有名ノ論者アリ、泰西ニ倣フテ以テ國威ヲ失墜スルモノト爲サズ、然レドモ其論者ハ蓋シ獨逸法ヲ慕フモノ乎。日本民法ノ佛國法典ニ倣ヘルヲ大ニ非難シテ云ハク、抑佛國法典ハ一千八百四年ニ制定セラレタルモノニシテ、爾來改良ヲ加ヘズ、九十年以前ヨリ依然トシテ未ダ曾テ其形狀ヲ更メズ、然ルニ日本法典ノ之ニ倣ヘルハ迂モ亦甚シト謂フ可シト。然レドモ論者ハ佛國法典ヲ補充改竄スルコト數次、以テ今日ノ必要ニ應ズルヲ知ラズヤ、法律家ニシテ此ノ如キ誤謬アルハ怪マザルヲ得ズ。余輩ノ計算スル所ニ由レバ、其制定ヨリ今日ニ至ルマデ、佛國法典ヲ改良シタル法典三十ヲ下ラズ。若シ細カニ之ヲ計算セバ必ラズヤ四十有餘令アル可シ。而シテ多クハ法典ノ正條ヲ單ニ修正シタルモノナリ。婚姻契約ノ公示及ビ離婚ノ制ヲ設ケタルトキノ如キ是レナリ。是ヲ以テ佛國法典ハ當初ノ體裁ヲ改メズ、其正條亦順序ヲ變ゼズ、然レドモ浩瀚ニ亙ルノ故ヲ以テ法典ニ加ヘザルモノアリテ存ス。例ヘバ不動產讓渡ノ登記法水利灌漑法及ビ佛國人タルノ分限取得法ノ如キ是レナリ。

佛國法典ハ斯ノ如ク屢々之ヲ改良シタリ。然ラバ則チ日本法典ノ之ニ倣ヘル何ノ不可ナルコトカ之レ有ラン。又論者ノ所謂法典編纂ハ一國ノ立法上法學上ノ發達ニ一大障害ヲ與フルモノナリトノ理果シテ何クニカアル。若シ論者ノ說ヲシテ眞ナラシメバ、佛國ハ法學上最モ沈滯シタル國民ト謂フ可シ。然レドモ余輩ハ未ダ曾テ斯ノ如キ說ヲ爲ス者アルヲ聞カズ。又若シ論者ノ說ヲシテ眞ナラシメバ、日本ハ既ニ諸外國ヨリ一層長足ノ進步ヲ爲スベキ筈ナリ。何トナレバ現今ニ至ル迄日本ニハ未ダ法律ノ編纂シタルモノ卽チ民事上ノ慣例トシテ見ル可キモノアラザレバナリ。然ルニ日本ハ未ダ法學上最モ進步ノ域ニ達シタル邦國トハ謂フベカラズ。却テ彼ノ明治ノ初年ニ當リ佛國法典ヲ研究スルニ至ル迄ハ所謂法律學ナルモノヲ殆ンド知ラザルヤ明カナリ。

（捌）論者ハ又論法ヲ轉ジテ云ヘリ。新法ハ三百代言流ヲシテ利益ヲ僥倖セシムルヲ得ベシト、

其說奇ト謂フ可シ。

夫レ人定法ノ目的ハ私權ノ基礎ヲ確定スルニ在リ。所有權ヲ移轉シ及ビ義務ヲ創造スル方法ヲ示スニ在リ。所有權ノ移轉及ビ義務ノ創造ヨリ生ズベキ相互ノ權利義務ノ效果ヲ明ラカニスルニ在リ。義務ニ附從ス可キ擔保ヲ示スニアリ。法廷ニ於テ權利ノ發生及ビ消滅ヲ示スベキ擧證ノ方法ヲ指定スルニアリ。約言スレバ從來ノ確定セザルモノヲ明カニシ、且訴訟ノ紛起ヲ豫防シ、併セテ之カ裁斷ヲ容易ニスルニ在リ。法律ノ目的タルヤ夫レ此ノ如シ。然バ則チ之ヲ制定發布スルモ安ンゾ論者ノ言フガ如ク訟師ノ不逞ヲ助長シ、健訟ノ弊ヲ釀スノ理アランヤ。論者ノ說ハ恰モ當事者ノ證書ヲ作ルニ當リ、細カニ相互ノ權利義務ヲ記載スルハ却テ主要ノ點ノミヲ定ムルヨリモ一層紛亂ヲ惹起スル危險アリト言フト幾ント相似タリ。若シ論者ノ論理ヲ以テスレバ、公證人ノ手ヲ經テ完成スル近來ノ契約制度ハ、法律ヲ知ラザル當事者ガ肆ニ締結スル從來ノ契約制度ヨリモ當事者間ニ爭論ノ端ヲ開クコト多シト謂ハザル可カラズ。更ニ之ヲ言ヘバ燈火アルモ光明燦爛トシテ人目ヲ奪フガ如クナラズンバ反テ四隣ヲ暗黑ナラシムト云フモノト何ンゾ擇バン。天下豈夫レ斯ノ如キ理アランヤ。

縱令新法典ハ非斷行論者ノ稱スルガ如ク不完全ナリトスルモ、加之其不完全ナルコト更ニ甚シキモノアリトスルモ、猶ホ人定法及ビ私權ニ關シ確然一定ノ慣例ナキニ勝サルヤ必然ナリ。

論者ハ又其說ヲ鞏固ニセントシテ、民法ハ無用ノ條項多ク徒ラニ原則ノ適用ヲ示シ、定義ヲ下シ區別ヲ爲シ、法律學ノ講義錄ノ如シト云ヘリ。

論者ノ理由トスル所ハ其趣旨トスル所ト全ク撞着スルモノナリ。假リニ論者ノ非難根據アリトシ、徒空ノ律文アリトスルモ、眞理ヲ揭ゲ適用ヲ示スハ何故ニ訴訟ノ原因ト爲ル可キ乎。裁判官ノ爲メニスル法律ノ講義ハ何故ニ不良ノ訟師ヲ利ス可キ乎。假リニ法典ヲシテ全然一個ノ講義錄ナリト爲セバ、判事或ハ之ヲ繙クノ要ナカラン。然レドモ判事タラントスル者ハ之ニ由リ以テ其思想ヲ養フヲ得可ク、法典ノ順序ヲ逐ヒ正條ノミヲ講ズルモ猶ホ能ク法律ノ何タルヲ知ルヲ得可シ。又一個人ガ契約ヲ締結シ又ハ訴訟ヲ起サントスルニ方リ、法典ニ依リテ自ラ其權利義務ヲ明ラカニスルヲ得ベシ。然ラバ則チ一個ノ講義錄ニ等シキモノトシテ法典ヲ非難シ、其施行ヲ延期スルノ要何クニカ在ル。

(玖) 論者ハ法學ニ通ズルノ故ヲ以テ其名ヲ知ラル。故ニ論者ノ一言一句ハ悉ク世ノ耳目ヲ聳動ス。是ヲ以テ余輩ハ尙ホ一ノ闡明セザル可カラザルモノアリ。蓋シ爰ニ所謂論者ノ非難ハ民法ノ要點ニ繫ルヲ以テ、若シ其說ヲシテ眞ナラシメバ等閑ニ附ス可カラザルモノアリ。然レドモ其非難スル所ヲ察スレバ則チ論者ハ能ク法典ヲ究メズシテ慢ニ之ヲ攻擊スルモノナルヲ證スルニ足ルモノアリ。

法典ニハ先取特權卽チ債權ノ物上擔保ニ關スル規定アリ。例ヘバ雇人ハ主人ノ財産ト一ケ年分ノ給料ニ對スル先取特權ヲ有シ（債權擔保編第百四十一條）代價ヲ受取ル能ハザル賣主ハ渡物上ニ先取特權ヲ有スルガ如キ是ナリ。（同第百六十六條）

論者ハ此二個ノ先取特權ヲ非難シテ云ク、此特權ハ其以前ニ得タル牴當權ト牴觸ス可シト、若シ夫レ二者牴觸セバ是レ當然理ニ反スルモノト謂フ可キモ、民法ハ雇人ノ事ニ關シ明ラカニ反對ノ規定ヲ揭グルニアラズヤ（同第百四十四條第四號）而シテ賣主ニ關シテ同一ノ規定ナキ所以ノモノハ、既ニ普通原則ノミニ依リ事理明了ナレバナリ。實ニ賣主ハ如何ナル理由ニ基キ自己ニ對スル牴當債權者又ハ自己ノ占有スル不動産上從前ノ所有者ガ設定シタル牴當ヲ取得シタル者ニ優先スルヲ得ベキカ、其之ニ優先スベカラザルヤ明カナレバ、論者ノ稱スル如キ彼我牴觸アラザルナリ。蓋シ賣主ノ爲メニ優先セラル、所ノモノハ、買主未ダ代價ヲ拂ハザルニ當リ、之ヨリ牴當ヲ得タル者ノミ。而シテ賣主ノ之ヲ優先スルハ條理ノ然カラシムル所ナリ。抑々不動産ノ賣主ニ先取特權アリ、且其特權ノ公示ヲ要スルノ制ハ民法編纂者ノ杜撰ニアラズ、而シテ歐洲學者未ダ曾テ之ヲ以テ不條理ナリト稱シタルモノアラザルナリ。

（拾）　論者ハ其說ヲ終ラントスルニ臨デ曰ク、今法典ヲ實施スルトキハ後ニ之ヲ修正スルモ其要結果ハ五十年百年ノ後ニ及ブベシ。何トナレバ其以前ニ既得權生ズベケレバナリト。

夫レ將來民法ヲ改正スル法律ノ既往ニ遡リテ效力ヲ有セザルハ、恰モ新法典ヲ施行スルニ當リ其效力ヲ既往ニ及ボスベカラザルガ如シ。是レ何人モ能ク知ル所ナリ。然レドモ各國ノ例ニ徵スルニ、一箇ノ法律ヨリ他ノ法律ニ移ル經過ヨリ生ズル所ノ前後二法ノ交涉問題ハ、數十年ノ後ニ至ルマデ生ズルモノニアラズ。蓋シ契約ノ期トスル歲月ハ概ネ際限アレバナリ。賃貸借ニ關シテモ亦當事者ヲ三十年（永貸借ニ付テハ五十年）以上束縛スル能ハザルニアラズヤ。然ラバ則チ論者ノ言フガ如ク、何ゾ法律ノ改正ハ其餘響ヲ百年ノ後ニ遺スコトアランヤ。他日賃貸借ニ關シ民法ヲ改正スルコトアルモ、改正ニ先チテ結約シタル賃貸借ヲ害スルノ多カラザルベキコト、恰モ現今ノ民法ヲ施行スルニ際リ、既ニ結約シタル賃貸借ヲ害スルコト多カラザルト一般ナリ。

是ニ由テ之ヲ觀レバ論者ノ說ハ法律ヲ知ラザル者ヲシテ疑懼ヲ懷カシムルニ過ギザルヲ知ル可シ。

（拾壹）　又貴族院ニ一論者アリ、法律學ニ通ズルヲ以テ其名ヲ知ラル。法律ヲ非難スルコト前論者ヨリモ更ラニ細密ニシテ、稍ヤ人心ヲ喚起セリ。然レドモ人心ヲ喚起シタルハ其說ノ價値アルガ故ニアラズ、唯其難問ノ多キニ因ル、今悉ク之ニ答ヘントスレバ徒ラニ煩雜ヲ來スニ過ギズ。故ニ余ハ唯其主要ノ點ノミニ付キ其妄ヲ辯ゼン。

（第一）用益者ト虚有者トノ間ニハ如何ナル親族ノ關係アルモ。之ヲ以テ用益者ニ保證人ヲ立テ、又ハ保證ヲ與フルノ義務ヲ免ズルノ理由ト爲ス可カラズ。例ヘバ用益者ハ寡婦ニシテ虚有者其子タルトキニ於テモ亦然リトス。蓋シ用益者ノ母タリトスルモ寡婦ナレバ則チ再ビ婚姻スルコトアリテ或ハ管理宜シカラザルコトモアルベク、或ハ後夫ニ煽動セラレテ其子ニ不利ナル行爲ヲ爲スコトモアル可ケレバナリ。然レドモ法典ハ用益者ニ必ズシモ擔保ニ關スル此二個ノ義務ヲ負擔セシム可キモノト規定セズ（子親ニ對スレハ德義上此義務ヲ負擔セシムルヲ憚ルコトアラン）法典ハ唯右ノ義務ヲ掲ゲテ通則トシタルノミ。是故ニ虚有者若シ其母ニ義務ヲ負擔セシムルヲ以テ不可ト爲ストキハ之ヲ免ンズルヲ得可ク、又條件ヲ設クルヲ以テ可ト爲ストキハ之ヲ要求スルヲ得可シ。

（第二）賃貸權ヲ物權トシ、分菓小作ヲ賃貸人ノ承諾ナク讓渡スルヲ禁ズルモ毫モ撞着スルコトナシ。抑々分菓小作ノ讓渡ヲ禁ジタルハ卽チ特例ニシテ、分菓小作ハ自餘ノ賃貸借ト同ジク物權ナルモ、而モ之ヲ約スルニハ賃借人其人ヲ主眼トシ、其能力篤實ナルヲ恃ムニ因ルモノニシテ一種ノ會社契約タルニ因ル。

（第三）相續ノ制及ビ婚姻契約ハ家制ト密接ノ關係アルヲ以テ第一ニ之ヲ掲載セザル可カラザルハ何人モ能ク知ル所ナリ。豈ニ論者ノ說ヲ待ンヤ。然レドモ相續及ビ婚姻契約ハ亦財産取得ノ一方法タルヲ以テ、之ヲ財産取得篇ニ掲グルモ何ノ不可ナルコトカ之レ有ラン。是レ之ヲ贈與遺言ノ如キ取得篇ニ掲ゲザル可カラザルモノト併列シ、取得ノ方法トシテ掲載シタル所以ナリ。

然レドモ若シ議會ニシテ取得篇十三第十四第十五ノ三章ヲ以テ人事篇ニ置カントセバ、政府ニ勸告シテ體裁ヲ改メ以テ更ラニ民法ヲ布告セシム可シ。又安ンゾ順序ノ故ヲ以テ民法施行ヲ延期スルノ要アランヤ。

又若シ順序ニ關シ法典ノ體裁ヲ改メントスレバ、宜ク五編ニ通ジテ正條ヲ計算スルノ方法（第一條ヨリ第千七百六十二條ニ至ル可シ）ヲ取ルベシ。意フニ現今ノ方法ハ每篇條目ヲ新ニスルヲ以テ複雜ノ嫌無キニアラズ。

（第四）民法ニ先妻ヲ虐待スルノ故ヲ以テ後妻ヲ離別スルヲ許サヾルハ、夫其權威ヲ以テ妻ノ虐待ヲ制止シ、子ヲ擁護シ得可ケレバナリ。

（第五）大叔伯父ト其姪トノ婚姻ハ民法編纂者モ亦之ヲ認メザルヤ明カナリ。而シテ其間ニ婚姻スルヲ禁ズル德義上ノ理由ハ叔姪ノ間ニ婚姻ヲ禁ズルト其理全ク同一ナリ。蓋シ叔伯父ハ父ノ地位ニ在レバ則チ大叔伯父ハ祖父ノ地位ニアラザルモノナレバナリ。后後日此ノ如キ事件ノ生ズルアラバ裁判所ハ必ラズヤ余ノ說明スル如ク法律ヲ解釋スルニ躊躇セザルナル可

シ。羅馬法ニ法律ノ解釋ニ關スル原則アリ「新ニ法律ニ明文ヲ加フルトキハ毎ニ解釋ト判例トニ依リテ同一ノ目的ヲ有スル規定ヲ補充スベシ」ト。思フニ判事ノ此原則ヲ適用ス可キハ其レ此場合ナルベキ歟。

（第六）論者ハ民法ニ裁判所ノ未成年者ノ利益ニ干渉スル規定アルヲ見テ之ヲ非難セリ。其說奇ト謂フ可シ。現今ニ至ルマデハ未成年者ニシテ其父ヲ喪ヘバ乃チ其財產ヲ安全ニ保護スル者少ナク、徒ラニ後見人ノ貪慾ヲ充タスノ資タルニ過ギザリキ。噫未ダ嘗テ世路難易ヲ知ラザル孤提ノ利益安ゾ其レ等閑ニ附シ去ル可ケンヤ。

是ヲ以テ新法ハ未成年者ニ後見人ノ不動產上ニ法律上一般ノ抵當權ヲ與ヘタリ。亦論者ハ之ヲモ廢セントスル乎。

（第七）民法ハ華族ノ爵名及ビ爵名世襲ニ關スル特別法ニ反スルモノニアラズ。此特別法ハ卽チ民法ノ例外ノミ。

（第八）維新以來士風衰ヘ一國ノ德義地ヲ掃ヘリトハ是レ維新ノ業ヲ蔑如スルモノニアラザルカ。又昔日德義ヲ守リタル者武士ノミナリト云フ、亦平民ヲ譏ルモノニアラザルカ。他ノ論者既ニ云ヘリ、民法ノ國民ノ階級ヲ均一ニスルハ危害アリト、論者ハ吾人ヲ彼ノ刑ハ士ニ輕クシテ農工商ニ重キ時代ヲ恢復セントスル乎。果シテ然ラバ則チ亦刑法ノミ改正セザル可カラザルニ至ラン。

余輩ハ今茲ニ論者ノ說ハ斯ノ如ク復古ノ傾向アルモノナルヲ明カニシテ止マントス。今ヤ日本國民ハ民事上四民對等ナラザル可カラズトハ既ニ一箇ノ定說ト爲リ、又動カス可カラザルヲ以テ、論者ノ說ハ國中到ル處協贊ヲ得可カラザレバナリ。

（第九）論者又云フ、新法典施行セラルレバ訴訟ノ紛起スルヤ疑ナシト。夫レ法律アレバ縱ヒ不完全ナルモ猶ホ訴訟ノ起ルコト法律ノ設ケナキトキニ比シ必ズ減少セザルベカラズ。是レ既ニ余輩ノ論明セシ所ナリ。余輩ハ尙ホ言ハントス。何レノ世何レノ邦ニ於テ最モ訴訟ノ多カリシヤヲ知ラント欲セバ、先ヅ各邦國及ビ各時代ニ於テ取リ扱ヒタル訴訟特ニ契約ニ關スル裁判所事件ノ數ヲ比較ス可シ。之ヲ比較シテ而シテ其原因ヲ究ムレバ必ラズヤ自ラ覺ル所アルベシ。之ヲ日本ニ徵スルニ、今日ハ從來ニ比スレバ訴訟事件ノ增加シタルコト夥シキモノアリ。是レ新法典ノ發布セラレタルニ因ル乎、余輩其然ラザルヲ知ル。蓋シ民事上及ビ商業上ノ契約增加スレバ、卽チ必ラズヤ訴訟ノ起ルコト更ラニ多キヲ免レザルハ是レ一般ノ通則ナリ。當今日本ニ於テ訴訟ノ起ルコト多キハ卽チ諸種ノ契約增加シ、從テ世上ノ關係錯雜ニ赴キタルニ因ル。殊ニ日本ニ於テ維新前法ヲ斷ゼシ者ハ多クハ所謂武士ナルモノニシテ法官ニアラズ。然レドモ今ヤ組織整齊セル裁判所アリ、從來曲直ヲ斷ゼシムルニ手段乏シカリ

シ者モ、今ヤ憑リテ以テ之ヲ斷ゼシムルヲ得ベシ。是レ亦方今訴訟ノ增加シタル原因ノ一ナル可キ乎。

夫レ社會ニシテ發達スレバ其機關モ亦從テ更ラニ運轉セザル可カラズ。故ニ方今ノ有司ハ從來ノ有司ヨリモ裁決セザル可カラザル事物更ラニ多シ。是レ法律ノ增加シタルガ故ニアラズ。社會ノ活動漸ク盛ニシテ從テ利益ト利益トノ衝突スルコト漸ク多キニ因ラズンバアラズ。

余輩ハ反對論者ヲ指名スルコトヲ避ケタリト雖モ、維持者ニ對シテハ然ルヲ要セズ。是ヲ以テ余輩ハ今トシテ維持說ヲ唱ヘタル者ヲ指シ、肯テ聊カ其說ヲ妄評セン。法典維持說ヲ唱ヘタル者大木伯ヲ以テ其巨擘トス。伯ハ當時文部ニ大臣タリシト雖モ、嚮キニハ司法大臣トシテ法典編纂ヲ監督シ、爾來元老院樞密院ニ議長トシテ法典ノ分布ニ與カリテ大ニ力アリ。次ヲ司法大臣田中子、外務大臣榎本子トス。又三好司法次官、箕作君、鳥尾子、渡、大河內、清浦諸君、黑田侯等ハ熱心ニ法典斷行說ヲ主張セリ。

維持者ハ國家ノ利害及ビ必要上ヨリ斷行說ヲ主張シ、敢テ細目ニ涉ラズト雖モ、大木伯ハ獨リ民事ニ關シ人定法ニ先チ自然法ノ存在ヲ認ムベキ所以ヲ論ゼラレタリ。尙ホ法典斷行スベキノ一大理由アリ。事頗ル重要ナルモノ貴族院ニ於テ異議ヲ受ケタルガ故ニ玆ニ默過スベカラザルニ因リ之ヲ一言セン。

外務大臣ハ若シ二法典ノ實施延期セラレ、徒ラニ法學講究ノ材料タルニ至テハ、余輩ノ多年切望シタル條約改正ノ事業モ止ムヲ得ズ中止セザル可カラザルニ至ルベキコトヲ貴族院ニ於テ演說セラレタリ。實ニ從來條約改正ノ最大障害ハ民法商法ノ制定ナカリシニ在リ、今ヤ漸ク此障害ヲ除キ得ベキ時機ニ達シテ、而シテ之ヲ除クヲ圖ラズンバ是レ策ノ得タルモノト謂フ可カラズ。

法典ヲ施行セザル可カラザル理夫レ此ノ如ク明カナリ。然レドモ天下ノ人擧ク之ニ同意セザルハ誠ニ悲シム可シ。論者曰ク僅少外國人ノ爲メニ同胞四千萬人ヲ犧牲ニ供スベカラズト。

然レドモ前ニ述ル所ニ由テ觀ルモ、國民ノ民事上及ビ商業上ノ利益ハ決シテ法典施行ノ爲メニ害セラルルコトアラザルヲ知ルニ足ル可シ。蓋シ法典ニ揭載スル原則ハ到ル所法理公義及ビ公益ヲ保護スルノ最良具ナレバナリ。當初新法典ヲ起草スルニ當リテハ專ラ日本ノ民事ニ關スル人定法ナキガ爲メニ受タル不利ヲ醫治スルヲ以テ最大ノ主眼トセルヤ疑ナシ。然レドモ亦併セテ法典ヲ實施シ、以テ條約改正ヲ容易ニシ且其成功ヲ速カニセンコトヲ圖リタルモノナリ。蓋シ法典ヲ實施シテ國民ノ利益ヲ保護シ、併セテ治外法權ヲ撤去シ、國威ヲ復シ、外國ニ對シテ完全ノ獨立ヲ保ツハ國家ノ爲メニ一擧兩全ノ策ニアラザル乎。思フニ論者モ條約改正ノ一日モ早ク功ヲ奏スルヲ希望スルナル可シ。彼等日本法典ノ泰西ノ法律ニ倣ヘルノ故ヲ以テ國威ヲ失墜スルモノト爲

シテ、而シテ三十年以來日本國土ニ於テ外國法官ノ外國法律ヲ施行シ、而シテ外人ニシテ日本國民ノ債務者タルモ日本國ノ法律ハ之ニ對シテ權力ナキヲ見テ國家ノ尊嚴ヲ害スルモノト爲サヾルモノヽ如シ。所謂自家撞着トハ夫レ論者ノ說ヲ謂フモノ歟。

第三章　衆議院ニ於ケル非難ヲ反駁ス

余輩ハ衆議院ノ討議ニ付テハ長辯ヲ費サヾル可シ。蓋シ反駁セザル可カラザル非難多カラザレバナリ。而シテ衆議院ニ於テハ討議三日ニ涉リ、貴族院ト異ナリテ委員會ヲ設ケ以テ問題ニ關スル報告ヲ爲サシメタリ。然ルニ委員會員ノ過半ハ貴族院ノ議決セルガ如ク施行延期ヲ主張シ、其少數ハ人事編、相續編、婚姻契約篇ノ延期ヲ主張セリ。

委員會ノ少數ノ意見、卽チ折衷說ハ延期論者ノ說ニ勝ルヤ遠シ。蓋シ國民ノ身分相續等ニ關シテハ慣習未ダ明ラカナラザルノミナラズ、又未ダ足レリトス可カラザルモノアルベシ。是ヲ以テ此等諸篇ノ實施ヲ延期スルモ國家ノ經濟上ニ關スル利益ヲ害スルコト、他ノ諸篇及ビ商法全部ヲ延期スルガ如ク甚シカラザレバナリ。加之ナラズ外人ノ來リテ日本國民ト家族及ビ相續ニ關スル利益ヲ爭フハ何レノ時ニ在ルカ未ダ知ル可カラズ。故ニ右ノ諸篇ハ條約改正ト關係有ルニアラザレバナリ。然レドモ全部延期說議場ヲ制シ、一日ノ間ニ三讀會ヲ了ハリ遂ニ全部延期ヲ議決セリ。

衆議院ノ延期論者ハ亦余輩ノ前ニ反駁シタル二三ノ非難ヲ引證シテ法典ヲ攻擊セリ。然レドモ其說ク所奇トス可キモノナシ。唯注意ヲ惹クモノハ論者ノ尙ホ法律上ノ經歷ニ乏シキト（下質ヲ許スヲ難ジタルカ如キ其一證ナリ）自ラ法條ノ意ヲ明ラカニシテ而シテ漫ニ法條ヲ非難スルトノ二事是レナリ。例ヘバ彼等ハ人事編第二百六十一條ニ於テ「戶主死亡シテ家督相續人ナキトキハ絕家シ、其家族ハ一家ヲ新立ス」ト規定スルヲ非難シテ云ク、此場合ニ於テハ相續人ニアラザル家族ヲ相續人ニ撰定セザルベカラズト。然レドモ論者ハ其希望スル所相續編（第三百一條及第三百二條）ニ於テ法律ノ之ヲ規定スルヲ知ラザル乎。

法典維持者ハ又貴族院ニ於ケルガ如ク反對論者ヨリモ其數少カリキ。而シテ維持者ノ重モナル者ハ宮城浩藏加藤政之助等ノ諸氏及ビ田中司法大臣トス。殊ニ司法大臣ノ如キハ毅然トシテ一個ノ名義ヲ以テスルノミナラズ、政府ヲ代表シテ說ヒテ云ク、政府ハ其發布セル法律實施ノ責ニ任ゼザルベカラズ。政府ハ民法及ビ商法ノ實施ニ對スル障害ヲ除去スルノ義務アリト。司法大臣ハ其後職ヲ辭セリト雖モ辭職ノ原因ハ法典問題ト關係アルニアラズ。是ヲ以テ司法大臣ノ法典ニ關スル演說ハ未ダ其效力ヲ失ハズ。且兩院ノ議決未ダ勅裁ヲ經ザルガ故ニ、民法及ビ商法ハ一千八百九十三年正月一日ヨリ施行セラルヽヤモ未ダ知ル可カラズ。法典維持者豈夫レ絕望シテ可ナランヤ。

商法ノ規定ナキヨリ生ズル弊害

商法ノ規定ナキヨリ生ズル弊害ノ實例甚ダ多シト雖モ試ニ其一二ヲ擧グレバ左ノ如シ。

會社

一、從來會社ノ從テ起レバ從テ倒ルヽモノ比々トシテ之レアリ。其未爭訟ニ及ブニ至レバ有限ト云ヒ無限ト爭ヒ、其株券ノ賣買ニ付キ實賣ニ虛買ニ頻繁錯雜、故ニ初メ甲ヲ被告トセシモ其義務ハ乙ニ在リト爭ヒ、丙丁戊己遂ニ止マル所ヲ知ラズト、之レヲ以テ一訟起レバ十數百ノ引合人證人若クハ被告人ヲ增加スルニ至ル。商法ノ規定アレバ其弊ナシ。現ニ丸屋銀行ノ破產ニ於テ之ヲ知ルニ足レリ。

一、會社ニ在テ或ル有力家ノ名義ヲ以テ許多ノ株券ヲ募リ、例ヘバ一株五十圓ノ額アルモノニ對シ僅カニ一圓ヲ拂込ミ、忽チニシテ其株券ヲ或ル無資力者ニ賣却シ、若干ノ利益ヲ得テ株主ノ責ヲ免ルヽモノアリ。之レガ爲メ會社破產ニ及ビ、人民迷惑ヲ被ルモノ多ク、若シ商法了ルニ至ツテハ是等ノ弊害ヲ一掃スルニ至ル。

一、從來會社責任ノ程度確定セザルヨリ、世人ニ於テ會社設立ニ躊躇シ、安ジテ資本ヲ投ズルモノ少ナク、隨テ善良ナル會社ノ設立ヲ見ズ。又遇々一會社ヲ設立スルモ忽チ解散ヲ告グルニ至ルノ例少カラズ。又會社帳簿ノ如キモ完全ナル法律ナキヨリ、儘紛義ヲ生ジ、隨テ世人會社ニ信用ヲ措カザルヨリ事業ヲ盛大ナラシムル能ハザルモノアリ。大阪商船會社ニ於テ過般來紛義ノ絕ヘザルモ畢竟帳簿ノ不整頓ニ因スルモノナリ。

一、本年二月中ノコトニシテ上野鑑三岩本千綱等カシムロ商會ナル名義ヲ以テ招牌ヲ揭ゲ、無資本ニテ海軍省ノ艦材買集方ヲ請負ヒ、在横濱ノ英人ヨリ艦材ヲ買ヒ海軍省ニ納メ、其代金ヲ受取ルヤ直チニ逃走シテ、其代金一萬六千圓金ヲ分配費消シタリ。是レ會社法ナキ故ニ會社資本ノ基礎ナク從テ英人某ニ非常ノ損害ヲ與ヘタルコトアリ。

一、昨年九月中新井泰次郎、小川久太郎、小川清吉等海陸通運會社ナル名義ヲ以テ株券ヲ發シ、未ダ拂込ナキ株券ヲ以テ抵當トアシ、債主ニ損害ヲ與ヘタリ。是又會社法ナキニ原因スル結果ナリト思料ス。

一、詐欺取財ノ目的ヲ以テ濫リニ會社ヲ設立シ、商品ヲ買入之ヲ騙取シ、又ハ新聞ニ廣告シテ株金ヲ募リ、或ハ役員ヲ募集シ、其申込人ヨリ身元金ヲ騙取スル弊近々數件アリ。彼等這般ノ慾ヲ逞スルコトヲ得ルハ必竟會社法ナキニ由ラズンバアラズ。今商法ヲ施行セバ其取締ノ法嚴且

密ニ涉リ庶クハ此ノ弊ヲ矯ムルヲ得ン。

（右ニ該當スル豫審事件現今七件アリ）

一、明治廿一年中仙臺地方ニ於テ惡奸者相謀リ海陸物產會社ヲ創立シ、其株金ト唱ヘテ巨萬ノ金員ヲ募リ、遂ニ其金ヲ懷ロニシテ瓦解セシメタルコトアリ。爲メニ數多ノ人民困難ヲ來サシメタルコトアレドモ如何セン會社法ト帳簿ノ整理法ナキニ因ルモノナリ。

一、明治廿年中福島地方ニ於テ一ノ汽船會社ヲ設立スルト稱シ、巨萬ノ金ヲ募リ、後チ會社ヲ瓦解セシメ、發起者ト唱フル者巨萬ノ利ヲ得タルコトアリ。爲メニ其募リニ應ジタル者過半身代限ヲ爲シ、却テ其發起者ハ詐欺ノ證擧ラズ法網ヲ免レタルコトアリ。是亦會社法及帳簿整理法ノ設ケナキニ原因スルナリ。

一、曾テ神戸地方ニ於テ或ル會社ノ頭取ガ社外人ヨリ金員ヲ借用スルニ當リ、或ハ單ニ自己氏名ノ下ニ社印ヲ捺シ、或ハ何會社長某ト記載シ其名下ニ自己ノ實印ヲ捺シタリ。而シテ其社長ハ解任退社シタリ。引續會社ノ瓦解ニ及ビタルヲ以テ、債主ハ殘務取扱委員ニ對シ該會社ノ負債ナリト主張シ、殘務取扱委員ハ前社長一己ノ負債ナリト抗辯シ訴訟ニ及ビタル者アリ。必竟是等ハ一定ノ規定アラザルニ基因スル者ナラント思料ス。

一、或ル一商アリ、他一名ト申合セ富山縣射水郡伏木町ニ於テ米及ビ鯡等ノ依托賣買ヲ營業ト爲ス北陸商會ナルモノヲ起シ、該營業ニ從事シ來レリ、而ルニ或ル横濱邊ノ米穀商某ハ該會社ノ確實ヲ信ジ電信ニテ其地現米ノ相場ヲ問合セタル處、或一商其他ノ一名ハ其機ニ乘ジ金圓ヲ欺カンコトヲ企テ、故ラニ其價ヒノ低キヲ通ジタルニ、横濱邊ノ米穀商ニ於テ現米若干ヲ買吳ルベシトテ、明治廿一年十月十一日已來同月廿六日ニ至ルマデ千石以上ノ米ヲ注文シタル後、其賣代金及手付金等ヲ電信爲替ニテ遞送シタリ。而ルニ該一商其他ノ一名ハ其現米ヲ買入ザルノミカ、該會社ハ數日ヲ出デザル中閉店シ、其社員ハ跡ヲ晦マシテ後目下刑事被告事件トシテ審理中ナリ。

破　産

一、破產スルモノ多キハ世間人皆之ヲ知ルト雖モ、其商事ニ出ルト民事ニ出ルトノ區別ナキヨリ、處分上時機ヲ失スルモノ尠ラズ。玆ニ商法ノ規定アラバ其弊ヲ救フモノ少ナカラザル可シ。

附言　從來身代限處分ノ言渡ヲ受ケタル後ニ至リ虛僞ノ負債ヲ釀スモノ少ナカラザルガ如シ。爰ニ商法ノ規定アレバ之ヲ防グモノ蓋シ鮮少ナラザルベシ。

一、故ラニ口實ヲ設ケテ審問ノ延期ヲ乞ヒ、其延期中又ハ身代限ノ言渡ヲ受ケタル後チ其義務者第三者ト共謀シ虛僞ノ證書ヲ作爲シ第三者ヲシテ配當加入ヲ訴ヘシムルモノ比々之アリ、是レ

破産法ノ規定ナキガ爲メナリ。

一、無資力者ガ一時立派ナル家屋ヲ借リ受ケ、大ニ商業ヲ爲ス體ヲ粧ヒ、人ヲシテ信用セシメ、商品ヲ引取リ而シテ之ヲ他ニ賣拂ヒテ身代限ヲ差出スモノアリ之レ破産法ノ規定ナキ弊ナリ。

一、一人若クハ二人以上共同シテ價額數百圓ニ上ル商品ヲ買入、而シテ其代價仕拂ヲ停止シ其所爲頗ル疑訝ヲ容ル可キモノアリ。

之ヲ審理シタル結果ニ於テ彼等ハ元ヨリ其義務ヲ履行スルノ意思ナク、又履行スル能ハザルヲ知リナガラ之ヲ負擔シタルコトヲ認ムルヲ得ルモ、其取引ノ跡ニ就テ詐欺欺罔ノ手段ナキヲ以テ、之ヲ詐欺取財トシテ罰スル能ハズ、爲メニ往々不慮ノ害ヲ被ムルモノ年來數件ニ及ベリ。而ルニ今商法ヲ實施セバ是等ハ先ヅ破産ヲ宣告シ直チ有罪破産ノ刑ニ處スルコトヲ得ルガ故ニ這般ノ大弊ヲ矯ムルヲ得ベキナリ。

右ニ該ル最近ノ事件ハ十月十四日免訴シタル廿二年豫第六〇一號詐欺取財一件、七月十九日免訴シタル廿三年豫第一〇六一號詐欺取財一件、兩三日已前公判ニ於テ無罪ヲ言渡シタル交野時淵外二人詐欺取財一件、生絲商佐藤彌一ガ渡邊伊十郎ヨリ生絲五梱（代價三百五十圓餘）ヲ買受ケ逃走シタルモノ一件。

一、從來身代限規則ノ設アルモノ其規定不完全ニシテ殊ニ適用スベキ特別ノ破産法ナキガ爲メ、

一面ニハ債主ノ權利ヲ保護スル能ハズ、一面ニハ不幸ニシテ商業上不意ノ損失ヲ釀シタル商人ノ營業ヲ繼續維持スル能ハザルノ結果ヲ見ルコト其類多シ。故ニ破産法ノ規定ニ依リ嚴重ナル監督等ヲ以テ債主ヲ保護シ、又協讃契約等ノ方法ニ依リ其不幸ナル義務者ヲシテ其挽回ノ道ヲ立テシムルヲ最要急事トス。是レ從來破産者ノ多クシテ債主ノ損害ヲ受ケタルモノ多キ事實アル所以ナリト考フ。

爲替手形

一、爲替手形ノ如キ現ニ其條例アリト雖モ、今商法ノ規定ニ依リ會社商人等資格分明ニ立チタル上ハ其他ノ規定ト相待ツテ其流通ノ便益少ナカラズシテ偶々訴訟起ルニ至リ之ヲ裁判スルニ至テ亦タ甚ダ便利ナラン。

一、爲替手形條例ノ設アリト雖モ或ハ不完全ノ嫌ナキ能ハズ、依テ商法ヲ施行スルニ至ラバ完全ナラン。

運送

東京ヨリ大阪ニ至ル間ニ甲乙丙丁ノ運送人アリ、各々連絡シテ運送ノ業ヲ營メリトセンニ、今

日東京所在ノ運送人ニ依賴シ大阪迄物品ヲ遞送スルニ當リ、丙ノ手ニ到着シタル後其物件紛失セル時ハ、依賴主ハ甲ニ對シテ償求權ヲ有セルヤ、或ハ又タ甲乙丙三名ニ對シテ償求權ヲ有セルヤ、慣習區々ニシテ明瞭ナラズ。判例一定セズ。然ルニ若シ單ニ丙ノミ其責ニ任ズルト爲ストキハ、甲乙丙丁共謀シテ無資力ナル者ヲ其中間ノ地位ニ置キ、故意ヲ以テ受托ノ有價ノ物件ヲ紛失セシムルノ僞策ヲ爲スノ恐アリ。然ルニ商法ニ因ルトキハ右三名ハ連帶ニテ其責メニ任ズルモノナレバ、依賴者ノ權利ヲ慥メ、不良ナル運送人等カ共謀シテ不正ノ所爲ヲ爲スヲ豫防スルノ利アリ。

右ノ場合ニ遭遇シ起訴シタル實例アリ。

商事契約

一、茲ニ東京某商店横濱某店ト稱シ運送等ノ營業ヲナスモノアリ、是ニ於テ世上其店名ヲ同クスルヨリ京濱共ニ同一ノ商店ト思料シテ之レト契約スルモノアルニ、其實同一ナラザルモノアリ、其事情ハ數多アリト雖ドモ要スルニ其代理ナルト只名義ヲ貸スノミト云フガ如キモノアリ。商事契約法立ツニ至ラバ之ヲ救フ少ナカラン。

帳簿不整

一、平常ニ在ツテハ商人十戸二十戸間ハ曾テ疑念ナク、判取帳通帳等ヲ以テ數千百ノ物件取引シ了ルト雖ドモ、偶々一ノ故意又ハ蹉跌ヨリ一ノ信用ヲ缺クモノアリテ出訴スルモノアルトキ、後日之ヲ調査スルニ方リ其不便謂フベカラズ。從テ其關係ノ範圍ヲ廣クシ、費用ヲ多クスルニ至ルモノ鮮少ナラズ。今商法ノ規定ニ據リ帳簿上ノ整理ヲ得バ之ヲ救フノ效大ナルベシ。

一、第六十國立銀行ハ帳簿不整頓ヨリ遂ニ十五萬餘圓ノ金員行キ方知レザルニ至リ、其末大藏省ヨリ營業ヲ停止セラルヽニ至レリトナリ。是レ畢竟銀行頭取ノ責任幷帳簿等ニ關シ完全ナル法律ナキガ爲メナルベシ。

一、仲買人ト稱スル無資產ナル甲者アリテ、乙者ヨリ物品ヲ取出シ、販賣又ハ質入ヲ爲シ、其金ヲ他ノ事ニ使用シ、乙者ニ辨償セザル爲メ詐欺取財ノ告訴ヲ爲スモノ往々之レアリ。畢竟仲買人ノ規定及帳簿ノ制限ナキニ原因スルコト勿論ニシテ、其被害者中ニハ清國人モ間々見ル所ナリ。蓋シ商業上ニ關スル信用如何ニ大ナル關係アリトス。依テ仲買人ノ規定及帳簿ノ制限ハ素ヨリ必要トス。

元老院商法施行延期ヲ請フノ意見書ニ對スル意見

商法施行ヲ延期セントスル元老院意見書ノ趣旨ヲ案ズルニ、其論ズル所頗ル疎笨ニ涉リテ事理ニ協ハズ、因テ採ル可カラザルモノト思考ス。請フ其意見ニ就キ之ヲ辯ゼンニ、抑商業社會ノ實際ヲ觀ルニ、內國ノ取引ノミナラズ外國トノ取引大ニ進歩シテ一般營業上ノ經畫商取引ニ傾斜セリ。之ガ爲メニ諸會社ノ創設アル亦タ年々數フルニ遑アラザルニ至ル。隨テ諸取引ノ方法多端ニ涉リ其繁雜錯綜ナル亦數年前ノ商業社會簡單ナル取引ノ舊面目ニ非ズ。此際ニ乘ジテ其巧智ヲ逞シ、人目ヲ眩惑シテ以テ自利ヲ謀ル者相踵デ生ズ。會社ニ於テ其弊殊ニ甚シトス。發起人又ハ主幹者或ハ株金ヲ浪費シ、或ハ資本ヲ私借シ、或ハ投機ノ危險ヲ冒シ、或ハ未ダ開業ニ至ラズシテ殊更ニ解散シ、或ハ資本ヲ隱匿シテ殊更ニ破產スル等、種々ノ奸詐ヲ施シテ損失ヲ會社ノ內外ニ被ラシムル如キノ類少ナシトセズ。商業秩序ノ紊亂殆ンド其極ニ達セリト云フ可シ。商業社會ノ氣運將ニ發達セントスルニ際シ、其情狀却テ此ノ如キニ至ル所以ハ、其原因一端ナラザル可シト雖ドモ、之ヲ要スルニ其秩序ヲ維持スル法規ノ不備ナルニ在リ、數年前ヨリ農商務省ニ於テ會社ノ爲メニ法規ヲ切望セシハ、商法ノ全備ヲ待ツニ遑アラズシテ、先ヅ一日モ放擲シ置ク可カラザル會社ノ弊ヲ矯正セントスルニ因ル。蓋シ商業社會ノ秩序ノ爲メニ商法施行ノ急需ナル今日ニ始マルニアラザルナリ。若シ今ニ至リテ商法施行ヲ延期シテ、民法ト同ジク數年ノ後トセバ商業會社ニ一層ノ破壞ヲ加ルニ至ルヤ知ル可キナリ。之ヲ刑法治罪法及市町村制ニ比較シテ長期ノ猶豫ヲ與ヘントスルハ時體ニ通ゼザルノ論ト謂フ可シ。況ンヤ商法施行條例ノ發布ニ至ルトキハ、既設會社ノ登記ノ如キハ商法實施ノ日ヨリ六ケ月或ハ十二ケ月ノ猶豫ヲ得、既ニ航海ノ用ニ供シタル船舶ノ登記ノ如キハ一ケ年ノ猶豫ヲ得、之ヲ商法發布ノ日ヨリ通算スレバ一年半ノ上ニ出デ、其他尙ホ通算シテ一年以上ノ猶豫ヲ得テ刑法治罪法等ヨリ更ニ長期ノ猶豫ヲ受クルモノアルニ於テヲヤ。施行期日ノ爲メニ障碍ノ慮リアルモノハ之ヲ酌酌シテ餘裕ヲ與フル此ノ如クナレバ亦タ施行ヲ延期スルノ事由ナカルベシ。

商法施行條例ハ決シテ舊來慣用セル商事ヲ俄ニ商法ノ範圍內ニ驅入レントスルニアラズ、全ク之ニ相反セル目的ニ出ヅルモノナリ。若シ此條例ヲ一讀スルニ於テハ蓋シ元老院意見書ノ如キ見解ヲ下スコトナカル可シ。要スルニ該條例ハ舊來慣用セル商事ヲ一朝俄ニ商法ノ範圍內ニ驅入ルルトキハ、單ニ商業社會ニ不便ヲ感ゼシムルノミナラズ、一般ノ經濟上ニ於テモ亦一時急激ノ變動ヲ生ジ、爲メニ多少ノ影響ヲ社會ニ及ボスナキヲ保セザルヲ以テ、商法中ノ或ル條項ハ既設會

社ニ對シテ或ハ其實施ヲ延期シ、又ハ全ク之ヲ實施セシメザルニ在リ。則チ該條例ノ第五條第七條第八條第九條第十條第十一條第十二條第十四條第十六條第十七條第十八條第十九條第二十九條及ビ第五十二條等ヲ見ルトキハ、其意ヲ解ス可シ。且此條例ハ大藏農商務遞信各省ノ委員ト協議シテ實地ノ情狀ヲ調査シ、該委員ニ於テ此條例ヲ發布セバ商法ヲ實施スルニ差支ナキ旨ヲ認メタル上ニテ之ヲ草シタルモノナレバ、商業者ニ便利ヲ與フル少ナカラズト信ズ。然ルヲ之ヲ以テ商事ノ慣用ヲ破テ商法ノ範圍内ニ驅入ルヽモノトスルハ該條例ヲ見ズシテ妄評ヲ下ス者ト謂フベキナリ。

商況不振ノ原因ハ一ニシテ足ラズ、必ズ數多ノモノ一燒點ニ集リテ之ヲ釀成シタルハ言ヲ待タズト雖ドモ、其今日ニ至リタルハ商業社會ノ秩序紊亂シ、互ニ誠實信用ヲ顧ミズ、卽チ第一項ニ陳ベタル如キ情狀ハ其主タル原因ナレバ、其病原ヲ質シテ之ヲ治スルノ方法ヲ施スハ、速カニ法規ヲ以テ商業ノ秩序ヲ正シクスルニ在リ。而シテ困難ヲ來スノ恐レアルモノハ特ニ例外法ヲ設ケテ以テ其餘地ヲ與ヘントス。然ルニ今日ニ於テ商法ヲ施行スルハ商業上困難ヲ來ストシテ延期スルトキハ、徒ラニ狡點ノ徒ニ僥倖ヲ得セシムルニ過ギズシテ、此ノ如キ姑息手段ニ出ヅル時ハ幾年ヲ待ツモ正當ナル商業ノ發達ハ見ルベカラザルナリ。

施行期限ニ至ラザル法律ハ未ダ效力ヲ有セザルモノナレバ、其期限前ニ之ヲ施行ス可キノ謂レナク、又人民之ヲ悉知セザル可ラザルノ義務ナキハ辯ヲ待タズシテ明ナリ。商法第一條ハ未ダ效力ヲ生ゼザル民法典ヲ適用ス可シト謂フニ非ズシテ、其效力ヲ生ズルニ至ル迄ハ現行ノ民法ヲ適用ス可シトノ精神ナリトス。且商法ノ條項中一切ノ商事ニ關スルモノハ蒐集シテ殆ンド遺漏ナシ。故ニ之ヲ實際ニ適用スルニ民法典ノ成規ニ依ル必要ノ極メテ寡ナキヲ信ズ。

人民間ニ於テ商法施行ノ延期ヲ切望スル者アリトノコトナレドモ、是或ハ少數商人ガ一己ノ私益ノ爲メ說ヲ爲スニ過ギザルナリ。抑モ商法ヲ施行スルハ前ニ述ルガ如ク商業社會ノ秩序ヲ矯正シ、而シテ商業ノ發達ヲ扶ケ以テ大ニ國家ノ經濟ヲ盛ニスルニ在リ。區々タル私益ノ爲ニスル者ノ說ハ固ヨリ顧ルニ足ラズ、況ンヤ施行條例ヲ以テ私益ノ障碍ヲ除却スルニ於テヲヤ。此ニ由テ之ヲ觀レバ商法ノ施行ハ斷ジテ延期ス可カラザルナリ。加之猶ホ他ニ其施行ヲ延期ス可カラザル一要件アリ。國庫ノ歲入ニ關スル是ナリ。商法中商業者相互ノ權利義務ヲ明確ニシテ以テ商業上ノ信用ヲ厚クスル方法ニ於テ、各種ノ登記亦其一ニ居ル。商業者一タビ其效力ヲ知ルトキハ登記ヲ請フ者必ズ日ヲ逐テ增加ス可ク、隨テ其納ムル所ノ手數料ノ多キト罰金過料トヲ併セテ收入ノ不貲ナル得テ期ス可シ。爾後順次ニ此收入增殖スルトキハ之ヲ以テ他ノ稅目ニ換ヘ、人民負擔ノ幾分ヲ輕減スルコトヲ得ルニ至ラン。是レ新ニ國家ノ一財源ヲ得タルモノナリ。曩ニ廿四年度ノ歲計ヲ立ルヤ、此收入ヲ確認シテ國庫ノ豫算ニ組入レ之ヲ以テ新ニ施政ノ方針ヲ定メラレタリ。

然ルニ元老院意見書ノ如クナルトキハ、財源ノ開ケントスルヲ停メ既定ノ豫算ヲ畫餅ニ屬セシメ、施行上ノ方針亦タ變易セザルヲ得ズ。是レ施行ノ延期ス可カラザル所以ナリ。且萬已ムヲ得ザルノ事理アルニ非ザレバ既行ノ命令ヲ變易ス可カラザルニ、若シ其變易輕率ニ涉ルトキハ甚ダ事體ヲ損スベシ。今ヤ人民ノ政治ニ注目スル最モ深シ。苟クモ施政ニ就テ謗議ヲ招クノ端ヲ生ゼバ之ニ因テ意外ノ虞ヲ釀スモ亦タ知ル可カラザルナリ。

商法ノ實施ヲ要スル意見

商法ノ實施ヲ拒ム所以ノモノハ若シ整然タル規則ノ具備スルニ至テハ奸商輩ニ於テ自ラ私利ヲ營ムコト從前ノ如クナルヲ得ザルニ因ルナリ。故ニ商法ノ實施ハ奸商ノ專横ヲ制シ、其要良民ヲ保護スル爲メ最モ其必要アルモノナレバ、成ル可ク之ヲ急速ニシ、以テ商業ノ發達進歩ヲ助成セザル可カラザルナリ。今左ニ彼輩ニ不便ナル二三ノ類例ヲ擧示シ、以テ此說ノ妄ナラザルヲ辯ゼン。

一、株券賣却ノ目的ノミヲ以テ會社ヲ設立スルヲ得ズ。

一、會社ノ役員中過分ノ負債ヲ起シ、私ニ之ヲ費消シタル後自ラ退社シ、他人ヲシテ之ニ代ハラシメ、以テ責任ヲ免ル、如キ行爲ヲ行フコトヲ得ズ。

一、會社役員ノ怠慢及ビ過失ニ付テハ第二百五十六條以下ノ處罰ヲ受ケザル可ラズ。

一、保險營業者ハ一定ノ準備金ヲ積立其證書ヲ裁判所ニ預ケ置カザルヲ得ズ。又裁判所ヨリ其會計ノ內幕ヲ檢査セラル、コトアリ。

一、支拂停止ノ前後ヲ問ハズ、過分ノ負債ヲ起シ其他第千五十條及ビ第千五十一條ノ如キ不正ノ

行爲アル者ハ何レモ處罰ヲ受ケザルヲ得ズ。

商法ノ規定ナキニ於テハ商人ヲシテ動モスレバ其權利ヲ述ブルコトナキニ至ラシム可シ。例ヘバ甲者ガ乙者ニ對シ其地ニ商品ノ運送ヲ委托シタル場合ニ於テ、若シ其中間運送人ナル丙者ノ怠慢ニ因リ、其運送ヲ遲延シタルトキハ、甲者ハ之ガ爲メ生ジタル損害ヲ要求スルノ權利アル可シ。此場合ニ於テ甲者ハ乙者ニ對ス可キモノナルヤ、又ハ丙者ニ對ス可キモノナルヤ、現行法律上一モ之ガ規定ヲ設クルモノナク、又別ニ一般ノ慣習アルナシ。是ニ於テカ甲者ハ其所在地ニ住スル乙者ニ係リ、要償ノ訴訟ヲ起シタリトセン歟、其裁判所ニ於テハ直接ニ損害ヲ加ヘタル者ハ丙者ナルヲ以テ丙者ニ係リ起訴ス可キモノナリトノ裁判ヲ與フルコトアル可シ。若シ夫レ此場合ニ適用ス可キ法律アルニ於テハ、甲者ハ之ニ依リテ其裁判ノ當否ヲ鑑別シ、以テ自ラ進退ヲ決ス可シト雖トモ、所謂一モ是等ノ法律ナキヲ以テ、先其裁判ニ服從シ、遠ク丙者ノ住所ニ至リ更ニ訴訟ヲ起シタル場合ニ於テ、其裁判所ニ於テハ丙者ハ運送契約ノ對手人ニ非ザルヲ以テ、甲者ニ對シ直接ノ義務アル者ニ非ズトノ裁判ヲ與フルナキヲ保セズ。果シテ然ラバ甲者ニ在テハ數多ノ日子ト費用トヲ浪費シ、而シテ遂ニ得ル所ナク、假令偶々得ル所アルモ以テ其失フ所ヲ償フニ足ラズ、其極甲者ヲシテ將來運輸ノ利便ニ因ルコトヲ躊躇スルニ至ラシメ、加之將來此ノ如キ損失ヲ被フルコトアルモ以テ恢復スルコトヲ得ザルモノトシ、枉テ之ヲ默々ニ付スルニ至ルベキナリ。特リ運輸ノ事業ノミナラズ、百般ノ取引ニ於ケルモ法律ナキノ故ヲ以テ徒ラニ自ラ枉屈シ、以テ商業ノ運用ヲ澁滯ナラシムルモノ其果シテ幾何ナルヲ知ラザルナリ。是豈生民ノ安寧幸福ヲ保護スルモノナランヤ。豈又國家經濟ノ原理ニ適合スルモノナランヤ。

法律アルニ非ザレバ裁判官ハ如何ナル標準ニ依リテ裁判ヲ下ダスヲ得ン。是最モ法律ノ制定アルヲ要スル所以ナリ。今ヤ裁判官ノ準據スル所ノモノハ明治八年第百三號布告民事ノ裁判ニ、成文ノ法律ナキモノハ慣習ニ從ヒ、習慣ナキモノハ條理ニ從フ可シトノ一章アルノミ。而シテ商事上依ル可キノ法律ハ果シテ幾何カアル。加之慣習ノ如キハ各地各所ニ於テ殆ンド一定セルモノナキハ下文說明スル所ノ如シ。夫レ普通原則ノミヲ揭ゲ、困難錯雜ナル項目ヲ脫漏シタル法條ハ人以テ裁判上ノ需用ニ適セズ、徒ラニ法官ヲシテ困苦ヲ嘗メシムルモノトス。況ヤ絕テ原則ダモ設ケザル今日ニ在テハ裁判官ノ困苦更ニ數層ノ甚シキモノアルノミナラズ、困苦ノ上言渡シタル裁判ハ却テ奇妙ナル結果ヲ生ズルニ於テヲヤ。例ヘバ始審裁判官ハ自國ノ法律ナキヲ以テ、勉メテ外國ノ法律ヲ取調ベ、先ヅ其英法ノ主義ヲ以テ條理ナリト認知シ、以テ裁判ヲ下シタリトスルモ、控訴裁判官ハ佛法ノ主義ヲ認メテ條理ナリトシ、終審裁判官ハ獨法主義ヲ認メテ條理ナリトスルガ如キ、何レモ充分ナル取調ヲ爲シタルニ拘ハラズ、却テ區々ノ裁判ヲ下スニ至ル可キナリ。果シテ然ラバ訴訟人タルモノ如何ナル條理ニ準據シ、以テ自己ノ權ヲ主張スルヲ得ベキヤ。是實ニ

我邦未ダ法律ナキノ致ス所ニシテ、苟モ法衙ノ門ニ入リ法律ノ施行ヲ職トスル者ニ在テハ蓋シ此事情ヲ諒知セザル者ナカル可キナリ。

外國人ハ勿論日本人ト雖モ裁判ニ信用ヲ與ヘザル所以ノモノアリ。右ニ云フ如ク我裁判所ニ於ケル民事訴訟ノ多數ハ總テ條理ニ依テ判決ス可キモノニシテ、其結果ニ於ケル亦右ニ云フ所ノ如クナルヲ以テ、當事者ハ裁判官ヲ認メテ、例令條理ニ反スルモ隨意ニ勝敗ヲ決スルヲ得ベキモノト看做シ、敗訴者ニ在テハ之ガ爲メ動モスレバ收賄ノ嫌疑ヲ懷クモノナシトセズ。是亦法律ナキノ致ス所ニシテ、蓋シ爭フ可カラザルノ事實ナリ。若シ夫レ法律ノ完備シタルアランカ、則チ當事者ハ法律ヲ以テ論爭スルヲ得ベキガ故ニ、決テ此ノ如キ不信ヲ來スナキナリ。某ノ先キニ横濱裁判所長ノ職ニ在ルヤ、時ノ英國公使バークス氏ハ横濱裁判所ノ裁判ニ對シテ前後二回ノ論難ヲ試ミタリト雖モ、一ハ治罪法ニ屬シ、一ハ刑法ニ屬スル問題ナルヲ以テ、一々法律ノ明文ニ憑據シ以テ之ガ辯明ヲナシタリ。其後我外務大臣ノ言ニ依レバ英國公使ハ該件ニ付テハ本國政府ニ上申シタルヲ以テ、其指揮ヲ待チ更ニ照會ス可キ旨ヲ述ベタリトノコトナレドモ、以來數年絶テ何等ノ申出アルコトナシ。若シ夫レ單ニ條理ニ因リタルモノナリトセバ、其往復啻ニ一兩回ニ止マラズ、或ハ長ク汚辱ヲ被ムルニ至ルナキヲ保セザルナリ。

以上ハ商法施行ヲ要スルノ點ニ付其大體ヲ陳述セシモノナリ。以下更ニ編章ニ付之ガ必要ナル所以ヲ略述ス可シ。

第一編

第一章（商事云々）

身代限法ノ不完全ニシテ爲メニ弊害ノ夥多ナルハ如何ナル論者ト雖ドモ決シテ爭ハザル所ナル可シ。又會社法ノ制定ナキヨリ徒ラニ株券賣買ヲ目的トスル會社ヲ設ケ、其他發起人タル者自ラ役員トナリ私利ヲ營ム爲メ、會社ヲ設クルガ如キ種々ノ弊害アル點ニ付テモ、亦蓋シ世人ノ熟知スル所ナリ。夫レ破産法ハ此ノ如キ身代限法ノ不備ヲ補フモノナリ。會社法ハ此ノ如キ弊害ヲ豫防スル方法ナリ。故ニ會社法及ビ破産法ノ如キハ一日モ早ク之ヲ實施セザル可カラザルハ亦蓋シ多數論者ノ希望スル所ナリ。然ルニ破産法ハ商取引ヨリ生ズル債務ノ支拂ヲ停止シタル場合ニ係ル規定ニシテ、商事會社ハ商取引ヲ爲スヲ目的トスルモノニ係ル規定ナリト云フガ如ク、本法中商取引ノ區別ヲ定ムルノ必要アルヲ以テ、抑モ商取引トハ如何ナルモノナルヤ、先ヅ之ガ定義ヲ設ケザルヲ得ズ。是則チ本章ノ設ケアル所以ナリ。

第二章（商業登記簿）

例ヘバ會社ハ登記公告ヲ受クルニ非ザレバ第三者ニ對シテ會社タルノ效力ナク、會社ノ資産及ビ社員ノ氏名等ハ之ヲ公告セザル可カラズ。其他會社ニ付種々ノ登記ヲ要スルハ則チ本法ノ規定スル所ニシテ、此規定タル實際上極メテ必要ナルモノナリ。抑モ現今ノ有樣ニテハ其設立ノ前後ニ付明確ナル區域ナキヲ以テ、發起人ト會社トノ責任ニ付之ガ區別ヲ定ムルノ困難アルガ如キ、其他事實ノ公示ナキヨリ生ズル所ノ弊害ハ苟モ會社ト關係ヲ有スル者ハ丞ニ熟知スル所ナリ。加フルニ未成年者ニシテ商業ヲ行ハントスルトキノ如キ、亦其登記公告ヲ受ケザル可カラズ。否ザレバ社會ハ常ニ此者ヲ認メテ無能力者トナシ、遂ニ獨立シテ商業ヲ行フコトヲ得ザルニ至ル可キナリ。既ニ此ノ如キ登記ノ必要アルヲ知ラバ商業登記簿ノ設ケナキヲ得ザルモノ固ヨリ論ヲ待ザルナリ。

第三章（商號）

商號ハ其所有者ノ願ニ依リ之ヲ登記シ、以テ其保護ヲ爲スニ過ギズ。故ニ保護ヲ受クルコトヲ欲セザル者ハ固ヨリ登記ヲ求ムルノ義務ナク、又從來使用スル所ノ商號ハ假令他人ノ登記スルモノアリト雖ドモ之ヲ改ムルヲ要セザルヲ以テ（商法施行條例）何人ト雖モ本章ノ爲メ決シテ弊害ヲ生ズルコトナク、之ニ反シ本章ノ施行ヲ猶豫スルニ於テハ守田治兵衞ノ賣藥商ニ於ケル、龜屋某ノ西洋食料商ニ於ケルガ如ク、漫ニ同一ノ商號ヲ用ヰ以テ妨害ヲ加フル者ナキヲ得ザルナリ。

第四章（商業帳簿）

商業ノ益々盛ナルニ從ヒ、其取引ニ付一々證書ヲ取替ハスガ如キハ到底爲スコトヲ得ベキニ非ズ。故ニ商人ハ各々自己ノ帳簿ヲ整備シ、以テ其記入ヲ明瞭ニスルニ於テハ、假令自己ノ帳簿ト雖モ相手方商人ナルトキハ之ニ對シテ完全ナル證據トナルヲ得ベク、又非商人ナルトキト雖モ尙ホ一分ノ證據トナルガ如キ專ラ自己ノ利益ヲ受クルコトヲ得ベキモノナリ。現ニ外國商人ニ係ル訴訟ニ於テ內國商人ノ不利ヲ被ムルモノアルハ往々商業帳簿ノ整備スル、遠ク彼ガ如クナラザルニ因ルモノアリ。而シテ本章ニ於テ規定スル所ノ帳簿タル、唯其慣例ニ從フテ明瞭詳密ニ記載スト云フニ在リテ、全ク慣例ヲ採用シタル法律ナレバ、決シテ商人ノ迷惑ヲ釀ス可キモノニ非ザルナリ。

第五章（代務人云々）

代務人及ビ商業使用人ノ如キハ各地各所ニ止マラズ、甚シキニ至テハ各店鋪ニ於テ何レモ特別ナル慣例アリテ、此慣例ニ依リ各自各個ニ取引ヲ爲ス者ナレバ、第三者ニ於テハ果シテ其權限ノ區域ヲ了知スルヲ得ズシテ、各取引ニ付キ爲メニ危虞ヲ懷カザルヲ得ザルモノアリ。故ニ此際ニ當リ一定ノ標準ヲ定ムルハ商業進歩ノ折柄寔ニ已ムヲ得ザルノ處置ナリトス。是ヲ以テ本章ニ於テハ之ガ爲メ一般ノ規定ヲ設ケ各商人ヲシテ代務人等ノ權限ニ付懸念ナク相互ニ取引ヲ爲スコトヲ得セシメ、併テ商業主人ト代務人等トノ間ニ於ケル權利關係ヲ明ラカニスルニ在リ。

第六章（會　社）

本章ヲ設クルノ必要ナルハ前文第一ニ於テ一言セシ所ノ如ク、且既ニ世人ノ是認スル所ナリ。

第七章

契約ニ關スル法律ニ付テモ現今ニ在テハ亦一ノ準據ス可キモノナク、之ガ爲メ從來不便ヲ感ズルモノ極メテ多ク、又商事契約ハ民事上ノ契約ト同視スルヲ得ザルモノアリ。是民法ノ規定アルニ拘ハラズ特ニ本章ノ規定アル所以ニシテ、獨逸商法ノ如キモ亦將ニ商事契約ニ關スル一章ヲ設ケタリ。

第八章（代辯人云々）

代辯人トハ英語ノ「エゼント」ニシテ近年ニ至リ頗ル此種ノ營業ヲ增加スルノ傾向アリト雖モ、之ガ爲メニ一定ノ名詞ナク、又一ノ法律アルナシ。其他此章ニ揭グルモノハ其實既ニ現存セルニ拘ハラズ、明ニ之ガ名稱ヲ定メズ、且取引所條例ノ外ハ亦更ニ規定ヲ設クルモノナシ。殊ニ運送事業ノ如キハ人肩馬背ニノミ依リタル時代ト同視ス可キモノニ非ザレバ、本章ヲ設クルノ要亦敢テ辯ヲ俟タザル可キナリ。

第九章乃至第十一章（賣買云々）

此點ニ付テモ別ニ法律ノ規定セルモノナク殊ニ保險營業ノ如キハ法律ヲ以テ保護スルニ非ザレバ經濟上及ビ安寧上共ニ大ナル弊害ナキヲ得ズ。例ヘバ保險營業者ハ十分ナル準備金ヲ積立置、其證書ヲ裁判所ニ預置ク可ク、及ビ裁判所ハ實地ニ付キ保險會社ノ內幕ヲ取調ブルト云フガ如キハ總テ本章ノ規定スル所ナリ。此規定タル保險營業者ニ在テハ極メテ迷惑ナル次第ナル可シト雖モ、社會ノ利益殊ニ被保險者ニ在テハ實ニ必要ニシテ缺ク可カラザルノ方法ナリトス。

第十二章（手形云々）

現行手形條件ノ不備不全ナルハ何人ト雖モ既ニ了知スル所ナリ。而シテ本章ノ規定ハ專ラ之ヲ改正追加スルニ過ギザルヲ以テ敢テ驚クニ足ルモノナカル可シ。

第二編（海商）

外ニ在テハ萬國通商、內ニ在テハ內海航通、二者何レモ長大足ノ進步ヲ爲シタルハ既ニ吾人ノ目擊スル所ナリ。然ルニ此間一ノ海商ニ關スル法律ナク、事々物々之ヲ裁判官ノ方寸ニ任セザルヲ得ズ。是豈立法者ノ默視スルヲ得ベキモノナランヤ。殊ニ外國關係ノ取引ニ至テハ一定ノ法律アルト否トニ依リ、利害ノ關スル所其最モ大ナルモノアリ。其然リ。然ルヲ論者ハ尙ホ之ヲ必要ニ非ズトスルカ。

第三編（破産）

此點ニ付テハ前文第一ニ於テ辯明セシ所ノ如シ。

以上ハ商法實施ノ必要ナル所以ヲ略述シタルモノナリ。以下實施ノ延期ヲ必要ナリトスル論旨

ニ對シ更ニ之ガ答辯ヲ試ムル所アルベシ。

永井松右衞門氏ノ理由書ニ對シテ

第一　商法第一條ニ於テ商事ニ於テハ云々民法ノ成規ヲ適用ストアルヲ以テ、商法ハ民法ト相待テ始メテ其效用ヲ致スモノナリト。是徒ラニ民法ナル文字ニ拘泥シタル見解ニシテ、所謂新定ノ民法卽チ法典ニ非ザレバ之ヲ民法ト看做サヾルモノノ如シ。果シテ然ラバ明治十三年ヲ以テ布告セラレタル治罪法中ニ散見スル民法ナル文字ニ付テハ論者ハ如何ニ之ヲ解釋スルヤ。其第二條ニ曰ク、私訴ハ犯罪ニ因リ生ジタル損害云々、民法ニ從ヒ被害者ニ屬ス。其第八條ニ曰ク、被告人免訴云々民法ニ從ヒ被害者ヨリ賠償返還ヲ要ムルノ妨礙ト爲ルコトナカル可シト。而シテ此等ノ各條ハ變ジテ刑事訴訟法ト爲リ、明治十五年以來連綿吾人ノ遵奉スル所ナリ。識者若シ眼ヲ此邊ニ注ガバ蓋思半バニ過グルナル可シ。

第二　元來法律ニ慣レザル我國ノ商業家ニ向テ此大法典ヲ遵守セシメントスル其準備ノ爲メ、借スニ長日月ヲ以テセザル可ラズト。識者ハ果シテ如何ナル準備ヲ要スルモノトスルヤ。今ヨリ新ニ商法ノ學問ヲ爲サントスルカ、是蓋シ一般商家ニ向テ望ム可ラザルナリ。假令歐米各國ノ商人ニシテ、久シク其國ノ商法ニ支配セラルヽモノト雖モ、法律學ヲ修メタルモノニ非ザルヨ

リハ決テ商法ノ蘊奥ヲ了知スル者ニ非ザルハ識者ト雖モ蓋シ爭ハザル所ナル可シ。然ラバ則チ識者ノ所謂準備トハ商人ガ既ニ施行シ且將ニ繼續セントスル事業ニ對シ、忽然新法ノ支配ヲ受ケ以テ初志ニ反スルガ如キ危險アルヲ恐レ、豫メ之ヲ防禦ス可シト云フニ外ナラザル可シ。是識者ガ商法ヲ通讀セザルニ坐スルモノニシテ、固ヨリ咎ム可キニ非ズト雖モ、當局者タル者豈敢テ此ノ如不都合アルヲ顧ミザルモノナランヤ。則チ商法中直チニ之ヲ施行スルヲ得ザルモノハ單ニ二三ニ過ギズシテ、此點ニ付テハ商法施行條例ヲ以テ或ハ之ヲ例外トナシ、或ハ之ガ實施ヲ猶豫シ、各商人ヲシテ十分ノ準備ヲ爲スヲ得ベキモノトセリ。

第三　我邦ノ商業程度ニ依準シタルヤ否ヤヲ拒ムハ亦深ク商法ヲ研究セザルノ致ス所ナル可シ。識者若シロエスレル氏ノ起稿ニ係ル草案ト現法律トヲ參照セバ、蓋此等ノ疑點ヲ氷解スルニ難カラザル可シ。

第四　風俗習慣ヲ參酌セシヤ否ヤハ實ニ本顯ノ骨子ト謂フヲ得ベシ。而テ當局者ガ此點ニ付辯解ヲ試ムルノ時機ヲ得タルハ以テ自ラ幸トスル所ナリ。抑々ロエスレル氏ガ商法ノ草案ヲ起草セシハ明治十四年四月ニシテ、之ト同時ニ一方ニ在テハ我邦ノ商業慣習ヲ取調ベ、之ガ爲メ吏員ヲ派出シ、又ハ各地ノ商法會議所ニ問合ス等其手續ニ於ケル固ヨリ盡サヾル所ナキナリ。故ニ其商業取調ニ關スル書類ハ積デ堆ヲ爲シ、且之ニ類集シテ印刷スルモノ尙且數冊ノ多キニ及ベリ。然レドモ此慣習タル多クハ區々ニ別レ、一般ノ法律トシテ採用ス可キモノニ至テハ恰モ曉天ノ星ノ如ク、轉タ失望ニ堪ヘザルモノアリ。是蓋シ封建制度ノ然ラシムル所ニシテ、則チ商業區域ノ各個ニ制限セラレタル結果ニ外ナラザルナリ。故ニ本法ニ於テ散見セザル所ノ慣習ハ之ヲ一般ノ法律トシテ採用スルヲ得ザルモノニシテ、則チ之ヲ採用セザリシモノハ却テ我邦一般ニ對シテ適合スルノ法律タルヲ證スルニ足ル可シ。

第五　條文法意ノ動モスレバ矛盾ストハ如何ナル條目ヲ指シタルモノナルカ、千有餘條ノ多キ或ハ行文ノ穩カナラザルモノアル可シト雖モ、果シテ之ヲ矛盾スルト云フ可キモノナリヤ、數年審査シ、數年實施セル各國ノ法律ト雖モ決シテ其不都合ナキニ非ザルハ亦蓋シ議者ノ了知スル所ナル可シ。要スルニ議府ノ稱シテ矛盾セリトスル所ノモノ果シテ實施ヲ延期スルノ價値アリトスルヲ得ルカ。

第六　用語ノ必ズ畫一ナラザル可ラザルハ刑法ニ於テ然リトス。然レドモ民法及ビ商法ノ如キハ決シテ文字ニ拘泥ス可キモノニ非ザルヲ以テ、各國ノ法律ニ於テモ必ズシモ之ガ一定ナルヲ期セズ。故ニ本法ノ如キハ之ヲ他國ノ法律ニ照セバ寧ロ大ニ整然タルモノト謂フ可シ。

第七　商業上ノ慣用語ヲ斥ケタリトセバ或ル場合ニ於テ偶々之ナキニ非ズト雖モ、是實ニ理由アリテ然ルモノニシテ、則チ慣用ノ熟語ニシテ大ニ法律ノ意思ニ類スルモノアリト雖モ、未ダ全

ク之ヲ表明スルニ足ラザルニ因ルナリ。

右ノ外商原ニ需用アラザル規定アリトノコトナレドモ果シテ如何ナル規定ヲ指シタルモノナルカ。之ヲ要スルニ以上數個ノ論點ハ毫モ實施ノ延期ヲ必要トスルモノニ非ザルノミナラズ、朝令暮改ハ吾人共ニ其非ナルヲ知ル。果シテ然ラバ假令一小部分ノ不可ナルモノアリトスルモ、其大部分ノ必要アルニ於テハ決シテ之ガ實行ヲ猶豫ス可キモノニ非ザルナリ。況ンヤ一小部分ト雖モ未ダ明カニ之レガ不可ナルヲ擧示セザルニ於テヲヤ。

商法延期同盟會ノ說ニ對シテ

此檄文ハ最モ漠然タル抗擊ニシテ、之ヲ反駁スルノ標的ナシト雖モ、其ノ大要ニ付テハ前文ニ於テ陳述スル所ヲ以テ自ラ之ヲ反駁スルニ足ル可シ。但曖昧新奇ノ字句ヲ點綴シタリトノ點ニ付テハ玆ニ一言セザル可カラズ。抑モ字句ヲ了解セザルモノノ眼ヨリ見ル時ハ如何ナル字句ト雖モ悉ク曖昧ナラザルナキナリ。夫レ新法典ノ熟字及文章ニ付テハ漢文及ビ和文ニ通曉セル專門學者ノ認定ヲ經タルモノナレバ、之ニ付スルニ曖昧ノ批評ヲ以テスルハ卽チ不可ナリ。然レドモ新奇ナリトノ批評ニ至テハ固ヨリ免レザル所ニシテ、實ニ新奇ナラザルヲ得ザルノ理アリテ存スルナリ。顧テ廿年前ヲ視ヨ、會社ナル熟字ハ世人ノ耳目ニ觸レタルコトアリヤ、然ルニ世人ハ今日此熟字ヲ以テ固有ノ如ク見做シ、敢テ之ヲ怪ムモノナシ。又現行法律上「コルレスポンデンス」ナル英語アリ。世人ハ如何ニシテ之ヲ解スルヤ、凡ソ是等ノ熟字ノ生ズルハ追々新事物ノ生ズルニ當リ古來ノ名稱ヲ以テ適當ニ之ヲ表示スルヲ得ザルニ依ルナリ。商法中ニ所謂合名會社及ビ合資會社ノ如キモ亦全ク之ニ同ジ。卽チ如斯種類ノ會社ハ現ニ各所ニ存在スト雖モ、未ダ一定ノ名稱ヲ希ヒタル者ナシ。果シテ然ラバ論者ハ如何ニ之ヲ稱呼スルヤ。論ジテ玆ニ至ラバ新奇ナル熟語ノ現出ナキヲ得ザル所以ノモノ以テ自ラ了解スルニ難カラザル可シ。

商法施行延期ノ義ハ昨十六日衆議院ニ於テ可決セラレタルヲ以テ、該院ハ是ヨリ延期ノ義ヲ政府ニ建議スルコトト信ズ。

政府其建議ヲ採用セラルヽヤ否ハ未ダ知ルベカラズト雖モ、今假ニ之ヲ採用セラルルモノトスルトキハ、商法ト聯絡スル法律命令ニシテ商法延期ト同時ニ廢止又ハ延期又ハ改正スベキモノ左ノ如シ。

第一　本年九月法律第八十一號商業會議所條例第一條及第四條ノ五、六

(說明)商業會議所條例第一條ニ曰ク「此條例ニ商業者ト稱スルハ商法第四條ニ揭ゲタル商取引ノ各部類ニ屬スル商人及作業人ヲ謂フ」トアリ、抑々本條ハ會議所ヲ設立スルノ基礎トモナルベキ商人ノ種類ヲ定メタルモノニシテ、今若シ商法實施ヲ延期スルトキハ此條例ハ殆ンド實行スルコト能ハザルニ至ルベシ。

第四條ノ五、六ニ於テモ亦仲立人組合及仲立人ノ資格ニ係ル規定アリ、是又商法實施ヲ延期スルトキハ之ヲ如何スベキヤ。

第二　本年八月法律第七十二號銀行條例。

第三　同上法律第七十三號貯蓄銀行條例。

(說明)右二條例ハ商法中ノ會社編ヲ基礎トシテ組織シタルモノニシテ、卽會社編ニ規定アルモノハ擧テ之ニ讓リ、其ノ條例ニ揭ゲズ。然ルニ今商法實施ヲ延期スルトキハ右二條例ハ殆ンド實施スルコト能ハザルベシ。就中銀行條例第九條第十條ノ如キハ商法ノ罰則ニ依ルモノニシテ、其罰則ヲ缺クトキハ條例ハ空文ニ屬スベシ。

又貯蓄銀行條例第九條ニ謂ヘル取締役營業主等ノ文字モ何トカ改正セザルベカラズ。

第四　本年八月法律第六十九號家資分散法第四條

(說明)本條ニ於テ家資分散者ノ復權ニ就テハ商法第千五十五條以下ヲ準用ストアリ。此規定ノ如キハ商法延期ノ爲ニ之ヲ延期スルコトヲ得ズ。必ズヤ特ニ復權ノコトヲ規定セザルベカラズ。

其他商法實施延期ノ爲特ニ帝國議會ノ協贊ヲ經テ實施ノ延期ヲ公布セザルベカラザル法律左ノ如シ。

第一　本年法律第五十九號商法施行條例

第二　同法律第六十號商法第二百六條債券發行方

第三　同法律第六十六號商事訴訟事件印紙法

第四　同法律第百一號有罪破產ノ罰則

商法實施延期ノ爲勅令ヲ以テ施行延期ヲ公布セザルベカラザルモノ左ノ如シ。

本年七月勅令第百三十三號及九月勅令第二百七號商業及船舶登記及登記料。

(說明)本令ハ商法施行ノ爲メ定メタルモノナレバ同時ニ延期セザルベカラズ。

其他現行法律勅令中商法ト聯絡スルモノニシテ商法實施延期ノ爲メ全ク空文ニ屬セシムルカ又ハ特ニ一二ノ各項ニ限リ施行ヲ延期セシメザルベカラザルモノアリ。卽チ左ノ如シ。

第一　裁判所構成法第十五條。

第二　不動產及船舶ニ係ル權利關係ヲ登記スルコト、

第三　商業登記及特許局ニ登錄シタル特許意匠及商標ノ登記ヲ爲スコト、

第百二十九條中ノ破產事件、

第二　本年七月法律第五十一號執達吏規則第二條ノ三、

（說明）拒證書ヲ作ルコト

第三　本年十月勅令第二百十九號ノ船籍規則第六條、

（說明）第六條ニ曰「同一ノ船舶ニシテ再度以上假證書ノ交付ヲ受ケタル場合ト雖モ其效力ハ初度ノ證書ニ記載シタル年月日ヨリ起算シ、商法第八百三十條第二項ノ期限ヲ超過スルコトヲ得ズ」

本條ノ如キハ來年一月一日ヨリ差向キ必要ノモノナレバ何ントカ之ヲ改正セザルベカラズ。

政府若シ果シテ商法施行延期ヲ公布セラルヽナラバ、以上ノ法律勅令ニ付キ豫メ其處分方法ヲ定メ置カザルベカラズ。而シテ其處分方法ハ帝國議會ノ議ヲ向フベキモノトス。

法典（民法商法）ト不二麻呂

二十四年五月九日松方總理大臣ハ不二麻呂ヲ司法大臣ニ推薦セントスルノ內意ヲ告ゲラレ、且國家多難ノ際勉メテ上任センコトヲ勸誘セラル。不二麻呂卽總理大臣ニ問フニ內閣施政ノ方針如何ト法典（商法、民法）實施ノコトヲ以テス。總理大臣曰ク、施政方法ハ云々（今之ヲ略ス）法典ハ過般閣議ニ於テ斯ノ如ク實施スベキコトニ決セリト。是ニ於テ不二麻呂ハ施政方針法典實施等皆持論ト吻合セルヲ以テ始メテ微意ヲ慰メ、尙答フルニ精々熟計スベキノ旨ヲ以テシ、其席ヲ退去セリ。越テ兩日再ビ總理大臣ニ面シ施政方針法典實施等皆同說タリ、然ル上ハ最早司法大臣候補者タルヲ辭セズ、他日倘シ

聖勅ノ降ルニ際セバ進ンデ閣員ニ列シ相提携スベキヲ誓言セリ。

二十四年八、九月ノ交ニ到リ、商法ノ審査修正ハ交々世上ノ論題トナレリ。或ハ曰ク政府ハ何故ニ審査委員ヲ設置セザル乎、或ハ曰ク政府ハ何故ニ修正ニ從事セザル乎ト、諸說紛々殆ド底止スル所ナキモノヽ如シ。是ノ時ニ當リ閣員中ニモ亦修正委員設置ヲ唱フル者アルニ到レリ。依テ不二麻呂ハ其委員設置ノ不可ナルヲ陳辯シ、閣議遂ニ該委員ヲ設置セザルコトニ決セリ。

二十四年九月中東京商工會議殘務整理委員總代人ノ商法修正意見書ノ謄本一部司法省ニ呈セリ。依テ不二麻呂ハ該意見ハ實業者流ノ提案ニ係ルヲ以テ、其適否如何ハ深ク講究ヲ要スベキ價値アルヲ信ジ、直ニ僚員ニ命ジテ之カ調査ニ從事セシメタリ。

二十四年十二月衆議院議員渡邊又三郎外三十五名ハ商法一部施行ノ議ヲ提出シ、商法中第一編第六章及第三編竝ニ商法施行條例中商事會社及破產ニ關スル規定ハ明治二十五年三月一日ヨリ施行センコトヲ望ミタリ。其理由ハ左ノ如シ。

我邦商業會社ノ秩序整正セザルヤ已ニ久シ。殊ニ近年ニ於ケル商事會社ノ恐慌ノ如キ破產相襲キ弊害ノ極マル處言フニ忍ビザルモノアリ。而シテ其之ヲ防遏匡正スルノ道固ヨリ容易ノ業ニアラズト雖モ、細密嚴正ナル法律ヲ以テ之レガ成立ヲ規律シ、之レガ營業ヲ監理スルハ蓋シ今日ニ於ケル最急ノ要務タルベキヲ信ズ。今ヤ幸ニシテ既定法典ノ存スルモノアリ、玆ニ其一部ヲ把摘シ速ニ之ヲ實施セバ其効績必ズ觀ルベキモノアルヲ得ン。然リ而シテ第三編破產ノ部ハ商事會社ニ關スル規定ヲシテ實効アラシムル所ノモノニシテ、若シ之ヲ併セ行フニアラザレバ監理ノ目的ヲ達シ得ベカラズ。該法中此ノ二個ノ部分ヲ併セ施行セントスルハ此レガ爲メナリ。蓋シ全部施行ノ期遠カラズト雖モ本法ノ如キハ正ニ焦眉ノ急ニ屬シ、一日之レガ施行ヲ遲延スレバ一日ノ弊アリ、其期遠カラズト爲シテ等閑ニ附シ得ベキコトニアラズ。是レ本案ノ提出ヲ必要トスル所以ナリ。

二十四年十二月該議案第一讀會ノ始ニ方リ不二麻呂議場ニ在リテ之ガ辯論ヲ爲シテ曰ク。

嚮ニ政府ハ二十三年三月ヲ以テ商法ヲ發布シ、二十四年一月ヲ以テ實施セントセリ。是固ヨリ緊急ノ要務ナレバナリ。其後第一期議會ハ二ケ年ノ延期ヲ議決シ、政府モ亦其輿論ヲ容ルヽニ吝カナラズ、遂ニ之ニ同意ヲ表シ、夫ヨリ相當ノ手續順序ヲ經テ既ニ二十六年一月ヨリ實施スルコトト定リタリ。卽此既定ノ法典ハ獨リ既定ノ期限ニ依リテノミ實施セラルベキハ寔ニ正當ノ事ト信ズ。然ルニ今又其期限ヲ短縮シ、其一部ヲ實施セントスルガ如キハ既定ノ法典ヲ紛擾シ錯雜セシムルノ端緒ヲ開クモノニアラズヤ。是本官ガ此案ニ對シ遺憾ヲ抱ク次第ナリ。

二十五年四月中松方總理大臣ハ民法商法ヲ修正セン爲メ、第三帝國議會開會ノ前ニ當リ政府部內ニ委員ヲ設置シ、之ガ審査ニ從事セシムルノ得策ナルヲ唱說シ、閣員中一二同意者アルニ到レリ。不二麻呂卽チ其說ノ極メテ不可ナルヲ痛論シ、尙意見書ヲ草シ閣員一同ニ回呈セリ。其意見書ハ左ノ如シ。

民法商法修正委員設置ニ對スル意見

民法商法實施ノ必要ナキコトハ今更ニ喋々スルヲ須ヒズ。然ルニ初期帝國議會ノ議決ニ因リ、

商法ノ施行ヲ延期セラレ、其結果遂ニ特別委員ヲ設ケ民法商法ヲ併セテ審査修正セシメントノ建議ヲ爲スモノアルニ至レリ。其說ニ曰ク、該法ノ規定スル所往々民情ニ違ヒ習慣ニ背キ、且其法文難澁ニシテ意義明晰ヲ缺ク云々ト、夫レ或ハ然ラン、然リト雖ドモ人定ノ法律ハ初メヨリ其完全無缺ヲ期シ難シ。宜ク數年經驗ノ後實際ノ利害得失ヲ考究シ、改正修補シテ以テ其完全ヲ望ムベシ。故ニ民法商法ノ如キモ之ヲ實施シテ多少ノ歲月ヲ經過スルトキハ、人々各自ラ善ク該法ノ意義ヲ了知スルヲ得ベシ。既ニ善ク之ヲ了知スレバ始メテ其果シテ民情ニ違フヤ否、習慣ニ背クヤ否ヲ論議スルコトヲ得ベシ。若シ夫レ實際ノ經驗ニ據ラズ徒ラニ其利害得失ヲ評論シ、甲ノ編纂ニ係ルモノハ乙之ヲ不可ナリト爲シ、丙ノ修正ニ出ルモノハ丁之ヲ不當ナリトシ、修正又修正空論更ニ空論ヲ加フルトキハ到底窮極スル所ナカルベシ。果シテ然レバ其修正シタルモノハ必ズ皆民情ニ違ハズ習慣ニ背カザルコトヲ得ルヤ甚ダ疑ナキ能ハズ。何トナレバ則チ其修正ノ根據トスル所ハ未ダ曾テ之ヲ實際ノ經驗ニ徵シ其利害得失ヲ考究セザルモノナルヲ以テナリ。加之民法商法中假リニ修正スベキ所アリト爲スモ其施行期限前餘ス所僅ニ半年餘ニ過ギズ。半年餘ノ日子ヲ以テ浩瀚ナル兩法典ヲ修正スルハ決シテ爲シ得ベキコトニアラザルナリ。夫ノ法文ノ難易ニ至テハ則該法ノ編纂者ト雖モ故ラニ其難澁ナルモノヲ用ヒタルニアラズ。唯其法意ノ含蓄スル所從來慣用ノ文字能ク之ヲ盡スベカラザルガ故ニ已ムヲ得ズシテ新造シタルモノナルベシ。今若シ之ヲ修正セバ則或ハ幾分ノ簡易明晰ヲ得ルモノアルベシト雖モ、苟クモ其趣旨ニシテ異ナラザル以上ハ未ダ以テ既定ノ法律ヲ變更スルノ理由ト爲スニ足ラズ。然ルヲ尙民法商法ハ直チニ實施ス可ラザルモノト爲シ、更ニ之ヲ審査修正セシメン乎、政府十餘年幾多ノ心力ト幾多ノ國財トヲ費シ立法院ノ議決ヲ經既ニ相當ノ法式ヲ以テ發布セラレタル成典ハ忽チ變ジテ未定ノ草案トナリ、法律裁可ノ效力ハ之ガ爲メニ消滅シ、公布執行ノ命令ハ之レガ爲メニ破毀セラレントス。

抑々民法商法ハ未ダ之ヲ施行セザルモ政府ハ既ニ之ヲ執行スルノ責任ヲ負ヒ、人民ハ之ヲ遵守スルノ義務ヲ負フタルモノニシテ、固ヨリ他ノ法律ト擇ブ所ナシ。然ルニ民法商法ヲ見ルコト恰モ未定ノ草案ニ對スルガ如ク、直ニ之ヲ審査修正セントスルハ法律ヲ蔑視スルノ所爲ニシテ、實ニ法律歷史上ノ一大汚點タルヲ免レズ。故ニ今政府ハ唯當サニ銳意專心其已レニ命ゼラレタル法律執行ノ責ニ任ジ、民法商法ヲ施行シテ沮碍ナカラシムルコトヲ務ムベシ。然ル後之ヲ實驗ニ徵シ果シテ修正ヲ要スルモノアルヲ見出スコトアラバ直チニ相當ノ委員ヲ撰定シテ十分ノ審査修正ヲ爲サシムルコソ至當ノ順序ナルベシ。苟モ其然ラザルニ先ンジ政府自ラ修正ヲ唱ヘ、委員ヲ設置セントスルガ如キハ不二麻呂ノ斷ジテ同意スル能ハザル所ナリ。

明治廿五年四月廿一日

司法大臣子爵　田中不二麻呂